

大菩薩峠 「安房の国の巻」 中里介山

一

この巻は安房あわの国から始めます。御承知の通り、この国はあまり大きな国ではありません。

信濃、越後等の八百方里内外の面積を有する、それと並び立つ時には、僅かに三十五方里を有するに過ぎないこの国は哀れなものであります。むしろその小さな方から言つて、壹岐いさぎの国の八方里半というのを筆頭に、隱岐おきの国が二十一方里、和泉いずみの国が三十三方里という計算を間違ひのないものとすれば、第四番目に位する小国がすなわちこの安房の国であります。

小さい方から四番目の安房の国。そこにはまた小さいものに比例して雪をいたたく高山もなく、大風の動く広野もないことは不思議ではありません。源を嶺岡みねおかの山中に発し、東に流れて外洋に注ぐ加茂川がまさにこの国第一の大河であつて——その源から河口までの長さが実に五里ということは、何となく滑稽の感を起すくらいのものであります。

さればにや、昔の物の本にも、この国には鯉こいが棲すまないと書いてありました。鯉は魚中の靈あるものですから、一国十郡以下の小国には棲まないのでさうです。そうしてみれば一国四郡（今は一国一郡）の安房の国に、魚中

の靈魚が来り棲まないということも不思議ではありません。まい。

こうして今更、安房の小さいことを並べ立てるのは、背の低い人をわざと人中へ引張り出してその身の丈たけを測つて見せるような心なき仕業しわざに似ておりますが、安房の国の人よ、それを憤いきどおり給うな。近世浮世絵の大宗匠おほし匠菱川師宣ひしかわもろのぶは、諸君のその三十五方里の間から生れました。源頼朝が石橋山の合戦に武運拙つたなく身を以て逃れて、諸君の国に頼つて来た時に、諸君の先祖は、それを温かい心で迎え育てて、ついに日本の政権史を二分するような大業を起させたではありませんか。それからまた、形においてはこの大菩薩峠と兄弟分に当る里見八犬伝は、その発祥地を諸君の領内の富山とやまに求めているし、それよりもこれよりもまた、諸君のために嬉し泣きに泣いて起つべきほどのことは、日蓮上人がやはり諸君の三十五方里の中から湧わいて出でたことであります。

「日蓮は日本国東夷東条、安房の国海辺の旃陀羅せんだらが子なり。いたづらに朽くちん身を法華經の御故おんゆゑに捨てまゐらせん事、あに石を金こがねにかふるにあらずや」

日蓮自ら刻みつけた銘の光は、朝な朝な東海の上ののぼる日輪の光と同じように、永遠にかがやくものでありましよう。

その日蓮上人は小湊こみなとの浜辺に生れて、十二歳の時に、同じ国、同じ郡の清澄きよすみの山に登らせられてそこで出家を遂げました。それは昔のこととて、この時分は例の尊王攘夷そんのうじょういの時であります。西の方から吹き荒れて来る風

が強く、東の方の都では、今や屋台骨を吹き折られそうに気を揉んでいる世の中でありましたけれど、清澄の山の空気は清く澄んでおりました。九月十三日のお祭りには、房総二州を東西に分けて、我と思わんもの素人相撲があつて、山上は人で埋まりましたけれど、それは三日前に済んで、あとかたづけも大方終つてみると、ひとときわひっそりしたものであります。

周囲四丈八尺ある門前の巨杉の下には、お祭りの名残りの塵芥や落葉が堆く掻き集められて、誰が火をつけたか、火焰は揚らずに、浅黄色した煙のみが濛々として、杉の梢の間に立ち迷うて西へ流れています。その煙が夕靄と溶け合つて峰や谷をうずめ終る頃に、千光山金剛法院の暮の鐘が鳴りました。

明徳三年の銘あるこの鐘、たしか方広寺の鐘銘より以前に「国家安康」の文字が刻んであつたはずの鐘、それが物静かに鳴り出しました。その鐘の声の中から生れて来たもののように、一人の若い僧侶が、山門の石段を踏んでトボトボと歩き出しました。

身の丈に二尺も余るほどの金剛杖を右の手について、左の手にさげた青銅の釣燈籠が半ば法衣の袖に隠れて、その裏から洩れる白い光が、白蓮の花びらを散らしながら歩いていようです。

身体はこうして人並より、ずっと小柄であるのに、頭部のみがすぐれて大き過ぎるせいか、前こごみに歩いてみると、身体が頭に引きずられそうで、ことにその頭が法然頭——といつて、前丘は低く、後丘は高く、その

間に一凹の谷を隔てた形は、どう見ても頭だけで歩いてゐる人のようであります。

「え、何ですか、どなたが、わたしをお呼びになりましたか」

この頭の僧侶は急にたちどまつて、四辺を見廻しました。見廻したけれども、そのあたりには誰もおりませんでした。いないはずですが、実は誰も呼んだ人は無いのだから。それにも拘らず、かんのせい知らん、しきりにその異様な頭を振り立てて、聞き耳を立てていました。どうも、この人は眼よりは耳の働く人であるらしい。いや、眼が全く働かない代りに、耳が一倍働く人であるらしい。

「弁信さん」

今度は、たしかに人の声がしました。姿はやつぱり見えないけれども、それは焚火の燃え残っている四丈八尺の巨杉の幹の中程から起つたことはたしかであります。

「エ、茂ちゃんだね」

頭の僧侶はホツと息をついて、金剛杖を立て直して、巨杉の上のあたりを打仰ぎました。

杉の枝葉と幹との間に隠れている声の主は誰やらわからないが、それが子供の声であることだけはよくわかります。

「弁信さん、お前また高燈籠を点けに行くんだね、近いうちに大暴風雨があるから気をおつけよ」
木の上の主がこう言いました。

「エ、近いうちに大暴風雨があるって？ 茂ちゃん、お

前、どうしてそれがわかる」

「そりゃ、ちゃんとわかるよ」

「どうして」

「蛇がどっさり、この木の上に登っているからさ」

「エ、蛇が？」

「ああ、蛇が木へのぼるとね、そうすると近いうちに雨が降るか、風が吹くか、そうでなければ大暴風雨があるんだとき。それで、こんなにたくさん、蛇が木の上へのぼったから、きつと大暴風雨があるよ」

「いやだね、わたしや蛇は大嫌いさ、そんなにたくさん蛇がいるなら、茂ちゃん、早く下りておいでな」

「いけないよ、弁信さん、おいらはその蛇が大好きなんだから、それを捉まえようと思つて、ここへ上つて来たんだよ、まだ三つしか捉まえないの」

「エ、三つ！ お前、そんなに蛇を捉まえてどうするの、食いつかれたら、どうするの、気味が悪いじゃないか、気味が悪いじゃないか、およしよ、およしよ」

「三つ捉まえて懐ろに入れてるんだよ、食いつきやしななさ、慣れてるから食いつくものか、あたいの懐ろの中で、いい心持に眠っていらあ」

「ああいやだ、聞いてもぞっとする」

盲法師は木の上を見上げながら、ぞっとして立ち竦みました。

「だっていいだろう、なにも、あたいは蛇を苛めたり殺したりするために、蛇を捉まえるんじゃないからね」

木の上では申しわけのような返事です。

「それにしたつてお前、蛇なんぞ……早く下りておいで」
「もう二つばかり捉まえてから下りるから、弁信さん、お前、あたいかまわずに燈籠を点けに行つておいで」
木の上の悪太郎は下りようもしないから、盲法師は呆れた面で金剛杖をつき直しました。

二

浪切不動の丘の上に立つ高燈籠の下まで来た盲法師は、金剛杖を高燈籠の腰板へ立てかけて、左の手首にかけた合鍵を深ると、潜り戸がガラガラとあきました。杖は外に置いて、釣燈籠だけは大事そうに抱えて中へ入った盲法師、光明真言の唱えのみが朗々として外に響きます。

唵阿謨迦毘盧遮那摩訶菩提羅摩尼鉢曇摩怛婆羅波羅

コトコトと梯子段を登る音が止んで暫らくすると、六角に連子をはめた高燈籠の心に、紅々と燈火が燃え上りました。光明真言の唱えは、それと共に一層鮮やかで冴えて響き渡ります。

その余韻が次第次第に下へおりて来た時分に、前の潜り戸のところへ姿を現わした盲法師の手には、前と同じような青銅の釣燈籠が大事に抱えられていましたけれど、持つて来た時とは違って、その中には光がありませんでした。そのはずです、中に入った光は、高くあの六角燈籠の上へうつされているのです。その光をうつ

さんがためにこうして、トボトボと十町余りの山道を杖にすがってやって来たのですから、今はその亡骸なきがらを提げて再び山へ戻るのが、まさにその本望でなければなりません。

「え、何ですか、どなたか、わたしをお呼びになりましたか」

前に腰板へ立てかけておいた金剛杖を、再び手に取るうとして盲法師は、また聞き耳を立てました。これがこの盲法師の癖かも知れません。誰も呼ぶ人はないのにまづ自分の耳を疑わないで、あてもないところを咎め立てしてみるのには、今に始まったことではありませんでした。金剛杖は手に持ったけれども、やはりその場は動かないで、怪しげな頭を振り立てて、前後左右の気配をみていくようです。

しかしながら、ここは前と違って、あたりに大木もなければ人家もありません。往來の山道よりは少し離れて高く突き出したところですから、わざわざでなければ、この夕暮に人が上って来ようとは思われないうところですよ。

それにもかかわらず、盲法師はその人を見つけたかのように、いったん手に取った金剛杖をまたもとのところへさしかけて、

「どう致しまして、これは、わたしから御前ごぜんにお願いして、強たってやらせていただく役目なのでございます、決して言いつけられてやっているお役目ではございません。わたしですか、今年十七になりました、エエ、この

お山へ参ったのが日蓮上人と同じことの十二歳でございました。こんな眼の不自由になったのはいつからだとおっしゃるんですか。それは、つい近頃のことですよ。もつとも小さい時分から眼のたちはあまりよくはございませんでしたかね、この春あたりからめつきり悪くなりました、桜の花の咲く時分に、ポーッとわたしの眼の前へ霞かすみがかかりましたよ、その霞が一時取れましたがね、秋のはじめになると、またかぶさって参りましたよ、今度は霞でなくて霧なんですよ、その霧がだんだんに下りて来て、今では、すっかり見えなくなりました。へえ、そりゃ随分悲しい思いをしましたよ、心細い思いをしましたよ。けれども泣いたって喚わめいたって仕方がありませんね、前世の業ごうというのが、これなんです、つまり無明むみ長夜ようちやうやの闇に迷う身なんでございますね。その罪ほろぼしのために、こうやって毎晩、この燈籠を点けさせていただく役目を、わたしが志願を致しました、自分の眼が暗くなつた罪ほろぼしに、他様ひとさまの眼を明るくして上げたいというわたしの心ばかりの功德くどくのつもりでございませよ。ナニ、雨が降つたつて風が吹いたつて、そんなことは苦になりませんよ、毎晩こうやってお燈とうみ明みをつけて行く心持と、高燈籠へ火をうつして油がぼーと燃える音、それから勤めを果して、こうしてまた帰って来る心持と、それが何とも言えませんね……雨風といえ、近いうちに大暴風雨おおあらしがあるつて、あの茂太郎がそう言いました、大暴風雨のある前には、蛇が沢山樹の上へのぼるんだそうですがね、本当でしょうか知ら、まあ、お気を

つけなさいまし」

誰も相手が無いのに、盲法師はこう言ってから、金剛杖を取り上げてそろそろ歩き出しました。

三

けれども、その夜から翌日へかけては、べつだん雨風の模様は見えませんでした。三日目になって朝から曇りはじめたといえは曇りはじめた分のことで、これまた急には雨風を呼ぼうとも思えません。江戸の方面とても無論それと同じ気圧に支配されているのですから、その日の亥の刻に江戸橋を立つ木更津船は、あえて日和を見直す必要もなく、若干の荷物と二十余人の便乗の客を乗せて、碇を揚げようとする時分に、端舟の船頭が二人の客を乗せて、大童で漕ぎつけました。

その二人の客の一人は、どうも見たことのあるような年増の女です。つとめて眼に立たないようにはしているけれど、こうして男ばかりの乗客の中へ、息をはずませて乗り込んでみると、誰もその脂の乗った年増盛りに眼を惹かれないわけにはゆかないようです。この女は、両国橋の女軽業の親方のお角であります。

「庄さん、それでもよかったね、もう一足後れると乗れなかったんだわ」

「いいあんばいでございましたよ」

お伴であるらしい若い男は、齒切れのよい返事をして、「皆さん、少々御免下さいまし、おい、小僧さん、ここ

へ敷物を二枚くんな。親方、これへお坐りなさいまし、ここが荷物の蔭になってよろしうございます」

船頭の子から敷物を二枚借り受けて、酒樽の蔭のほどよいところへ、それを敷きました。帆柱の下にあたる最上の席は、もう先客に占められているのだから、まあ、この若い者が見つくろつたあたりが、今では恰好のところであろうと思われれます。

お角は遠慮をせずその席へつくと、若い者がその傍へ、両がけの荷物を下ろして、どっかと坐り込みました。

「なんだか天気がちつとばかりおかしいけれど、明日の朝の巳の半ごろには木更津へ着くって言いますから、案じるがものはありますまいねえ」

若い者が空を仰ぐと、お角も空模様を見て、「降りはずまいけれど、なんだか、いやに蒸すようじゃないか」

程経てこの船が海へ乗り出した時分に、帆柱が押立てられて、帆がキリキリと捲き上げられると、船は遽に勢いを得て、さながら尾鰭を添えたようであります。乗合の人も、大海へ出た心持になりました。そこへ船頭が立ちはだかつて、乗合の客の頭数を読み上げて、

「ちよつとお待ちなさいよ、乗合の衆はみんなでエート二十三人でござんすね、二十三人、間違いはございませんね」

駄目を押すと乗合の客は、いずれも面を見合せて黙っています。そこで船頭はもう一ぺん乗合の頭の上を見渡して、

「それで、女のお客さんは……エート、おかみさんお一人ですね、女のお客さんは一人しか無えんでございますかね」

と言つて船頭は、例のお角の面をじつと見つめています。

「ええ、わたし一人のようですよ」

お角はわるびれずに答えました。

「そうですか、それじゃあ、どうかこつちの方へおいでなすつて下さいまし、その帆柱の下においでなさるお年寄のお方、済みませんがそこところのお席を、このおかみさんに譲つて上げておくんないまし」

「え、ここをどうするんだね」

「済みませんがね、船のオキテですからね、女の方が一人客の時には、その方の上座を張らして上げなくっちゃならねえんです、それというのは船は女ですからね、腹を上にして物を載せるから、女にかたどつてあるんでござんさあ、だから船玉様も女の神様でござんさあ、女のお客がよけいお乗りなすつた時は、そうもいかねえが、一人っきりの時は、その女のお客様を上座へ据えて船玉様のお側にいたただくんでさあ、船に乗つた時だけは野郎の幅が利かねえんだから、ふしようにしておくんなせえな」

こう言われると年寄のお客、それは深川の炭問屋の主人だというのが納得して、

「なるほど、そういうわけでしたか。そういうわけならば、さあ、おかみさん、こちらへおいで下さい、若い衆さんもここへおいで下さいましよ」

快く席を譲つてくれました。その因由を聞いてみると

お角も、強いてそれを遠慮するような女ではありません。

「まあ、ほんとにお気の毒に存じます、では、船のえんぎでございませうから、あとから参りまして、女のくせにお高いところで御免を蒙ります。庄さん、お前もそれでは御免を蒙つてここへ坐らせていただいたらいいでしょう」

こんなわけで、座席の入れ替えが無事に済みました。お角はこの船の中で、神様から二番目の人にされてしまいました。

まもなくお角は、その隣席にいる例の深川の炭問屋の主人と好い話敵になりました。

「どちらへいらつしやいますね」

炭問屋の主人がまずこう言つて尋ねると、お角がそれに答えて、

「はい、木更津から那古の観音様へ参詣を致し、ことによつたら館山まで参ろうと思つてございませう」

「ごゆさんでございませうかね」

「そういうわけでもございませう、少しばかり尋ねたい人がありまして」

「ははあ、なるほど」

炭問屋の主人は腮を撫でて、ははあなるほどと言いましたけれども、それは別に見当をつけて言つたわけではありません。本来この女が今時分、房州あたりまでゆさんに出かけるはずの女子でもないし、また、そちらの方に尋ねる人があつてという言い分も、なんだかお座なり

のように聞えます。と言って、今日はいつぞや甲州まで、がんだり百を追いかけて行ったような血眼でもなく、お供をつれておちつき払って構えているのは、何か相当のあたりがなければならぬはず。すでに相当のあたりがあつて出かける以上は、転んでも只是起きない女だから、何か一やま当てるつもりなのでしょう。炭問屋の主人は、そこまで詮索してみようという気はありませんから、いつしか自分の案内知った房州話になつてしまいました。

那古へ行くならば鋸山の日本寺へも参詣をするがよいとか、館山あたりへ行つてはこの旅籠が親切で、土地の人氣はこうだというようなことを、お角に向つて細かに案内をしてくれるのであります。お角がそれを有難く聞いていると、ほかの乗合までが、それぞれ口を出して、炭問屋の主人の案内の足らざるを補うものもあるし、また突込んで質問をはじめめる者も出て来ました。はじめはお角と炭問屋の主人だけの房州話であつたのが、今はお角をさしおいて、最寄りの人たちが炭問屋の主人を中心に置いての房州話となりました。

その話のうちで最も多く一座の興味を惹いたのは、鋸山の日本寺の千二百羅漢の話でありました。その千二百羅漢のうちには必ず自分の思う人に似た首がある。誰にも知られないようにその首を取つて来て、ひそかに供養すると願ひ事が叶うという迷信から、近頃はしきりにあの羅漢様の首がなくなるという話が、誰やらの口から語り出されると、一座の興を湧かせます。

羅漢様の首を盗む者のうちには、妙齡の乙女もある。血の氣に燃え立つ青年もある。わが子を失うて、その悲しみに堪えやらぬ母親もある。最愛の妻を失うた夫、夫を失うた妻もある。そうして一旦盗んで来た首をひそかに供養して、更に新しい胴体をつけて、また元へ戻すと、生ける人ならばその思いが叶い、死んだものならばその魂が浮ぶ……という話が興に乗つた時分には、もう日が暮れて風がようやく強く、船が著しく揺れ出したように思われるけれど、話の興に乗つた一座の人々は、それをさのみ気にする様子もなく、

「それからまた、芳浜の茂太郎は、ありやどうしましたろうね」

酒樽の蔭から、若いのがこう言いました。

「芳浜の茂太郎は、今あすこにはおりませんよ、あんまり悪戯が過ぎたもんだから、なんでも清澄のお寺へ預けられてしまったということでござんすよ」と答えるものがありました。

日本寺の千二百羅漢に次いで、芳浜の茂太郎なるものが多少でも問題になることは、それが何かの意味で土地の名物でなければなりません。

「エ、芳浜の茂太郎が、清澄のお寺へ預けられたんですって？」

それにいちばん驚かされたらしいのが、芳浜の茂太郎なるものとは、縁もゆかりもなかりそうなお角であつたことは意外です。

「とうとう清澄のお寺へ預けられてしまったというこつ

てす」

「そうですか、それは惜しいことをしましたね」

心から力を落したようなお角の言いぶりでしたから、

「おかみさん、あなたもあの子を御存じなんでございませるか」

「エエ、ちつとばかり……」

「左様ですか」

炭問屋の主人が改めてお角の面を見直しました。上総房州あたりへは初めてであると言った人が、芳浜の茂太郎なるものを知っているということが、どうやら腑に落ちなかつたものようです。

「その清澄のお寺とやらまでは、あれからまだよほどの道のりがあるんでございませうか」

「そうですよ、遠いといったところが同じ房州のうちですから、道程にしては知れたものですが、なにしろ、内と外になっておりますからな、道はちつとばかりおつくう、なんでございませぬ、上総分で天神山というのへおいでなされると、あれから亀山領の方へかけて間道がありませんで、その間道をおいでになるのがよろしかろうと思ひますよ。あの道は、昔、日蓮様なども清澄から鎌倉へおいでなされる時は、しょっちゅうお通りになった道だそうですね。ですから、それをお通りなされるのが芳浜からは順でございませうよ。左様、里数にしたら六里もありませうかな」

こんな話をしている時に、船が大きな音を立てて著しく揺れました。それは東南から煽った風が波を捲いて、

竜巻のように走って来て、この船の横腹にど、と当って砕けたからです。

「エ、冷てえ」

薄暗い中に坐っていたものの幾人かが、ブルツと身慄いをして、自分たちの肩を撫でおろしました。

四

それはいま砕け散った波のしぶきを多少ともにかぶつたからのことで、その時に、はじめて海の風が穏かでないのみならず、天候もなんとなく険悪になっていたことを氣のついた者もありました。左へ夥しく揺れた船は、それだけ右へ押し戻されました。立っていた人は、よろよろとして帆柱の繩に身を支えて、危なく転げ出すことを免れたものもありました。

「おい、船頭さん、大丈夫かい、なんだか天氣が危なくなつたぜ、風がひどく吹募るじゃねえか」

船頭に向つて駄目を押すものがありました。船の中にあつては船頭の一顰一笑も、乗合の人のすべての心を支配することは、いつも変りがありません。

「ナニ、大したことはござんせんがね、これが丑寅に変らなけりやあ大丈夫ですよ。そんなことはありやませんよ。それでもこの分じゃ、ちつとばかり荒れますよ」

船頭はこう言つて乗客の不安を抑えておいて、一方には水主の方へ向つて、

「やい、つかせてやれ、開いちゃ悪いぜ、まきり直して

乗り落すようにしねえと凌ぎがよくねえや、そのつもりでやってくれ、いいかい」

大きな声で怒鳴りました。

「おーい」

水主や荷揚が腕を揃えて帆を卸しにかかるうとする時に、颯弗として一陣の風が吹いて来ました。

「あ、こいつは堪らねえ」

その沫を浴びた者が、荷物の蔭へ逃げ込むと、

「上からも落ちて来たようだぜ」

果して水は、横から吹きかけるのみではありません。

真暗になった天から、パラパラと雨が落ちて来たのを覚った時分に、船は大きな丘に持ち上げられるような勢いで迂り出しました。そうして或るところまで持つて行かれるとグルリ一廻りして、どうツと元のところへ戻されて行くようです。

「さあ、いけねえ」

乗合はそれぞれしつかりと、手近なものへ捉まりました。

「下へ降りておくんなさい、急いじゃ駄目だ、この綱へつかまって静かに、静かに」

船頭と親仁は声を囁らして乗客を一人一人、船の底へ移します。船の底の真暗な中へ移された二十三人の乗合は、そこで見えない面をつき合せて、

「どうも、あたしゃ、この暴風というやつが性に合わねえのさ。だからいったい、船は嫌いなんですがね、都合がいいもんだから、つい、うっかりと乗る気になって、

こんなことになっちゃったんでさあ。困ったなあ。どうでしょう、皆さん、間違いはありやしませんか、また一方から、

「なあに、大したことがあるもんですか、どっちへ転んだって内海じゃございませんか、これだけの船が、内海で間違いなんぞあるはずのものじゃございませんよ」

存外おちついた声でそれをなだめるものもあります。

「ですけれどもねえ、内海だからといって風や波は、別段にやさしく吹いてくれるわけじゃありませんから

ね。昔、日本武尊様が大風にお遭いになったのはこの

辺じゃございますまいか。あの時だつてあなた……あの

通りの荒れでござんしょう」

情けない声をして、太古の歴史までを引合いに出して

くるから、

「ふ、ふ、ふ、あの時はあの通りの荒れだったといった

つてお前さん、あの時の荒れを見て来たわけじゃござん

すまい、第一あの時代と今日とは、船が違いまさあ、船

が……」

と言った時に、その船が前後左右からミシミシミシと揉

み立てられる音に、一同が鳴りを静めてしまいました。

暫らくは、うんがの声を揚げる者がありませんでした。

外はどのくらい荒れかわからないが、今まで木の葉の

ように弄ばれていた船が、グルグルと廻りはじめたか

かと思うと、急にひとところに停滞して、何物かに揉み碎

かれていますらしい物音です。

そこで、「船が……」と言ったものから真先に口を噤んでしまつて真暗な中に、おのおの面の色を変えたが、幸いに、船は揉みほごされて凝りを取られたように、真一文字に走り出したらしい。どこへ走り出すのか知らないが、ともかく、揉み砕かれるよりは走り出したのが、いくらかの気休めにはなつたと見えて、

「船は違ひましょうけれど、風は昔も今も変わりませんからね」

今度は誰も返事をする者がありません。船は、やはりミシミシと音を立てながら、矢のように進んで行くらしい。

「いよいよよという時は、なんだつてじゃありませんか、みんな、それぞれ持っているいちばん大切なものを一品ずつ海の中へ投げ込むと、それで風が静まるというじゃありませんか。身につけた大切なものを、わだつみの神様に捧げると、それで難船がのがれるというじゃありませんか。もし、そういうことになつたら、私共あ、私共あ……」

その時に、甲板の上、ここから言えば天井の一角から、不意に強盗が一つ、この船室へつりさげられて来ました。それは鉄の輪を以て幾重にもからげて、どっちへ転んでも、壊れもしなければ油もこぼれないように工夫してある強盗が、天井の一角から下つて来ると、その光を真下に浴びていたお角の姿がありありと浮き出して、二十余人の他の乗合は、影法師のように真黒くうつつて見えません。

「風が變つた、丑寅が戌亥に變つたぞ、気をつけろやーい」

船の上では船員が、挙げてこの恐ろしい突発的の暴風雨と戦つています。こう言つて悲痛な叫びを立てた船頭の声は、山のような高波の下から聞えました。

水主も楫取もその高波の下を潜つて、こけつ転びつ、船の上をかけめぐつていたのが、この時分には、もう疲れきつて、帆綱にとりついたり、荷の蔭に突伏したりして、働く気力がなくなつていました。事実、もう、積荷を保護しようの、船の方向を誤るまいのという時は過ぎて、飛ぶだけのものは飛ばしてしまひ、投げ込むほどのものは投げ込んでしまひ、船の甲板の上は、ほとんど洗うが如くでありました。

ただ船の上にもとのままで残つてゐるのは、帆柱一本だけのようなものです。けれども、こうなつてみると、その帆柱一本が邪魔物です。その帆柱一本あるがために、よけいな風を受けて、船全体が帆柱に引きずり廻されてゐるような形になります。ただ引きずり廻されるのみならず、それがために、ほとんど船が覆えるか、または引裂けるように、帆柱のみがいきり立つて動いてゐるとしか思われません。順風の時は帆を張つて、船の進路を支配する大黒柱が、こうなつてみると、船そのものを呪いつくさねば已むまじきもののように狂い出してゐます。

船の底では、たかが内海だと言つて気休めのようなことを言つていたが、上へ出て見れば、内も外もあつたも

のではありません。

風はもとより、内と外とを境して吹くべきはずはないが、海もまた、内と外とを区別して怒っているものとも覚えません。いったい、どこをどう吹き廻され、或いは吹きつけられているのだから、ただ真暗な天空と、吼え立てる風と、逆捲く波の間に翻弄されているのだから、海に慣れた船人、ことに東西南北どちらへ外れても大方見当のつくべき海路でありながら、さっぱりその見当がつかないのではありません。ややあつて、

「やい、外へ出ろ、外へ出ろ、只事じゃねえぞ、お姫様の祟りだ。さあ、帆柱を叩き切るんだ、帆柱を。斧を持って来い、斧を二三挺持って来い。それから、苫と筵をいくらでもさらって来い、そうして、左っ手の垣根から船縁をすっかり結びちまえ、いよいよの最後だ、帆柱を切っちゃうんだ」

帆柱の下で躍り上つて、咽喉の裂けるほどに再び叫び立てたのは船頭です。ひとしきり烈しく吹きかけた風が、帆柱を弓のように、たわわに曲げて、船は覆えらんばかり左へ傾斜しながら、巴のように廻りはじめました。この声に応じて、

「おーい、おーい」

むくむくと、波風を潜つて、一人、二人、三人、四人、船頭の許まで腹這いながら走せつけて来ます。走せつけて来た彼等は船頭の耳へ口をつけ、船頭は手を振り、声を囁かして、何事かを差図をします。やがて、これらの船人はまた右往左往に船の上を走りまわりました。或る者は

筵をさらって左手の垣へ当てて結え、或る者は筵をかかえて船縁へ縋りつく。

この間に、帆柱からやや離れて上手へ廻った背の高いのが、諸手に斧を振り上げて、帆柱の眼通り一尺下のあたりへ、かつしと打ち込む。

風下にそれを受けた、背の低いのが、それより五寸ほどの下をめぐけて、かつしと打ち込む。両々この暴風雨の中で斧を鳴らして、かつしかつしと帆柱へ打ち込みます。暴風雨はいつか二人の腰を吹き倒して、二人は幾度か転げ、転げてはまた起き直り、かつしかつしと打ち込んでまた転びます。

やがて背の高いのが、斧を投げ捨てたと見ると、腰に差していた脇差を抜いて、はっしはっしと帆綱に向つて打ち下ろすと、斧で打ち込んでおいた帆柱の切れ目が、メリメリと音を立てて柱は風下へ、さきに苫や筵を巻きつけておいた船縁へ向つて、やや斜めに撞と落ちかかりました。

こうして船の底へ下りて来た船頭の姿を見ると、真黒くなつて呻いていた二十余人の乗合は、一度に面を上げて、

「おい、船頭さん、いったいどうなるんだね、ここはどこいらで、船はどっちへ走ってるんだね、大丈夫かね、間違いはないだろうね」

「皆さん、お気の毒だがね……」

「エ！」

「今日の暴風は只事じゃあございませぬ、永年海で苦

「勞した俺共にも見当がつかなくたくれえだから、こりや海の神様の崇りに違えねえ」

「エ！」

「もう船の上で、やるだけの事はやっちゃいましたよ、積荷もすっかり海へ投げ込んでしまった、わっしどもも鬚を切ってしまった、帆柱も叩き切っちゃった、そうして船はもう洲崎沖を乗り落してしまった」

「何だって？ 洲崎沖を乗り落したんだって？ それじやあ、もう外へ出たんだな」

「うむ、もうちつとで外へ出ようとして、巴を捲いているんだ」

「南無阿弥陀仏」

中から一人、跳り上って念仏を唱えるものがありました。それを音頭として、つづいて題目を声高らかに唱え出すものがあります。四辺かまわず喚と声を上げて泣き立てる者もありました。

「まあまあ、皆さん、まだ脈はあるんだからお静かになせえまし、気を鎮めておいでなさいよ……ここでひとつ、一世一代の御相談が始まるんだ。というのね、今いう通り、どうもこりやあ人間業じゃあござんせんよ、たしかに海の神様に見込まれたものがあるんだ、それで、海の神様が、いたずらをなさるんだから、海の神様をお鎮め申さなけりや、この難を逃れっこなし。海の神様というの、竜神様のことよ。こりやあ今に始まったことじやねえのさ、大昔の日本武尊様でさえ、この神様につかまっちゃあ、ずいぶん悩まされたもんだ。だから、その

海の神様に何か差上げなけりやア、この御難は逃れっこなし。どうです皆さん、気を揃えて、ひとつその相談に乗っておくんないまし」

暴風雨に打たれたままの赤裸で、腰帯に一挺の斧を挿んで、仁王の立ちすくんだような船頭が、思いきった顔色をしてこう言つて相談をかけると、

「いいとも、いいとも、今もそのことで噂をしていたところだ、難船の時には、自分の身についているいちばん大事なものを海へ投げ込むと、竜神様のお腹立ちがなるといふことだから、わたしやあもう、この胴巻ぐるみ投げ込むことに、こうしてちゃんと了見をきめてるんですよ」

「わたしやあまた、ここに持っているこの金ののべの煙管が、親ゆずりで肌身はなさずの品でござんすが、これをわだつみの神様に奉納するつもりで、こうして出して置きますよ」

「わしやまた……」

「まあ待つて下さい、皆さん、そんな物を纏めて投げ込んでみたって、この荒れは静まらねえよ」

「それじゃ、どうすればいいんだ」

「この船でいちばん大切なものを、たった一つ投げ込めばそれでいいでさあ」

「エエ！ この船でいちばん大切な、たった一つの物というの、そりや何だ」

「それがなあ……お気の毒だがなあ……」

と言つて船頭は強盗をかざして、凄眼をしてお角の面

をじつと睨みながら、

「人身御供ということですよ」

「エ、人身御供？」

「昔、日本武尊様が、この海で難儀をなすった時の話だ、橘姫様という女の方が、お身代りに立って海へ飛び込んだことは先刻御承知でござんしよう、それがために尊様をはじめ、乗合の家来たちまで、みんな命が助かったのだ、つまり橘姫様のお命一つで、船の中の者が残らず救われたんだ、だから……」

船頭がお角の面を見つめたままでこう言いかけた時に、お角は颯風のように身を起して、

「だから、どうしようと言うの、だから、わたしをどうかしようと言うの」

お角の船頭を睨んだ眼もまたものすごいものでありました。それでも船頭はやっばりお角を睨み返しながら、「いや、お前さんをどうしようというわけじゃあございませぬ、お前さんの量見に聞いてみてえんでございます」

「エ、わたしの量見ですって？ わたしの量見を聞いてどうするの」

「この船の中で、女のお客はお前さんだけなんです、今まで女一人のお客というのはなかったこの船に、今日に限ってお前さんが乗り込むとこの通りの暴風だ」

「それがどうしたの、それじゃあ、わたしが一人でこの暴風を起してもしたように聞えるじゃないか」

「お前さんが暴風を起したんじゃないけれど、お前さんがいるために暴風が起ったようなものだ」

「何ですと、わたしが暴風を起したんじゃないけれど、わたしがいるために暴風が起ったようなものですよ？ 同じことじゃないか、それじゃあ、やっばり、わたし一人がこの暴風を起したということになるんじゃないか、ばかばかしいにも程があったものさ」

外の暴風雨よりも船頭の言い分が、お角にとっては決して穏かに聞えませんでしたから、躍起となって抗弁しました。

「船頭さん、お前、なんだかおかしなことを言い出したね」

お角に附添って来た庄さんという若い男も、堪り兼ねて喧嘩腰になりました。

「いや、おかしいことじゃねえのです、今日に限ってこんなことになるのは、こりやあ必定、船の中に見込まれた人があるのだ、その見込まれたというのほかにねえ、船の中でたった一人の女のお客様を、海の神様が嫉んでいたずらをなさるに違えねえのだから、お気の毒だがその人に出て行って、海の神様にお詫びがしてもらいてえのだ。なにも、こりや俺が無慈悲でいうわけじゃありませんよ、船の乗合みんなの衆のためですよ、もし、お前さんがみんなの衆の命を助けてやりてえという思召しがあるんなら、あの大昔の、あの橘姫の命様の思召しのように……」

と船頭がここまで言い出すと、お角は怏えられませぬ。

「おっと、待っておくれ、待っておくれ、人身御供というのはそのことかね、つまり、わたしにその大昔の橘姫

の命様とやらの真似をしるとおっしやるんだね」

「それよりほかに、この難場を逃れる道がねえのだから、お前さんにはお気の毒だが、乗合の衆のためだ。ねえ、皆さん、この船頭の言うことが不条理かエ」

「……」

「ここで人身御供が上らなけりゃあ、みすみす三十何人の乗合が残らず鱻の餌食になってしまうのだ、それでようござんすかエ」

船頭はこう言つて、乗合の者の頭の上をずらりと見渡したけれど、誰あつてこれに返答する間もなく、お角は猛り立ちました。

「ふざけちゃいけないよ、やい、ふざけやがるな、こんな暴風が起つたのは時の災難だよ、なにもわたしに船に乗つたから、それで暴風が起つたんじゃないや。船に女が一人乗り合せたのがどうしたんだい、はじめのうちには船は女の物だの、正座を張れのと、さんざん人を煽つておいて、この暴風雨になると、みんなわたしにせずけて、人身御供に海へ沈んでくれとはよく出来た。そりゃ昔の橘姫というお方と、わたしとはお人柄が違わあ、第一、この中に日本武尊様ほどのお方がいらっしやるならお目にかかろうじゃないか、みんな自分たちの命が助かりたいから、それで、わたし一人を人身御供に上げようと言うんだらう、虫のいい話さ、ばかにしてやがら。雑魚の餌食にならうとも、我利我利者の手前たちの身代りになつて沈めにかかるような、そんなお安いお角さんじゃないよ。死なばもろともさ、乗合が一人残らず一

緒に行くんでなけりゃ、冥途の道が淋しくつてたまらないよ」

「おかみさん、もうこうなりや、ジタバタしたって仕方がねえ」

船頭は猿臂を伸べて、お角の二の腕をムズと掴みます。「おや、わたしを掴まえてどうしようというの」

お角は、船頭に掴まつた二の腕を烈しく振りほどいて、血相を変えると、

「野郎、おかみさんをどうしようと言うんだ」

附添の若い男が、お角を掩護するつもりで、船頭に武者ぶりついたけれど、腰が定まらないのに船頭の一突きで、無残に突き飛ばされて起き上がることができません。

船頭に掴まつた二の腕を烈しく振りほどいたお角は、そのまま荷物と人の頭とを跳り越えて外へ飛び出しました。

この時分、甲板へ飛び出すことの危険は、人身御供になることの危険と同じようなものであることはわかっているけれど、この女はそれを危ぶんでいるほどの余裕がなかつたものらしくあります。

若い男を突き飛ばしておいた船頭は、腰に差していた斧を無意識に抜き取つて、右の手に引提げたまま、透かさずお角の後を追蒐けました。

乗合全体は総立ちになる途端に、大揺れに揺れた船が何かに触れて、轟然たる音がすると、そのはずみで残らず、撞とぶつ倒されてしまいました。

「わーっ、水、水、水が……」

そこで名状すべからざる混乱が起って、残らずの人が七顛八倒です。七顛八倒しながら、かの上り口のところへ押しかけて、前にお角と船頭とがしたように、先を争うて甲板の上へ走り出そうとして、押し合い、へし合い、蹴飛ばされ、踏み倒され、泣き喚いて狂い廻ります。船の外は真暗な天地に、囂々と吼ゆる風と波とばかりです。船は木の葉のように弄ばれて、すでに振り飛ばすべきものの限りは振り飛ばしてしまいました。綱を増した碇も引断られてしまい、唯一の帆柱でさえも、目通りのあたりから切り折られてしまった坊主船は、真黒な海の中で、跳ね上げられたり、打ち落されたり、右左にいろいろに揉み立てられ、散々に翻弄されて、それでもなお残忍な波濤の間に、残骸を見せつ隠しつしている有様です。

尋常では腰の定まるべくもないこの場合の甲板の上を、転びもせずに、吹き荒れる雨風をうまく調子を取って、ひらりひらりと物につかまりながら走って来るのは、むかし取った杵柄ではなく、むかし鍛えた軽業の身のこなしでもあろうけれど、この女の勝気がいちずに、不人情を極めた手前勝手な船頭の手から逃れて、これに反抗を試みようとして、思慮も分別も不覚にさせてしまったものと見るほかはありません。

片手に斧を引提げて、こけつまろびつ、それを後ろから追いかける船頭とても、本来が決してさほどに、不人情でも、手前勝手でもあるわけではなく、ただ危険が間髪に迫った途端に、その日ごろ持っている海の迷信が

逆上の働いて、こうせねば船のすべてが助からぬ、こうすれば必ず助かるものだと思ひ込ませたその魔力がさせる業でありましょう。

けれども、つづいて先を争うて甲板の上へハミ出した、二人のほかの乗合は無残なものでありました。出ると直ぐに大風に吹き飛ばされて、或る者は切り残された帆縄につかまって助けを呼び、或る者は船の垣根の板に必死にとりすがって海へさらわれることをさけ、辛うじて帆柱の方へ這って行く者も、雨風に息を塞がれて、助けを呼ぶの声さえ立てることができません。

真先に、かの切り残された帆柱の切株にすがりついたお角は、

「さあ、こうしていれば、わたしやこの船の船玉様さ、指でもさしてごらん、罰が当るよ。乗合がみんな死んで、わたし一人が助かるんだらう。いやなこった、いやなこった、人身御供なんぞは御免だよ」

こう言つて凄じき啖呵を切ったけれども、憐むべし、このとき吹き捲った大波は、お角のせつかくの啖呵を半ばにして、船もろともに呑んでしまいました。

五

その翌日の朝は、風の名残りはまだありましたけれど、雨もやみ、空も晴れて、昨夜の気色はどこへやらという天気であります。

洲崎の、もと砲台の下のいわの上立って、しきりに

じゃないでしょうか」

「或いはそうかも知れん」

遠見の番所の下から、洲崎の鼻をめぐって走ることに五六町。

「ああ、やっぱり人だ」

「なるほど、人間ですね」

二人は、その見誤らなかつたことを喜びもし、また悲しみもし、その浜辺に打上げられた人間のところをめがけて、飛ぶように走せつけました。

磯に打上げられている人間は、女でありました。もとよりそれは息が絶えておりました。着物も乱れておりました。肌もあらわでありました。けれども、身体からだそのものは極めて無事なのであります。それは波に打上げられたというよりは、そつと波が持つて来て、ここへ置いて行ったという方がよろしいと思われるくらいであります。

もし、昨夜の暴風雨が、この沖を通う船を砕いて、その乗合の一人であつたこの女だけをここへ持つて来たものとすれば、それは特別念入りの波でなければなりません。そうでなければ海とは全然違つたところから、何者かがこの女を荷になつて来て、寝かして行つたものと思わなければならぬほど、安らかに置かれてあるのであります。さりとて一見ただけでも、これはこの辺にザラに置かれてあるような女ではありませんでした。

「女ですね、江戸あたりから来た女のようにですね、ここにいらに住んでいる女じゃありませんね」

鈍重な清吉もまた、それと気がつきました。

「うむ、昨晚、沖を通つた船の客に相違ないが、しかし……それにしてもは無事であり過ぎる」

駒井甚三郎は、ずかずかと立寄つて、横たわっている女の身体をじつとながめました。髪の毛はもうすっかり乱れていましたが、右手はずつと投げ出して、それを手枕のようにして、左の手は大きく開いているから、真白な胸から乳が、ほとんど露あわです。けれども、帯だけが着物をひきとめて、女というものの総てを保護しているもののようにです。

駒井甚三郎は腰を屈かがめて、女の胸のあたりに手を入れました。

「どうでしょう、まだ生き返る見込みがあるんでございましょうか」

清吉は氣を揉んでいます。

「絶望というほどじゃない、生き返るとすれば不思議だなあ」

駒井甚三郎は、まだ女の乳の下に手を置いて、小首を傾かげています。

「不思議ですねえ」

清吉も同じように、首を傾げると、

「平沙の浦の海は、全くだいたずら者だ」

駒井甚三郎は何の意味か、こう言つて微笑しました。

「エ、いたずら者ですか」

清吉は、何の意味だがわからないなりに、怪訝けげんな面かを

すると、

「うむ、平沙の浦の波はいたずら者とは聞いていたが、これはまたいっそう皮肉であるらしい」

「皮肉ですかね」

清吉には、まだよく呑込めません。

「そうだとも、あの暴風雨の中で、波の中の一組だけが別仕立てになって、ここまで特にこの女だけを持って来て、そーっと置いて帰ってしまったところなどは、皮肉でなくて何だろう。見給え、どこを見てもかすり傷一つもないよ、着物も形だけはひっかかっているし、帯も結んだ通りに結んでいる、水も大して呑んじやいない」

駒井甚三郎は、女そのものを救おうとか、助けなければならんとかいう考えよりは、こうまで無事に持って来て、置いて行かれたことの不思議だか、いたずらだか、波に心あってでなければ、とうてい為し難い仕事のように思われることに好奇心を動かされて、ほとほと呆れているようです。

この時分になって清吉も、漸く知恵が廻って来たらしく、

「そうですね、ほんとにわざととしたようです」と言いました。

「ともかく、早くこれを番所まで連れて行って、手当をしようではないか」

「エエ、わたしが背負って参ります」

清吉は女の手を取って引き起し、それを肩にかけました。

六

それから三日目の夕暮のことでした。駒井甚三郎は鳥銃を肩にして、西岬村の方面から、洲崎の遠見の番所へ帰って見ると、まだ燈火がついておりません。こんなことには極めて几帳面である清吉が、今時分になって燈火をつけていないということは異例ですから、甚三郎は家の中へ入ると直ちに言葉をかけました。

「清吉、燈火がついていないね」

けれども返事がありません。甚三郎の面には一種の不安が漂いました。まず、自分の部屋へ入って蠟燭をつけました。この部屋は、甲府の城内にいた時の西洋間や、滝の川の火薬製造所にいた時の研究室とは違って、尋常の日本間、八畳と六畳の二間だけあります。ただ六畳の方の一間が南に向いて、窓を押しさえすれば、海をながめることのできるようになっていただけが違います。

部屋の中も、昔と違って、書籍や模型が雑然と散らかっているようなことはなく、眼にうつるものは床の間に二三挺の鉄砲と、刀架にある刀脇差と、柱にかかっている外套の着替と、一方の隅におしかたづけられている測量機械のようなものと、それと向き合った側の六畳に、机腰掛が、おとなしく主人の帰りを待っているのと、そのくらいのものです。

それでも、いま点けた蠟燭は、さすがに駒井式で、それは白くて光の強い西洋蠟燭であります。蠟燭を点ける

と、燭台ぐるみ手に取り上げた駒井甚三郎は、さつと窓の戸を押し開きました。窓の戸を開くと眼の下は海です。この洲崎の鼻から見ると、二つの海を見ることができません。そうして時とすると、その二つの海が千変万化するのを見ることもできます。二つの海というのは、内の海と外の洋とであります。内の海とは、今でいう東京湾のことと、それは、この洲崎と、相対する相州の三浦三崎とが外門を固めて、浪を穏かにして船を安くするのそれでありませう。外の洋というのは、亜米利加までつづく太平洋のこととあります。ここの遠見の番所は、この二つの海を二頭立ての馬のように御してながめることのできる、絶好地点をえらんで立てられたものと見えます。

甚三郎が蠟燭を片手に眺めているのは、その外の方の海でありました。内の海は穏かであるが、外の海は荒い。ことに、外房にかかる洲崎あたりの浪は、単に荒いのみならず、また頗る皮肉であります。船を捲き込んで沈めようとしないで、弄ぼうとする癖があります。来ろうとするものを誘き込んで、それを活かさず殺さず、宙に迷わせて楽しむという癖もあります。試みに風凧ぎたる日、巖の上に佇んで遠く外洋の方をながむる人は、物凄き一条の潮が渦巻き流れて、伊豆の方へ向って走るのを見るのができませう。その潮は伊豆まで行って消えるものだそうだが、果してどこまで行って消えるのやら、漁師はその一条の波を「潮の路」といって怖れます。

外の洋で非業の最期を遂げた幾多の亡霊が、この世の

人に会いたさに、遙々の波路をたどってここまで来ると、右の「潮の路」が行手を遮って、ここより内へは一寸も入れないのだそうです。さりとてまた元の大洋へ帰すこともしないのだそうです。その意地悪い抑留を蒙った亡霊どもは、この洲崎のほとりに集まって、昼は消えつつ、夜は燃え出して、港へ帰る船でも見つけようものならば、恨めしい声を出してそれを呼び留めるから、海に慣れた船頭漁師も怖毛をふるって、一斉に艫を急がせて逃げて帰るといふことです。

こんな性質の悪い洲崎下の外洋を見渡して、やや左へ廻ると、それが平沙の浦になります。

「平沙の浦はいたずら者だ」と、おととい駒井甚三郎がそう言いました。

平沙の浦も、その皮肉なことにおいては相譲らないが、それは洲崎の海ほどに荒いことはなく、かえって一種の茶気を帯びていることが、愛嬌といえれば愛嬌です。

平沙の浦がするいたずらのうちの第一は、舟を岸へ持って来ることです。ほかの海では、船を捲き込んだり、誘き寄せたり、突き放したり、押し出したりして興がるのに、この平沙の海は、ずんずんと舟を岸へ持って来てしまいません。岸へ持って来て、いわに打ちつけるような手荒い振舞をせずに、砂の上へ、そっと置いて行ってしまします。

このおてやわらかないたずらは、幸いに船と人命をいためることはありませんが、船と人をでこずらせることにおいては、いっそ一思いに打ち壊してしまふものより、

遙かに以上であります。

平沙の浦の海へ入って見ると、下には恐ろしい暗礁が幾つもある、海面は晴天の日にも、大きなうねりがのた打ち廻っている。漁師たちはそのうねりを「お見舞」と称とよえて、怖れています。いい天気だと思って、安心して舟を遊ばせていると、いつのまにか、この「お見舞」がもくもくと舟を打ち上げて来ます。その時はもう遅い。舟は大きなうねりに乗せられて、岸へ岸へと運ばれてしまふ。帆はダラリと垂れてしまつて、航かじはどう操あやつつても利かない。そうして行かぬうちに舟と人とは、砂の上へ持つて来て、そつと置いて行かれてしまふ。

そのいたずらな平沙の浦の海をながめていた駒井甚三郎は、ふいと気がついて、

「そうだそうだ、あの婦人はどうしたろう、今日はまだ見舞もしなかつたが、清吉がいないとすれば、誰も看病の仕手は無いだらう、燈火あかりもついてはいないようだし」と呟つぶやいて窓を締め、蠟燭を手に持ったままで、壁にかけてあつた提ちようちん灯を取り下ろしてその蠟燭を入れ、部屋を出て縁側から下駄を穿はいて番小屋の方へ歩いて行きました。小屋の戸を難なくあけて見ると、中は真暗で、まだ戸も締めてないから、障子だけが薄ら明るく見えます。「清吉は居らんぬ」

甚三郎は駄目を押しながら、その提灯を持って座敷へ上ると、そこは六畳の間です。その六畳一間の燈火もない真暗な片隅に、一人の病人が寝ているのでした。

その病人の枕まくらもと許へ提灯を突きつけた駒井甚三郎は、

「眠つておいでかな」

低い声で呼んでみました。

「はい」

微かに結んでいた夢を破られて、向き直つたのは女です。かのいたずらな平沙の浦の磯から拾つて来た女であります。

「気分はよろしいか」

甚三郎は提灯を下へ置いて、蠟燭を丁寧ていねいに抜き取つて、それを手近な燭台の上に立てながら、女の容体ようたいをうかがうと、

「ええ、もうよろしうございます、もう大丈夫でございます」

はつきりした返事をして、女は駒井甚三郎の姿を見上げました。

「なるほど、その調子なら、もう心配はない」

甚三郎もまた、女の声と血色とを蠟燭の光で見比べるやうに、燭台をなお手近く引き出して来ると、

「もし、あなた様は……」

急に昂奮した女の言葉で驚かされました。

「ええ、なに？」

甚三郎が、屹きつと女の面おもてを見直すと、

「まあ勿体もったいない、あなた様は、甲府の御勤番支配の殿様ではいらつしやいませんか」

女は床の上から起き直ろうとしますのを、

「まあまあ静かに。甲府の勤番の支配とやらの、それがどうしたの」

甚三郎は、女の昂奮をなだめようとします。

駒井甚三郎は、ここでこの女から、己れの前身を聞かされようとは思いませんでした。女をなだめながら、もしやとその面を熟視しましたけれども、どうも心当りのある女とは受取ることができません。

「わたくしは、あの時から殿様のお姿を決して忘れは致しません」

女は何かに感激しているらしい声でこう言いましたから、甚三郎は、

「あの時とは？」

「それはあの、甲州へ参ります小仏峠の下の、駒木野のお関所で……」

「ははあ、なるほど」

ここにおいて駒井甚三郎は、さることもありけりと思ひ当りました。そうそう、初めて甲州入りの時、一人の女が血眼ちまなこになって、手形なしに関所を抜けようとして関所役人に食い留められた時、駒井能登守の情けある計らいで、わざと目的地の方の木戸へ追い出させたことがある。それだ、その女だなと思ひましたから、

「拙者はトンとお見忘れをしていた。そなたは、あれから無事に、尋ねる人を探し当てましたか」

「はい、おかげさまで……かなり長い間、甲州におりました。その間も、よそながら殿様のお姿をお見かけ申しました。一度、お訪ね申し上げて、あの時のお礼を申し上げたいと思わないではありませんでしたが、何を言うにもこの通りの賤しい女、恐れ多い気が先に立つばかり

で、ついつい御無沙汰を致してしまいました」

「それを承ってみると、縁というものは不思議なものじや。拙者も今は、こんなふうに変っているが、そなたはまたどうして、あのような目に遭われた」

「それをお話し申し上げると長いのでございますが、この房州の芳浜というところまで、人を雇いに参ったのでございます、その途中、舟が暴風雨あつぷりに遭いまして、わたしが、いちばんヒドい目に遭わされるところでしたが、そのヒドい目に遭わされようとしたわたくしだけが助かって、こうして殿様のお世話になっているのかと思うと、ほんとに何かのお引合せのように思われてなりません」

「しかし、よく助かったものじゃ、拙者も自分ながら不思議に堪えられない」

「今朝になりました、清吉さんから、わたくしをお助け下された委細のお話をお聞きしまして、わたしは、ほんとうに神様に守られているんじゃないかと、勿体もったいなくて、涙がこぼれてしまいました」

「ところで、その清吉が見えないが……何とかいうて出て行きましたか」

「いいえ、お正午ひる少し前までここにお見えになりましたが、それから、わたくしは今まで眠っておりました故、何も存じませぬ」

「はて……」

甚三郎は、いよいよ清吉のことが不安になってきました。そうして、次の一本の蠟燭に火をうつして、それをま

た提灯に入れ、

「淋しかろうが、そなたは一人で、暫らくここに留守している気で待っていてくれるように。拙者はこれから清吉を捜して参る」

「まあ、ほんとにあのお方はどちらへおいでになったのでしょうか……いえ、もうわたしも起きられません、どうぞ、お心置きなく。どんなところにおりまして、淋しいなぞと決して思いは致しません。歩けさえ致せば、わたしもお伴を致すのですけれど」

「ちよつと、その辺の様子を見て、ことによると碓場まで行つて来る、その間に、もし清吉が帰つたならば、そのように申してくれるよう」

「畏まりました」

甚三郎は病人のお角にあとを頼んで、提灯をつけて外へ立ち出でました。

駒井甚三郎が出て行つたあとのお角には、夢のように思われてなりません。

甲州城の勤番支配として、隆々たる威勢で乗り込んだ駒井能登守その人を、こんな方角ちがいの辺鄙なところで、こうしてお目にかかるということは、夢に夢見るようなものです。

あの凜々しい、水の垂るような若い殿様ぶりが、今は頭の髪から着物に至るまで、まるで打つて變つて異人のような姿になり、その上に昔は、仮りにも一国一城を預かるほどの格式であったが、今は、見るどころ、あの清吉という男を、たった一人召使っているだけであるら

しい。その一人の男の姿が見えなくなると、御自分が提灯をさげて探しに出て行かねばならないような、今の御有様は、思いやると、おいとしいような心持に堪えられない。

このお住居とても、決して三千石の殿様の御別荘とは受取れない。ほんの仮小屋のようなものとかお見受け申すことはできない。僅かの間に、どうしてこうも落魄れなさつたのだろう。お角は、そのことを考えると、ふいに頭に浮んで来たのは、同じく甲州城内に重き役目をつとめていた神尾主膳のことでありませう。

駒井能登守様が、甲州城をお引上げになると、まもなく神尾の殿様も江戸へお引取りになつた。神尾へはその前後に亘つてお角は始終出入りをしている。それで酔つた時などに甲州話が出ると、神尾主膳は、きつと駒井能登守の悪口をする。その悪口が、いかにも意地悪く、ざまを見ろと言わぬばかりなので、お角はそれを聞くと、なんとなくイヤになるのでした。

神尾主膳については、お角とても決して善良な人だとは信じていないけれど、あれでなかなか話せば話のわかる人だと思つている。あの人を箸にも棒にもかからぬように言うのは、それは、あの人を嘔吐させていないからで、その悪いところだけを避けて、良いところを附き合えば、ずいぶん力になる人であると思つている。けれども、その神尾が、ひとたび駒井能登守の噂になると、酔つているとは言いながら、口を極めて悪く言うことが、お角には不服でもあり、不快でもあるのであります。

何となれば、駒木野の関所以来、お角の眼にうつっている駒井能登守は、男ぶりといい、その情けある仕方といい、若くして人に長たるの器量といい、芝居の中で見る人のように見えるのであります。どこと違って一点でも、難を入れるところのない殿様ぶりに見えるのであります。その学問や見識のことは、お角はまるきり見当がつかないけれども、あんな男らしい男ぶりの殿御を、前にも後にも見たことはないとまで思っているのであります。

それを神尾主膳が、頭ごなしにするからその時は不服で、つい抗弁を試してみる気になると、神尾はいやみな笑いをしながら、

「お前も存外人形食いだ、あんなのが、それほどお気に召すようでは甘いものだ」

なんぞと言われると、お角もムキになって、
「人形食い結構、あんな方に好かれたら、ほんとにわたしは、三年連れ添う御亭主を打棄つても行きませわ、けれどもお気の毒さま、あちら様で、わたしなんぞは眼中にないのですからね」

というようなことを言ったこともありまして。

それは冗談にしても、神尾と駒井との間に、何かの蟠りのあることは疾うに見て取らないわけはありません。その後、神尾へは相変らず親しく出入りしているに拘らず、能登守の方は、ほとんど消息も打絶えて、滅多に思ひ出すことさえなかったのが、今日、このところ偶然、こんなにお世話になることは、やっぱり何かのお

引合せと見ないわけにはゆかないのであります。

お角は、それを思うと、なんだか嬉しいような心持になって、清吉の見えなくなったことよりは、早く甚三郎が帰って来てくれることのみが待たれるのであります。このままでお帰りを迎えては恐れ多いというような心から、床を起き直って、乱れた髪などを撫で上げました。二時間ほどして駒井甚三郎はかえって来ましたから、お角は、

「おわかりになりましたか」

「わからん」

甚三郎は、安からぬ色を深くしていました。

「まあ、どうなすつたのでしょうか」

「そなたを得たことも不思議だが、清吉を失ったことも不思議だ」

甚三郎がこう言った言葉のうちには、多少の絶望が含まれているようです。

「海の方へでも行ったのでしょうか」

「どのみち、海へ行ったのであろうけれど……」

「お怪我がなければようござんすね、この辺の海は荒いそうですから」

「今宵は、もう諦めて、明朝早く探しに行こう。それから、夜中何ぞ急用でも起った時は、その柱の下にある小さなボタンを、三ツばかり押してみるがよい、それが拙者の枕許まで響いて来る。拙者の方でも、何か用事起った時は、同じような仕掛で、この丸いものが鳴り出すようにしてあるから」

これはおたがいの部屋に通ずる電気仕掛のベルでありました。駒井自身の工夫と設計にかかるものであることは申すまでもありますまい。これを押せばむこうのお居間の鈴が鳴るといことが、お角にはなんだか魔術のように思われます。けれども、甚三郎はそれだけの注意を与えたきりで、この小屋とは棟を別に行きましたの、己れの居間へ帰って行きました。

もし明朝になっても、明日になっても、清吉の行方がわからなかつたらどうでしょう。またもし、お角の身体がほんとうに回復したのならよいけれど、これが一時の元氣であつて、明日からまたぶり返して枕が上らないよになつたらどうでしょう。

いったん、捨てられた洲崎の遠見の番所は、まるで孤島の中にあるようなものです。前方は海で、陸続きは近寄る人もありません。

駒井甚三郎と、清吉とは、特にここをえらんで、たった二人きりで無人島同様の生活を好んで、ここに送つていたものと見えます。それがその共同生活の唯一人を失つたとすれば、あとに残るのは駒井甚三郎一人です。更にまた一人を加えたところで、その一人が枕も上らぬ病人であるなれば、その看病人も駒井甚三郎でなければなりません。

三千石の殿様に、自分の看病をさせることが女冥利おんなみょうりに尽きると思ふなれば、お角は、どうしても明日から起きて働かねばならないのです。

その翌日、早朝から駒井甚三郎は、またもこの番所を

立ち出でました。けれども、お正ひら午少し前に帰って来た時には、出て行つた時と同じことに、たつた一人でした。ついにその尋ぬる人を探し当てることができないうで、悄然しょうぜんとして番所の門を潜りました。しかし、それと打つて変つたように元氣になつたのはお角です。甚三郎が帰つて来た時には、もう起き上つて、甲斐甲斐しく働いていました。多分、海へ張つて置いた網を引き出しに行つて、浪に捲き込まれて行方不明になつたものだろうと甚三郎は推察して、それをお角に話し、一方に浪に打上げられた人を救い、一方に浪に捲かれて人を失うのは、偶然とは言いながら、この辺の海は魔物のようであるといふことを、つくづく歎息しました。

お角は、それを聞いて氣の毒がたつて泣きました。

その日から、ここにまた變つた二人の生活が始まりました。二人というその一人の主は、変らぬ駒井甚三郎ですけれども、それを助けるは男でなくて女です。

「といつても、そなたは江戸へ帰らねばならぬ人」
甚三郎に言われた時、

「いいえ、もう帰らなくてもよろしうございますよ」
お角は、きっぱりとこう言いました。なぜこんなに、きっぱりと言ひ得るだらうかといふことが不思議でした。何かの当りがあればこそ、ああして房州へ出て来たのだから、その当りは途中の災難で外れたにしても、この女が江戸へ帰らなくてよいという理由はなかりそうです。江戸でなければこの女の仕事はありそうにもなし、またとにもかくにも、がんりきの百といつたような男を

江戸には残して来てあるはずです。

けれども、駒井甚三郎は、それをよいとも悪いとも言いませんでした。

お角の料理してくれた昼飯を食べてから、また海岸へ出かけて、どこで何をしていたのか、夕方になって帰って来ました。

そうして番小屋の炉の傍で、お角の給仕で夕飯を食べながら話をしました。清吉のことは、もう諦めてしまっているようです。その話のうちに、甲州話がありました。けれども、その甲州話も、政治向のことや勤番諸士の噂などは、おくびにも出ないで、甲州では魚を食べられないとか、富士の山がよく見えるとか、甲斐絹が安く買えるとか、そんな他愛のないことばかりでしたからお角は、この殿様がどうしてかの立派な御身分から今のようになおなりあそばしたかということを探ねてみる隙がありませんでした。

それから、お角の身の上を徐ろに甚三郎が詮索を始めました。詮索というと角が立つけれど、実はそれからそれと穏かに尋ねられるので、お角も、つい繕い切れなくなつて、女軽業の一座を引連れて、甲府の一蓮寺で興行したことから、このごろ再び両国で旗上げをするために、実はこの房州の芳浜というところに珍しい子供がいるそうだから、それを買いに来て、途中この災難ということを、すっかりと甚三郎に打明けてしまいました。打明けねばならぬように話しかけられてしまつて、打明けてから、つい悔ゆるような心持になりましたけれど、

甚三郎は一向、そんなことを念頭に置かぬらしく、

「それは面白い仕事であろう、拙者はまだ軽業というものを見たことがない」

「お恥かしうございます」

さすがのお角も、なんだか赤くなるように思いました。話が済むと甚三郎は、さっさと立って自分の居間へ行ってしまいます。そうして夜おそくまで何かの研究に耽るらしくありましたが、お角は、ひとり取残されたように炉辺に坐っておりました。前に言ったように、この洲崎の遠見の番所は、離れ島のような地位に置かれてあります。前は海で、陸地つづきは、ほとんど交通を断たれているのであります。

お角も、かなりおそくまで、炉の傍に、ぼんやりとして燈火を見つめたり、火箸を取って灰へ文字を書いたりしていましたが、

「わたしや、あの殿様はわからない」

と自棄のようなことを言つて、帯を解いて男の着物を寝衣にして、蒲団をかぶつて寝てしまいました。

けれども、その翌朝は、早く起きて、水を汲んだり、御飯を炊いたり、掃除をしたり、いっぱしの女房気取りで、気持のよいほどの働きぶりであります。

朝の食事が終ると、甚三郎はまた海岸へ出て行きました。正午時分にいったん帰つて、居間へ閉籠つたが、しばらくすると、またどこへか出て行きました。そうして夕方になって戻つて来ました。

夕飯の時は、またお角を相手にして、軽快に四方山の

話を語り出でました。

「そう改まって給仕には及ばん、そなたもここで一緒に」
甚三郎は、強いてお角にすすめて、一緒に夕餐の膳に向いながら、

「人間の一芸一能は貴い、そなたの仕立てた芸人たちの業を、そのうち一度見せてもらいたいものじゃ」

真顔になって、こんなことを言い出しましたから、お角もおかしくなって、

「ねえ……殿様」

思わず膝を進ませると、

「殿様と言っちゃいかん、昔は殿様の端くれであったかも知れんが、今は船頭だ」

「では、何と申し上げたらよろしうございましょう」

「駒井とでも、甚三郎とでも勝手に」

「駒井様、駒井の殿様……なんだかきまりが悪うございまずね。駒井様、そんなことを申し上げると口が曲りそうですけれど、わたしたちには、どうしても、あなた様の御了見がわかりません」

「わからんことはあるまい、浪人して詮方なく、こうしているまでのことじゃわい」

「どうして、あなた様ほどのお方が、これほどまでに落魄れあそばしたのでございましょう」

「自分が悪いからだ」

「殿様……また殿様と申し上げました、あなた様のようなお方に、お悪いことがおありなさるのですか」

「なければ殿様でおられるのだが、あるからかように落

魄れたのだ」

「それは一体、どういう罪なんでもございましょう、あんまり不思議で堪りませんから、それをお聞かせ下さいませ」

「それはな……」

駒井甚三郎は、お角の疑いに何をか嚇られて沈黙しましたが、急に打解けて、

「隠すほどのこともあるまい、実はな、恥かしながら女だ、女で失策つたのだ」

「エ、まあ、女で……」

お角は眼を睜って呆れました。その眼のうちには、幾分か嫉妬が交っているのを隠すことができません。御身分と言ひ、御器量と言ひ、そうしてまた、このお美しい殿様に思われた女、思われたのみならず、これほどのお方を失敗させたほどの女、それは何者であろう。憎らしいほどの女である。その女の面を見てやりたい。お角は、そう思つて呆れている時に、自分の背にしている裏の雨戸に、ドーンと物の突き当る音がしたので吃驚しました。

七

お角は吃驚しましたけれども、甚三郎は驚きません。

「何でございましょう、今の音は」

「左様……」

甚三郎は、なお暫く耳を澄ましてから、

「やっぱり、いたずら者だろう」と言いました。

「え、いたずら者とおっしゃるのは？」

「向うの松原に、小さな稲荷の社がある、あれの主が三吉狐さんきぎつねというて、つい、近頃までも、その三吉狐がこの界限かいはいに出没して、人に戯れたそうじゃ。ことに美しい男に化けて出ては、若い婦人を悩ますことが好きであったと申すこと。ところが、我々がここへ来てからは、とんとそれらの物共が姿を見せぬ、化かしても化かし甲斐がないものと狐にまで見限られたか、それとも、彼等には大の禁物な飛道具や、煙硝えんしょうの臭いで寄りつかぬものか、絶えて今まで悪戯いたずららしい形跡も見えなかったが、たった今の物音でなるほど感づいたわい」

こんなことを言いました。お角はさすがに女だから、それを聞いて、襟元が急に寒くなったように思い、「そんなに性の悪いお稲荷様があるんでございますか」「全く、性質たちしやうのよくない稲荷じゃ。ことにその三吉狐とやらは先祖が男に化けて、村の若い娘と契ちぎり、かえって娘の情に引かされて、大武岬だいぶみさきの鼻というのから身投げをして、心中を遂げてしまったということから、どうもその子孫の狐が嫉みねた、心が強くて、男と女の間まに水を注さしたがると申すこと」

「いやですね」
「だから、この界限で、男女寄り合って話をしていると、必ずその三吉狐が邪魔に来る、それは相思そうしのなかであるうともなかるうとも、男女がさし向いで話をするを、

その狐は理由なしに嫉むねた、そうしてその腹癒はらせのために、何か悪戯をして帰るとのことじゃ。それを思い合せてみると、なるほど、こうして、そなたと拙者、罪のない甲州話こうすわをしているのも、三吉狐に嫉まるるには充分の理由がある、怖いこと、怖いこと」

駒井甚三郎はこう言って笑いました。お角も、それに釣り込まれて笑いましたけれども、それは自分ながら笑っているのだから、笑いごとではないのだから、全く見当がつかなくなりました。

そう言われてみると、今夜、この場合のみならず、この頃中のことが、すべてその三吉狐とやらの悪戯ではあるまいか。三千石の殿様が、こうして落魄おちぶれておいでなさることも夢のようだし、その殿様と自分が、こうして膝つき合わせて友達気取りでお話しているのも疑えば際限がないし、美しい男に化けるのが上手だという三吉狐が、もしや駒井の殿様に化けて、わたしを引っかけているのではなからうか。それにしては、あんまり念が入り過ぎる。そんなにしてまで、わたしを化かさなければならぬ因縁いんえんがありようはずはない……お角はいよいよ気味が悪くなってきた時に、今度は自分の坐っている縁の下で、ミシミシと一種異様な物音がしましたから、

「あれ！」
と言つて甚三郎の傍へ身を寄せました。

それは確かに、縁の下を物が這はっている音であります。その時に駒井甚三郎は、懐中へ手を入れると、革の袋

に納めた六連発の短銃を取り出しました。

お角は、駒井甚三郎なる人が、砲術の学問と実際にかけては、世に双ぶ者のない英才であるということを知りません。また、大波の荒れる時にはあれほどに氣象の張った女でありながら、稻荷様の祟りというようなことを、これほどに怖がるのを自分ながら不思議だとも思いません。

「わたし、なんだか怖くなりました」

こう言って、甚三郎の一面を流し目に見ると、取り出した短銃を膝の上へのせて微笑しているその面が、なんとも言われない男らしさと、水の滴るような美しさに見えました。

そこで、縁の下がひっそりとしてしまいました。ミシミシと音を立ててお角の坐っていた下あたりに這い込んだらしい物の音が、急に静まり返って、兎の毛のさわる音も聞えなくなりました。

「逃げてしまいましたろうか」

「いや、逃げはせん、この下に隠れている」

お角が、おどおどしているのに、甚三郎は相変わらず好奇心を以て見ているようです。

「いやですな、いやなお稻荷様に見込まれては、ほんといやですな」

お角は、座に堪えられないほど気味悪がっているのに、「動けないのだ……」

と言って、甚三郎は膝の上へのせた短銃をながめているのであります。

「おや、小さな鉄砲。殿様は、いつのまにこんなものをお持ちになりました」

お角はその時、はじめて甚三郎の膝の上の短銃に気がついて、そうしてその可愛らしい種子が島であることに、驚異の眼を向けました。

「いつでもこうして……」

甚三郎が、それを手に取り上げて一方に覗いをつけると、なぜかお角はそれを押しとどめ、

「殿様、おうちになつてはいけません」

「なぜ」

「でも、お稻荷様を鉄砲でおうちになつては、罰が当ります」

「罰？」

「ええ、そんなにあらたかなお稻荷様を鉄砲でおうちになつては、この上の祟りが思いやられます」

「ばかなことを」

甚三郎はそれを一笑に附して、

「拙者も好んで殺生はしたくはないが、畜生に悪戯されて捨てても置けまい」

「いいえ、どうぞ、わたしに免じて助けて上げてくださいますし、わたしはお稻荷様を信心しておりますから」

「稻荷と狐とは、本来別物だ」

「別物でも、おんなじ物でも何でもかまいませんから、そうして置いて上げてくださいますし、そのお稻荷様が嫉むなら嫉まして上げようじゃありませんか、ね、そうして置いてお話を承りましょうよ、わたしや化かされるな

ら化かされてもようござんす」

「きつい信心じゃ」

駒井甚三郎は苦笑いして、また短銃を膝の上に置くと、そのとき縁の下で、うーんとうなる声が聞えました。

「おや、殿様、人間でございますよ、お稻荷様じゃございませんよ」

「不思議だなあ」

最初から心を静めて観察するの余裕を持っていた駒井甚三郎が、その物音や、気配を察して、人間と動物とを見誤るほどの未熟者ではないはずです。

科学者であるこの人は、狐に関する迷信の類は最初から歯牙にかけず、ほんの一座の座興にお角を怖がらせてみたものとしても、人と獣の区別を判断し損ねたということは、己れの学問と技倆との自信を傷つくるに甚だ有力なものと言わなければなりません。そこで甚三郎は短銃を片手に、ついと立ち上って、畳の上を荒々しく踏み鳴らしました。

甚三郎が畳の上を踏み鳴らすとちやうど、仕掛物でもあるかのように、それといくらかも隔たつてはいないところの、囲炉裏の傍の揚げ板が下からむっくりと持ち上りました。

「御免なさい」

甚三郎もお角も呆気にと取られてそれを見ると、現われたのは狐でも狸でもなく、一個の人間の子供であります。

「お前は何だ」

あまりのことに甚三郎も拍子抜けがして、己れの大人

げなきことが恥かしくらいでした。

「御免なさい、御免なさい」

と言つて子供は、揚げ板の中から炉の傍へ上つて来ました。

鼠色をした筒袖の袷を着て、両手を後ろへ廻し、年は十歳ぐらいにしか見えないが、色は白い方で、目鼻立ちのキリリとした、口許の締つた、頬の豊かな、一見して賢げというよりは、美少年の部に入るべきほどの縹緞を持つた男の子であります。

「お前さん、どうしたの」

最初は怖れていたお角も、寧ろ人間並み以上の子供であつたものだから、落着いて咎め立てをする勇氣が出ました。

「助けて下さい」

子供はそこへ跪まつてお角の面を見上げました。その時、見ればその眼が白眼がちで、ちらりとした、やや鋭いと言つてよいほどの光を持っているのを認められます。ただ、その身体の形を不恰好にして見せるのは、最初から両手を後ろに廻しつきりにしているからです。

「どこから逃げて来たの」

「清澄山から逃げて来ました」

「清澄山から？」

「ええ、清澄で坊さんに叱られて、縛られました。おばさん、あたいの手を、縛つてあるから解いて下さい」

「縛られてるの、お前さんは」

お角がなるほどと心得て、そこへちよこなんと跪ま

った子供の背後へ廻って見るとなるほど、その小さな両手を後ろに合せて、麻の細い縄で幾重にもキリキリと縛り上げてありました。

お角は一生懸命にその結び目を解いてやろうとして焦ったが、容易には解けそうもありません。

「ずいぶん固く結えてあるわね、これじゃなかなか取れやしない」

お角はもどかしがって、ついにその縄の結び目へ歯を当てました。

「小柄を貸して上げようか」

甚三郎は見兼ねて好意を与えると、お角は首を振って、「いいえ、結んだものですから解けそうなものですね、解けるものを切ってしまうのは嫌なものですから」

お角はしきりに縄の結び目へ歯を当てて、それを解こうとしましたが、いったいどんな結び方をしたものか知らん、ほんとに歯が立ちません。けれども、お角は焦れながらも、いよいよ深く食いついて、面をしかめながらも首を左右に振っています。

「おばさん、ずいぶん固く結えてあるでしょう、岩入坊が縛ったんですからね、とても駄目でしょうよ、口では解けないですよよ、刃物で切っちゃって下さい」

子供は、ややませた口ぶりです、お角のすることの効無きかを諷するように言いますから、こんなことにも意地になったものが見え、

「いま解いて上げるよ、結んだものだから解けなくちゃあならないんだから。切ってはなんだか冥利が尽きるわ

よ」

お角はしきりに縄に食いついて放そうともしません。「岩入坊は縛るのが名人だからね、岩入に縛られちゃ往生さ」

子供は、こんなことを言いながら、お角のするようにさせておりました。

「あ、痛！」

あまり力を入れて、歯を食い折ったか、ただしは唇でも噛み切ったか、面を引いたお角の口許に、にとと血が滲んでおりました。

「解けましたよ」

その時にお角は、クルクルと縄の一端を持ってほごしてしまいました。

子供の手を自由にしてやって、お角は元の座に戻り、紙をさがして口のあたりを拭きました。滲み出した血を、すっかり拭き取って平気な顔をしているから、大した怪我ではないでしょう。

「どうも有難う」

子供はそこで、お角と甚三郎の前へ両手を突いてお辞儀をします。

「清澄から、これまで一人で来たのか」

「エエ、一人で逃げて来ました」

そこで甚三郎は、じつとこの子供の顔を見つめました。清澄は安房の国の北の端であって、洲崎はその西の涯になりす。いくら小さい国だと言ったところで、国と国との両極端に当るのです。その間を、この少年が両手を

後ろに縛られたままで、ここまで逃げて来たということ
が嘘でなければ、ともかくもそこに、非凡なもの存す
ることを認めないわけにはゆかなかつたのでしよう。け
れども甚三郎は、そのことを尋ねないで、

「何で、そんなに縛られるようなことをしでかしたのだ」

「悪戯いたづらをしたものですから、それで縛られました」

「悪戯？　どんな悪戯を」

「ちよつとしたことなんです、ちよつと悪戯をしたんだ
けれども縛られてしまいました、縛られて、門前の大き
な杉の木へつながれてしまいました、それを弁信さんに
解いてもらいました、ぐずぐずしていると、岩入坊にま
たひどい目に遭わされるから、早くお逃げて弁信さん
がそう言ったもんだから、後ろ手に結ゆわかれたのを解いて
もらう暇がなくなつて、一生懸命に、人に見つからないよ
うにこうして逃げて来ました」

「それはよくない、ナゼ逃げ出さないで、お師匠さんに
謝罪あやまることをしないのだ」

「駄目、駄目、あたいは、もう、あんなところは早く逃
げ出したくつて堪らなかつたのよ、もう帰らないや」

「お前、お寺にいて坊さんになるのが嫌なのか」

「いいえ、あたいは清澄のお寺に預けられていたけれど、
坊さんになるつもりじゃなかつたの、お寺の方では、あ
たいを坊さんにするつもりであつたかも知れないけれ
ど、あたいは坊さんになる気なんぞはありやしない」

一通りの白状ぶりを聞いても、そんなに大した悪戯いたづらを
する悪少年とも見えません。けれども甚三郎は、この少

年を問い訊たすことに興味を失わないで、

「そして、お前、これからどこへ行くつもりなのだ」

「あたいは、これから芳浜へ帰ろうと思つただけでも、
芳浜へは帰れないや、だから舟に乗つてどこかへ行つて
しまいたいと思つているのよ」

「芳浜にお前の実家うちがあるのか」

「あたいの実家うちじゃない、お嬢さんの家があるんですよ」

「お嬢さん……主人の娘だな。清澄へ行く前、そこに
居い候そうろうをしていたのか」

「あたいは、お嬢さんに可愛がられていたのよ、お嬢さ
んが、あんまり、あたいを可愛がるもんだから、それで
みんなが、あたいをお嬢さんの傍へ寄せないようにして
しまつたのですね、お嬢さんきつと、あたいに会いたが
るに違いない」

子供はずかしい眼をして甚三郎の面を打仰ぎました。

お嬢さんに可愛がられてる……それがなんとなく甚三郎
の心を温かいものにして微笑ほほえませました。

「そのお嬢さんというのは幾つになる」

「今年、十八になるでしょうね」

と言つて小首を傾かげるところを見れば、どう見ても愛く
るしい美少年で、決して悪戯をしたために、これほどま
で無惨に縛られ、縛られた上に、清澄の山から洲崎の浜
まで走つて来るほどの不敵な少年とは思われません。甚
三郎は優しく、

「そうか、近いうち、拙者わしも舟であちらの方へ出かける
から、その時に連れて行ってやろう、そうしてお嬢さん

とやらに会わせてやろう」

「有難う。それでもね、お嬢さんにや会えませんか」

「どうして」

「みんなが会わせないんだもの」

「なぜ会わせないのだ」

「あたいは、お嬢さんにだけは可愛がられるけれども、ほかの者にはみんな憎まれてるから」

「みんなの人が、なぜ、そんなにお前を憎むのだ」

「なぜだか、あたいはわからないんだ、みんなの人が、あたいを憎んでお嬢様に会わせないように、清澄の山へ預けちまったんですからね」

「何かお前が悪いことをしたのだろう」

「いいえ、何も悪いことをしやしません、悪いことといえ、あたいが、あんまりお嬢様に可愛がられるから、それが悪いんでしょうよ。そのほかにはね……あたいは、虫を捕ることが好きなんですよ、虫を捕ることだの、鳥と遊ぶことだの、それから、笛を吹くことだの……」

その時まで黙って聞いていたお角が、あわて気味で口をはさみました。

「ちょっとお待ち。お話のうちだが、それではお前さんが、あの芳浜の茂太郎さんというんじゃないの」

「ええ、あたいがその茂太郎ですよ」

「そう、驚きましたね、わたしはまた、お前さんを頼むために、こうしてわざわざ房州までやって来たのですよ」

「おばさん、あたいを頼みに来たの」

少年は、やや眼を円くして、お角の面を見上げました

が、その頼みに来たという事情を、さのみ立入って知りたいというほどありません。

「ええ、お前さんを頼みに来たのよ、それがために途中で大難に遭って、こうしてお世話になっているの」

「そうですか」

「そうですかじゃない、ほんとに生命がけで江戸から、お前さんを尋ねに来たんじゃないか」

お角ははずむけれども少年は、

「江戸から？」

と言って、前よりは少しく耳を傾けただけのことです。それもお角が無暗に、大難だとか生命がけだとかいうのに引きつけられたのではなく、江戸からと言った地名だけに引っかけたものとしか思われません。

「そうよ」

「江戸には、おばさん、山は無いんでしょう、だから蛇だって、そんなにいやしないでしよう、わたしを頼んで行ってどうするの」

「そりゃね……」

と言って、お角が少しばかり口籠りました。少年は、それに頓着せずに、

「今まで、あたいを頼みに来るのは、山方ばかりよ。

あたいに鳥を追わせたり、蛇をつかまえさせたり、また虫を取って来て天気を占わせたりするんだけれど、江戸へ連れて行ってどうするんだらう。それでも、あた

い江戸へは行ってみたいよ。お嬢さんとこに、幾枚も江戸の景色の絵があるんだ、それで見て知っているけれども

ね、綺麗きれいなところだね。おばさん、ほんとうに連れてつてくれるなら、あたい行ってもいいよ、おばさんとここに居候いこうになってもいいよ」

八

「それというのはね、まあ、聞いて下さいまし。この間の暴風雨あつらいしの晩のことでした、わたしが毎晩あやつて点けている高燈籠たかとうろうの火が消えてしまいました、どんなに風が吹いても、雨が降っても、消えないはずの火が消えてしまいました、あの火が消えたばかりに、海で船が沈んで、多くの人が死にました、まことに申しわけのないことでございます」

盲法師めうぼうしの弁信べんしんはこう言いって、その見えない眼まなこから涙なみだをポロポロとこぼして、口くちが利きけなくなりました。

「弁信べんしんさん、そりゃ仕方がありませんよ、なにもお前さんが消したというわけじゃあるまいし」

「いいえ、いいえ、わたしが消したんですよ、決して、あの晩の暴風雨あつらいしが消したわけじゃございません」

「だって弁信べんしんさん、お前まへがわざわざ消しに行ったわけじゃありませんまい」

「いいえ、わたしの業ごうが尽つきないから、それで、あの晩に限かぎって火ひが消きえてしまったんですね、わたしが、少しでも人様の眼まなこを明るくして上げようと思おもってしたことことが、かえって人様の命いのちを取とるようになってしまいました、怖おそろしいことことでございます」

「けれども、そりゃ仕方がありませんよ、善よい心がけでしたことも、悪わるいめぐり合せになるのは運うですからね、なにもあの晩に限かぎって燈火あかりが消きえて、それがために助けらるべき船ふねが助けられず、救すくわるべき人が救すくわれなかつたといつて、誰も弁信べんしんさんを恨にくむわけのものじゃありません、それでは、あんまり取越とこし苦勞くろうというものが過ぎますね」

「いいえ、いいえ、善よい心がけでしたことが、悪わるいめぐり合せになるということは、決してあるものではございません、それが悪わるいめぐり合せになるのは、徳とくが足りないからでございます、業ごうが尽つきないからでございます」

「そりゃいけませんよ、善よいことをすれば、善よいめぐり合せになるときまつたものじゃなし、かえって善よいことをして、悪わるいめぐり合せになる例たとが世間よこにはザラにあることなんだから、弁信べんしんさん、そんなに取越とこし苦勞くろうをしないで、山やまへお帰かえりなさいまし」

「いいえ、そうじゃないのです、善よい人の点つけた火ひは、消きそうと思おもっても消きえるものじゃございません。御承知ごしょうちでございますし、天竺てんじくの阿闍世王あじゃせおうが、百斛ひゃくこくの油あぶらを焚たいて釈尊しやくそんを供養くよう致いたしました時とき、それを見みた貧ひんしい婆ばさんは、二銭にせんだけ油あぶらを買かって釈尊しやくそんに供養くようを致いたしました、貧ひんしい婆ばさんの心こころは善よかったものでございますから、阿闍世王あじゃせおうの供たえた百斛ひゃくこくの油あぶらが燃もえ尽つきてしまつても、貧ひんしい婆ばさんの二銭にせんの油あぶらは、決して消きえは致いたしませんでした、消きえないのみならず、いよいよ光あけを増あしました、暁方あけがたになつて目連尊者もくれんそんじやが、それを消きしにおいでになつて、三た

び消しましたけれど、消えませんでした。袈裟を挙げて煽ぐとその燈明の光が、いよいよ明るくなったと申すことでございます。それほどの功德も心一つでございませぬに、それに、わたしがあやつて心願を立てて、毎晩毎晩点けにあがる高燈籠が、あの晩に限って消えてしまったというのは因果でございませぬ、業でございませぬ、わたしの徳が足りないでございませぬ。徳の足りないものが、業の尽きない身を以てお山を汚していることは、お山に対してでも恐れ多いし……わたし自らの冥利のほども怖ろしいでございますから、それでわたしは、お山をお暇乞いを致しました、皆様がいろいろにおっしゃって下さいましたけれども、わたしは自分の罪が怖ろしくて、お山に留まっておられませぬでございませぬ。皆様お大切に、これでお別れを致します……これが一生のお別れになるか知れませぬでございませぬ」

こう言つて、盲法師の弁信は泣きながら、草鞋ばきで、笠はかぶらないで首にかけ、例の金剛杖をついて清澄の山を下つてしまいました。それは暴風雨があつてから五日目のことで、誰がなんと言つても留まらず、山を下つて行く、その後ろ姿がいかに哀れであります。

九

それとほぼ時は同じですけれども、ところは全然違つた中仙道の碓氷峠の頂上から、少しく東へ降つたところの陣場ヶ原の上で、真夜中に焚火を囲んでいる三人の男

がありました。

一昨夜の暴風雨で吹き倒されたらしい山毛櫨の幹へ、腰を卸しているものは、南条力であります。この人は曾て甲府の牢に囚われていて、破獄を企てつつ宇津木兵馬を助け出した奇異なる浪士であります。

その南条力と向き合つて、これは枯草の上に両脚を投げ出しているのは、いつもこの男と影の形に添うように、離れたことのない五十嵐甲子雄であります。甲府の牢以来、この二人が離れんとして離るる能わざる子孫の形で終始していることは敢て不思議ではありませんが、その二人の側に控えて、いっばしのつもりで同じ焚火を囲んでいるもう一人が碌でもない者であることは不思議です。碌でもないと言つては当人も納まるまいが、この慨世憂国の二人の志士を前にしては、甚だ碌でもないというよりほかはない、例のがんりきの百蔵であります。

「その屋敷でござんすか、そりゃこの峠宿から二里ほど奥へ入つたところの美平というところが、それなんだそうでございませぬ。今はそこには人家はございませぬが、そこが、碓氷の貞光の屋敷跡だといつて伝えられてるところでございませぬ」

がんりきの百は、いっばしの面をして案内ぶりに話しかけると、

「なるほど」

南条力はいいい気になつて頷いてそれを聞いている取合せが、奇妙といえば奇妙であります。なぜならば、南条力は少なくともこのがんりきの百なるものの素行を知

っていなければならぬ人です。それは甲州街道で、このがんりきの百が男装した松女のあとを、つけつ廻しつしていた時に、よそながら守護したり、取って押えたりして、お松を救い出したのはこの人でありませぬ。百にしてからが、この人の怖るべくして、狎るべからざる人であり、ともかく自分たちには齒の立たない種類の人であることを、充分こなしていなければならぬのに、こうして心安げになつて、いっぱしの面をしていることが、前後の事情を知つたものには、どうも奇妙に思われてならないはずです。

ところが、このがんりき、先生は一向、そんなことには頓着なく、

「さあ、焼きました、もう一つお上んなさいまし。南条の先生、こいつも焼けていますぜ、五十嵐の先生、もう一ついかがでございます」

と言つて、木の枝をうまく渡して、焚火に燻べておいた餅を片手で摘み上げ、

「碓氷峠の名物、碓氷の貞光の力餅というのがこれなんでございます」

得意げに餅を焼いて、二人にすすめ、

「何しろ源頼光の四天王となるくらいの大傑ですから、碓氷の貞光という人も、こちとらと違って、子供の時分から親孝行だつたことでございますよ。親孝行で、そうして餅が好きだつたと言いますがね、親孝行で餅が好きだからよろこびますよ、間違つて酒が好きであつてよろこぶ、トテも親孝行は勤まりませぬや。どうも酒

飲みにはあんまり親孝行はありませんね。俺の知つてゐる野郎にかなりの呑拔があつて、親不孝の方にかけちゃ、ずいぶん退けを取らねえ野郎ですが、或る時、食い酔つて家へ帰ると、つい寝ていた親爺の薬罐頭を蹴飛ばしちまいましたね、あ、こりや勿体ねえことをしたと言つたもんです、それを親爺が聞いて、まあ倅や、お前も親の頭を蹴つて勿体ないと言つてくれるようになったか、それでわしも安心したと嬉しがつてゐると、野郎が言うことにや、おやおや、お爺さんの頭か、俺やまた大事の爛徳利かと思つたと、そうぬかすんですから、こんなのは、とても親孝行の方には向きませぬよ。酒飲みがみんな親不孝と限つたわけじゃございませぬが、餅の方が向きがよろこびます。その碓氷の貞光て人は餅が好きで、自分で搗いては自分でも食い、お袋様にもすすめね、自分はその餅を食いながら、あの美平の屋敷から信州のお諏訪様まで日参りをしたというんですから、足の方もかなり達者でした。私共も足の方にかげちやずいぶん後れを取らねえつもりだが、ここから信州の諏訪へ日参りと来ちゃ怖れ入りますね。そんなわけで、これがこの土地の名物、碓氷の貞光の力餅ということになつてゐるん

でございます」

がんりきの百蔵は、無駄話を加えて力餅の説明をしながら、しきりにそれを焼いては例の片手を上手に扱つて二人にすすめると、それをうまそうに食べてしまつた南条は、

「がんりき、時間はどんなものだな」

「そうでござんすね、もうかれこれいい時分でございましょう」

三人が同時に頭をめぐらして西の方をながめました。この時分、最夜中は過ぎて峠の宿で、たったいま鳴いたのが一番鶏であるらしい。

「いったい、横川の関所は何時に開くのじゃ」

五十嵐が言いますと、

「やっぱり、明けの六つに開いて、暮の六つに締まるんでございます」

「そうして今は何時だ」

「一番鶏が鳴きました」

がんだりきは何か落着かないことがあるらしく、

「間違いはございませませんが、念のためですからこれから私が、もう一ぺん峠の宿を軽井沢まで走って見て参ります」

「御苦労だな」

こうして、がんだりきの百は得意の早足で、峠の宿の方へ向いて行ってしまうました。そのあとで南条は、五十嵐にむかい、

「こんな仕事には詭向きに出来ている男だ、何か、ちよっとした危ない仕事をやってみたくてたまらないのだ、小才が利いて、男ぶりもマンザラでないから、あれでなかなか色師でな、女を引っかけるに妙を得ているところは感心なものだ」

こんなことを言って笑っていると、五十嵐は、

「女によつては、あんなのを好くのがあるのか知らん、

どこかに口当りのいいところがあるのだろう」

「当人の自慢するところによると、あの片一方の腕を落されたのも、女の遺恨から受けた向う創だと言っている。これと目星をつけた女で、物にならぬのは一人もない、なんぞと言っているところがあいつの身上だ」

この時分に峠の宿で、また鶏が鳴きましたけれども、夜が明けたというわけではありません。

いわゆる、碓氷峠のお関所というのは、箱根のお関所と違って、それは山の上にあるのではなく、峠の麓にあるのであります。

熊の平で坂本見れば、女郎が化粧して客待ちる……というその坂本の宿よりはなお十町も東に当る横川に、いわゆる碓氷峠のお関所があるのであります。

このお関所を預かるものは安中の板倉家で、貧乏板倉と呼ばれた藩中の侍も、この横川の関所を預かる時は、過分の潤いがあったということです。それは参観交代の大名の行列から来る余沢の潤いであるとのことです。

けれども、ここを通る参観交代の大名のすべてを合せても、その余沢は、一加州侯のそれに及ぶものではないとのことでありませう。

後共は霞引きけり加賀守

という百万石の大名行列は、年に二回は行われる。その年に二回の加賀様の行列によって、一年の活計を支えるほどの実入りを得ている者が、幾人あるか知れないということでありませう。

それは大抵、五月と九月との両度に行われ、同勢は約

千人もあつたらうということで、金沢の城中から、鉄砲百挺、弓百挺、槍百筋を押立てて、ここまで練つて来た一行が、鉄砲だけは関所を通すことが許されないから、坂本の宿の陣屋に鉄砲倉を立て、そこに預けておき、帰る時は、それを持ち出して国へ帰るといふことになつてゐるのだそうです。関所でやかましいのは、鉄砲と、そして女であることはこれも他と変ふことはなく、徳川幕府にとつて頭痛の種であつたこの二つの禁物のうちの一つは、そうして封じ込められて、関所を東へは一寸も動くことを許されないでゐるが、東から来て西へ抜けようとする女は、まさか倉を立てて蔵しまつておくわけにもゆかない代り、かなり厳しい詮議せんぎの下に、辛うじて通過を許されるのであります。それは、たとえ百万石の奥方といえども、関所同心の細君の手によつて、一応その乳房をさぐられ、それから髪の中の毛を探された上で、はじめて通行の自由を認められる……それが本来の規則であつたそうだけれども、そこにも当然抜け道はあつて、表面だけの繕いで無事に通行ができるようになり、それらの余徳として、関所役人の懐ろの潤うるおいが増してくるようになつたとは、さもありません。

その加州侯の潤わせぶりが、至つて寛大で豊富であつたから、その行列が宿々のものから喜ばれた持て方は非常のものでしたそうです。それで中仙道を、誰いうとなく加賀様街道と呼ぶようになったのは、名実共にさもありません。

これに反して、嫌われ者は、尾張と薩摩で、これはど

うかして三年に一度ぐらい、この関所へかかることがあるが、金は使わなくせに威張り散らすといふ廉かどで、関の上下におぞけを振寄せたものだそうです。それで近頃まであの附近では、泣く児をだますのに、それ尾張様が来たといつてオドかしたものだそうです。

そんなようなわけで、碓氷峠の関所、実は横川の関所は、毎日、明けの六つから暮の六つまで、人を堰せいたり流したりしていましたが、これはもちろん、その時刻にしてはあまりに早過ぎることなのであります。

「さあ、やつて来たぞ」

「来た、来た」

南条と五十嵐とは、例の陣場ヶ原の焚火から立ち上つて、ながめたのは関所の方角ではなくて、やはり熊野の社の鎮座する峠の宿の方面でありました。

なるほど、何物かがやつて来る。耳を傾けると鈴の音が聞えるようです。蹄ひづめの音もするようです。あちらの方から、馬を打たせて来るものがあることは疑うべくもありません。

まもなくそこへ現われたのは、馬子に曳ひかれた二頭の馬でありました。

峠を越ゆる馬は、一駄に三十六貫以上はつけられないのだから、荷物の重量としてはそんなに大したものとは思われないが、それに附添ついでつてゐる武士が三人あります。そうして馬の背の上に、梅鉢の紋らしいのが見えるところによつて見れば、これは、やはりこの街道の神様である加州家に縁ちなみのある荷馬にうまであることも推測おしはかられます。

それと見た南条力は、ズカズカとその馬をめがけて進んで行きました。無論、五十嵐甲子雄もそれに従いました。

これは、馬子も宰領も、すわやと驚かねばならぬ振舞です。この二人だからよいようなもの、そうでなければまさに山賊追剥の振舞であります。

「待ち兼ねていたわい」

南条力は低い声でこう言つて馬の前に立ち塞がると、不思議なことに馬も人も更に驚く風情はなく、ハタと歩みをとどめてしまつて、

「まず、上首尾」

と言つた声は、前なる馬子の口から発せられました。落着いたもので、馬子風情の口吻ではありません。

けれど、馬子の口から出たことは間違ひがありません。

その時に、馬に附添つて来た三人の武士は、汝れ狼藉者！ と呼ばわつてきつてかかりでもするかと思つと、それも微塵騒がず、遽かに馬の側から立退いて、やや遠く三方に分れて立ちました。この陣場ヶ原というところは、屋ならば碓氷峠第一の展望の利くところでありますから、そうして三方にめぐり立てば、どちらの方面から来る人の目を防ぐこともできます。

ところで南条力は、右の一言を発しただけで、前にいた馬子の傍へ立寄ると、五十嵐甲子雄は二番目の馬子に近寄つて、

「お役目御苦労」

と、やはり低い声で言いかけると、

「御苦労、御苦労」

と第二の馬子も、やはり馬子らしくない口調で一言いつたきり。そこで、馬子は提灯を鞍へかけて、都合四人が、おのおの己れの衣裳を脱ぎ換えはじめました。

南条と五十嵐とは己れの衣類大小をことごとく脱ぎ捨てて、馬子はその簡単な馬子の衣裳を解いてしまつと、この両者は手早くそれを取換えて一着してしまひました。そうして忽ちの間に南条力は第一の馬の馬子となり、五十嵐甲子雄は第二の馬の馬子となり、以前の二人の馬子は、雁首の変つた南条、五十嵐になつてしまひました。

この時、三方に離れて遠見の役をつとめていた三人の武士は、急に立寄つて来て、また馬の左右に附添いました。

以前に馬子であつた二人だけは、その馬の前にも立たず後にも従わず、東へ向いて行く一行を見送つて立つていたのであります。そうして馬の足音も、全く闇の中に消えてしまつた時分に、二人は元の峠の宿の方へ引返してしまつたから、そのあとの陣場ヶ原には、焚火の燃えさしだけが物わびしく燻っているだけです。

十

その翌日、妙義神社の額堂の下で、なにくわぬ面をして甘酒を飲んでいるのは、がんりきの百でありました。

縁台に腰をかけて、風合羽の袖をまくり上げて甘酒を

飲みながら、しきりに頭の上の掛額をながめておりました。が、

「爺さん、ここに大した額が上ってるね……」

と甘酒屋の老爺に、言葉をかけました。

「へえへえ、なかなか大したものでございます」

老爺は自分のものでも賞められた気になって、嬉しうに、同じく頭の上の額堂の軒にかかった大きな掛額をながめました。

「甲源一刀流祖逸見太四郎義利孫逸見利泰……」

筆太に記された文字を、がんだりきの百は声を立てて読むと、

「秩父の逸見先生の御門弟中で御奉納になったのでございますが、当国では真庭の樋口先生、隣国では秩父小沢口の逸見先生、ここらあたりは、剣道の竜虎でございます」

それを聞いて、がんだりきの百も何かしら勇み出して、「知ってるよ、爺さん、わしはいつたい甲州者なんだがね、その甲源一刀流の秩父の逸見先生というのは、甲州の逸見冠者十七代の後胤というところから甲斐源氏を取って、それで甲源を名乗ったものなんだ、だから何となく懐しいような気がして、こうしてさいぜんからながめてるんだ」

「左様でございますか、お客様も甲州のお方でございますか、甲州はまことに結構なところだそうですね、ね」

「あんまり結構なところでもねえのだが、爺さんよ、こ

うして、さっきからこの額面をながめてるうちに、どうも気になってならねえことがあるんだが……」

「何でございますか」

「ほかでもねえが、初筆から三番目のところに紙が貼ってあるだろう、比留間さんとやら、桜井さんとやらという人の名前の次にある人の名前は、何という方だか知らねえが、ああして頭からべつとり紙を貼ってしまったのは、ありやいっただうしたわけなんだ」

「あれでございますか、あれはね……」

老爺は心得て、何をか説明しようとするのを、気の短いがんだりきの百は、

「あんまり味のねえやり方をしたもんだね、書き直すんなら書き直すんで、もっと穏かな仕方がありそうなものじゃねえか、頭から無茶に白紙を貼りかぶせてしまったんじゃ、見た目があんまり良い気持がしねえ、御人だつて晴れの額面へ持つて行って、自分の名前だけ貼りつぶされたんじゃ浮ばれねえだろうじゃねえか。これだけの御門弟のうち、そこに気のつく人はねえのかな。削り直したところで何とかなりそうなものだ、削り抜いて埋木をしておいたつて知れたもんだろう、なんにしたつて、ああして白紙を貼りかぶせるのは不吉だよ」

しきりに腹を立てて見ている額面には、なるほど、初筆から三番目あたりの門弟の人の名の上に、無惨に白紙が貼りつけてあるのであります。老爺はその時、前の言葉をついで、

「あれはお客様、なんででございますよ、どなたもみんな、

あれを御覧になると、そうおっしゃいますんでございませが、皆さん御承知の上で、ああいうことになすったんでございますから仕方がありませんので」

「エ、みんな承知の上だつて？ 承知の上でああして貼りつぶしちゃったのかい」

「ええ、左様でございます、あの下に、机竜之助相馬宗芳というお方のお名前が、ちゃんと書いてあるんでございます」

「何だつて？ 机竜之助……」

がんりきの百は面かおの色を変えました。釜の前に立っていた老爺は、わざわざ縁台の方へ歩き出して来て、

「剣道の方のお方が、ここへおいでになってあれを御覧になると、どなたもみんな惜しい惜しいとおっしゃらない方はございませ、なかには涙をこぼすほど惜しがつて、この下を立去れないでいらつしやるお方もございませ」

「うーん、なるほど」

がんりきは何に感心したか、面かおの色を変えて唸うなり出し、改めてその紙の貼られた額面を穴のあくほど見ています。

「惜しいお方ですけれども、剣が悪剣だそうですから、どうも仕方がございません」

「悪剣というのは、そりゃ何のことなんだい」

がんりきは投げ出すような荒っぽい口調で、老爺を驚かせました。

「どういいうわけですか、皆さんがそうおっしゃいます、

それがために逸見先生の道場から破門を受けて、その見せしめのために、ああしてお名前の上へ、べったりと紙を貼られておしまいになってから、もうかなり長いことでございます」

「なるほど、そりゃありそうなことだ」

「けれどもまた、その御門弟衆のうちでも、惜しい惜しいとおっしゃるお方がございます。他国からこのお山へ御参詣になつた立派な武芸者のお方で、この額を御覧になり、ああ、机竜之助は今どこにいるだろう、あの男に会つてみたい……と十人が十人まで、申し合わせたようにそうおっしゃつて、あの額を残り惜しように御覧になるのが不思議でございますから、私わたくしがその仔細しさいを一通りお聞き申しておきました。お聞き申してみると、なるほどと思われることがありますんでございますよ」

「ふむ、そりゃそうだろう」

「もとの起りからそれを申し上げると、ずいぶん長くなりますが……」

それでも老爺は、その長きを厭いとわずに、ずいぶん話し込んでみようと自分物の縁台に、がんりきと向き合つて腰を卸そうとした時に、麓ふもとの方から賑にぎやかしい笛と太鼓の音が起つたので、その腰を折られました。

麓から登つて来るのは、越後の国から出た角兵衛獅子の一行であります。その親方が、てれんてんつくの太鼓を拍うち、その後ろの若者が、ヒューヒューヒャラヒャラの笛を吹き、それを取捲いた十歳とおぐらいになる角兵衛獅子が六人あります。

しちや、かたばち、
小桶こおけでもてこい、

すってんてれつく庄助さん

なんばん食かつても辛からくもねえ

この思いがけない賑やかな一行の乗込みで、せつかくの話の出鼻をすっかり折られた老爺は、呆あっけ気に取られた面かおをしているところへ、早くも乗込んだ六人の角兵衛獅子が、

「角兵衛、まったったあい——」

巴まんじつとその前でひっくり返ると、てれてんつくと、ヒューヒューヒャラヒャラが、一際賑ひとまわやかな景気をつけました。

ほかにお客というのはいないんだから、この角兵衛獅子の見かけた旦那というのは、おれのことだろう。そこでもがかりきの百は、どうしても御祝儀を気張らないわけにはゆかなくなりしました。

「兄貴に負けずにいっつかりやんなよ」

と言って、がかりきは例の左手で懐ろから財布を引き出すと、その中から掴み出した一握りを、鶏の雛に餌を撒くような手つきで、バラツと投げ散らしました。

がかりきの百は、角兵衛獅子を相手に大尽風だいじんかぜを吹かしている、妙義の町の大人も子供も、その騒ぎを聞きつけて出て来ました。この見物の半ば最後に、角兵衛獅子の登って来たのとは反対の方角の側から、同じところへ登って来た一行があります。

この一行は角兵衛獅子のような鳴物入りの一行とは違

って、よく山方やまかたに見ゆる強力ごうりきの類たぐいが同勢合せて五人、その五人ともに、いずれも屈強な壮漢で、向う鉢巻に太い杖をついて、背中にはかなり重味のある荷物を背負しよっています。

大尽風を吹かしていたがかりきの百が、ふとこの五人の同勢の登って来たのを見ると、

「おいおい角兵衛さん、もうそのくらいでいいよ、御苦労御苦労」

ここへ来た五人の強力ごうりきの同勢は、さあらぬ体ていに、この額堂下の甘酒屋へ繰込んで来ました。

先に立った強力ごうりきの一人を、よく気をつけて見れば只者ではないようです。そのはず、この男こそ、碓氷峠の陣場ヶ原で一昨夕、焚火をしてなにもをか待っていた南条力でありました。すでにこの男が南条力でありとすれば、その次にいるのが五十嵐甲子雄であることは申すまでもありますまい。そのほかの三人は、あの陣場ヶ原のひきつぎの時に、三方に立って遠見の役をつとめていた三人の武士。それが都合五人ともに、いつのまにか申し合せたように強力ごうりき姿に身をやつしています。急に、てんてこ舞するほど忙いそしくなったのは甘酒屋の老爺で、この五人の馬のような新しいお客様と、それから、たった今、一さし舞い済ました小さな角兵衛獅子が改めてこのたびのお客様となったのと、それにつれそう太鼓の親方と、笛の若者わかしとに供給すべく、新しく仕込みをするやら、茶碗ちawanに拭ぬぐいをかけるやら、炭を煽あおぎはじめるやら、ここはお爺おとうさんが車輪くるまわになって八人芸をつとめる幕となりまし

た。

やがて五人の強力は、一杯ずつの甘酒に咽喉をうるおすと、卸しておいたためいめいの荷物を取って肩にかけ、南条力が目くばせをするとがんだり、きの百が心得たもので、

「爺さん、また帰りに寄るよ」

と言つて幾らかの鳥目をそこへ投げ出して、立ち上ります。

額堂を出たがんだり、きを先登に、南条らの一行は白雲山妙義の山路へ分け入ったが、下仁田街道の方へ岐れるあたりからこの一行は、急速力で進みはじめました。

十一

がんだり、きを初め南条の一行が、山へ向けてここを去つてしまい、角兵衛獅子の一座もほどなく町の方へ引返してしまい、それから小一時ほどたつて、同じ額堂下の甘酒屋へ、同じような風合羽を着た道中師らしい二人の男が、ついと入つて来て、二人向き合つて縁台に腰をかけた、

「どっこいしょ」

杖について来た金剛杖でもない手頃の棒をわきに置いて、脚絆のまま右の足を曲げて左の方へ組み上げたのは、町人風はしているけれども、決して町人ではありません。

それと向き合った一方のは、前のに比べると年配であります。これはまあ生地が百姓らしい上に一癖ありそう

で、前のほど横柄でないところは、主従とも見えないが、たしかに前の方に對して一目は置いているようです。

この二人は甘酒に咽喉をうるおしながら、期せずして頭の上の、例の大きな額面に眼が留まりました。

「ははあ、甲源一刀流、秩父の逸見だな」

と言つたのは、足を曲げていた方の道中師です。

「なるほど、逸見先生の御内で、大した額を奉納なさいました」

前のは言い方が横柄で、後のは幾分か慎しやかであります。

「うむ、比留間与助、知つてる、桜井なにがし、あれも名前は聞いている、それから三番目……のはどうしたんだ、白紙を頭から貼りかぶせたのは不体裁極まるじやないか」

その口調にこそ相異はあれ、たった今、がんだり、百がしきりに憤慨したのと同じ動機に出でているので、心ある人ならば、誰もその無下な仕方を不快に思わないものはないはずだ。

「左様でございますな、何とか仕方がありそうなものでございますな、せっかくの結構な額が、あれのためにだいなしになつてしまいますでございませぬ……おやおや、お待ち下さいませよ」

年配の方の道中師が、やはり、それをながめているうちに面が曇ってきました。

「何だ、どうかしたのか」

横柄の方が、それを聞き咎めると、

「その次に記されておいでになるのは、ありや何とございませぬ、宇津木……宇津木と書いてあるんじやございませぬか」

「そうそう、宇津木と書いてある、宇津木文之丞……」
「わかりました、わかりました、思いがけないところで、思いがけない人にぶつかりましたよ、いやどうも、なんだか怖ろしい因縁がついて廻っているようでございませぬ、驚きました」

こう言つて、例の白紙に貼りつぶされた無名の剣客の名前を、呪われたもののような眼付でながめ入るのが変でしたから、横柄な方の道中師が、

「貴様、独り合点で、幽霊のようなことを言つてはいかん」

「先生、この白紙をかぶせられているお方の名前を、私はちゃんと読みました、紙の上から、ちゃあんと見透しました、千里眼ですよ、失礼ながら先生にはそれがお出来になりますまい」

「何を言つてるんだ、そんなことがわかるものか」

ここに二人の道中師という、その年配の方のは七兵衛であります。そうして横柄な方のは、もと新撰組にいた浪士の一人で、香取流の棒を使うに妙を得た水戸の人、山崎讓であります。

七兵衛と山崎讓とが、こうして組んで歩くことは、がかりきの百が南条力の手先になっていることよりは、むしろ奇妙な縁と言わなければなりません。

壬生の新撰組にあつて山崎は変装に妙を得ていまし

た。七兵衛が島原の遊廓附近に彷徨うて、お松を受け出す費用のために、壬生の新撰組の屯所へ忍び入つた時に、山崎はたしか小間物屋のふうをして、そのあとを追ひ、さすがの七兵衛の胆を冷させたことがあります。

それがいつのまに妥協が出来たのだらう、こうして主従のような、同行のような心安立で歩いていくまでには、相当のいきさつがなければならぬことです。

思うに、七兵衛とがかりきとは、甲府の神尾主膳の屋敷の焼跡を見て、その足で木曾街道を一気に京都までのしたはずであります。山崎讓はその以前、同じく甲府の神尾方へ立寄つて、それから道を枉げて奈良田の温泉に入っている時に、計らず机竜之助——それは新撰組では吉田竜太郎の変名で知られているその人に逢いました。そこで竜之助と別れて後、上方へ馳せつけたはずであります。また南条と五十嵐との兩人も、何か上方の変事を聞いて大急ぎで東海道を馳せ上つたはずであるから、彼等は期せずして上方の地で一緒になつたものでしょう。そうして、がかりきは南条、五十嵐らにつかまつてその用を為すに至り、七兵衛は山崎讓につかまつて、何かの手助けをせねばならぬ因縁が結ばれたものと思われま

す。
「先生、あなたも少々お頭を捻つてごらんさい、すぐにそれとおわかりになることじやございませぬか」
「なに、貴様にわかつて、拙者にわからんことがあるものか」

と言つて、改めて甲源一刀流の開祖、逸見太四郎義利の

文字から読みはじめて、門弟席の第一、比留間、桜井、その次の白紙の主を、紙背に徹とおるといふ眼光で見つめていたが、突然、

「ははあ、なるほど」

小膝を丁ちようと打ちました。

「それごらんさいまし」

七兵衛は得意の微笑を浮べると、山崎の面かおには一種の感激が浮びました。

「あれだ、あの男だ、そうか、なるほど……いやあの男には、拙者も重なる縁がある、大津から逢坂山おうさかやまの追分で、薩州浪人と果し合いをやっている最中に飛び込んだのは、別人ならぬこの拙者だ。壬生や島原では、かけ違つて、あまり面会をせぬうちに、組の内はあの通りに分裂する、芹沢が殺されて、近藤、土方が主権を握るといふことになったが、その後、あの男の行方ゆくえがわからぬ、そうしているうちに、思いがけないにも思いがけない、甲州の白根山の麓、ちっぼけな温泉の中で、あの男を見出した、かわいそうに、目がつぶれていたよ、盲になって、あの温泉に養生しているのにぶつつかつたが、その時は涙がこぼれたなあ。あれは甲府の神尾主膳へ紹介しておいたなりで、拙者も忙しいから上方へのぼって、今まで忘れていたようなものだ、ここであの男に会おうとは意外外」

山崎譲は額面の上を仰ぎながら、感慨に堪えないような言葉で、こう言いました。

「おや、そうでございましたか。実はあの時分、私共も、

あの方を尋ねて富士川口から甲州入りをしていたんでございませうが……とうとうお目にかかることができませうでした」

七兵衛はこう言って、何の気もなしに縁台の薄べりへ手を置いた時に、何か手先にさわるものがありました。指の先へ触つたものを、なにげなく眼の前へ抓つまんで来て七兵衛は、

「おや」

物珍しそうに、それをじつと見込みました。

「先生、先生」

「何だ」

「や、こいつはいい物が手に入りましたぜ」

「いい物とは何だ」

「これでございます、こんないい物が手に入るというのは、天の助けでございますな、お喜び下さい」

「何のことだか、拙者にはわからん」

と言って山崎譲が、七兵衛の手に抓つまみ上げたものを見ると、それは径一寸ばかりの真しんちゆう鍬の輪にとおした、五箇いつつほどの小さな合鍵でありました。

「おいおい、お爺さん」

七兵衛は山崎譲にその合鍵の輪を渡して、自分は甘酒屋の親爺を呼びました。

「はいはい」

「もうちつと先に、これこれのお客が、お前さんのところへ見えなかつたかい。これこれではわかるまいが、ちよつと小さいな男で、片腕が一本無えんだ……身なりは、

これこれ」

老爺は慌あわててそれを引取って、

「ええ、ええ、間違いございません、確かにおいでになりました、たった今でございます、小一時こいつときほど前のことでございます、ここで甘酒を召上りになって、角兵衛獅子に散財をしておやりなすった親分がそれなんでございます、その通りのお方でございました」

「そうだろう、そうなくっちゃならねえのだ……先生、そいつはがんだりきの奴の道具でございます、あいつ、何かに狼狽あわてたと見えて、ここへこんなボロを出して行ったのが運の尽きですな」

「なるほど、そうしてみるとよい獲物えものだ」

「爺さん、それからどうしたい。その片腕の男は、角兵衛に散財をして、それからどっちの方へ出て行きました」

「エエ、なんでございます、多分、お山を御見物でございましょう。お帰りにお寄りになるとおっしゃったから、金洞山こんどうざんから中の岳たけの方をめぐって、そのうちには、また私共へお戻りになるでございましょうと思います」

「そうしてその男は、一人つきりだったかね、それとも連れがあったかね」

「左様でございます、おいでになった時はお一人でしたが、お出かけになる時は、どうもあれはお連れでございましょうか、それとも別々なんでございましょうか、よくわかりませんが、強力が五人ほど一緒に連れ立って参りました」

「それだ」

山崎讓が、その時に足を踏み鳴らしました。

「どうやら、先生のおっしゃった通りの筋書でございますな」

「そうだろう、どのみち、それよりほかにはないんだ」

「それでは、出かけようじゃございませんか」

七兵衛から促うながされて、山崎讓は、

「まあまあ、待て」

甲源一刀流の額面を仰いで、何をか一思案の体ていに見えました。

七兵衛が草鞋わらじの紐を結んでいると、額面を仰いでいた山崎は、

「ちよつ、どう見ても癩しやくにさわるなあ」

と舌打ちをしました。

「全く、あいつは、小癩にさわる奴でございませよ。そもそも、私共が、あいつと知合いになったのは、東海道の薩埵峠さつたとうげの倉沢で鮑あわびを食った時からでございますがね、その時から、あいつは無暗に、私に楯たてをつけてみたがるんで、私が三里歩けば、あいつは五里歩いて見せようという意地っ張りがどこまでも附いて廻って、とうとうあの片腕を落すまでになったんでございます。それでも持って生れた性根しょうねというやつは、なかなか直るもんじゃなく、私が先生について一肌脱とうごうということになると、あいつが、いい気になって、浪人たちの方へ廻り、ああやって意地を見せようというんですから、全く始末の悪い奴ですよ。ナニ、大した悪党じゃございませんが、ずいぶん小癩にさわるいたずら野郎でございませ」

七兵衛は草鞋の紐を結び換えながら、こんなことを言うのと、額面を仰いでいた山崎が、何か四方を見廻して、額堂の軒に立てかけてあった二間梯子のあたりへ横目をくれながら、

「そのことを言っているのじゃねえ……七兵衛、ちよつとその手拭を貸してくれ。爺さん、この手桶を、こつちへ出してくれねえか」

「へえへえ」

甘酒屋の親爺は言われるままに、柄杓の入った手桶を取って山崎の前へ提げて来ると、山崎譲は柄杓を右の手に取って、左の手で、七兵衛から借受けた手拭を、少し長目に丸めてザブリと水をかけ、さいぜん横目にながめていた二間梯子のところへ行つて、それを右の手に抱え込んで、甲源一刀流の掛額のところを立てかけました。梯子を立てかけた山崎譲は、左手に濡手拭をさげたままでドシドシと梯子を上つて行くから、

「旦那、何をなさるんでございます」

甘酒屋の親爺が仰天すると、梯子を一段だけ踏み残して上りつめていた山崎譲は、背伸びをして、その甲源一刀流の大額の、門弟席の初筆から三番目の張紙の上へ、グジャグジャに濡れていた手拭を叩きつけたから、

「先生、ナ、ナニをなさるんで」

七兵衛もまた、甘酒屋の老爺と同じように慌てました。「この男をこうしておくのが癪にさわるんだ、開眼導師には、水戸の山崎譲ではちつと不足かも知れねえ」

濡らしておいた張紙をメリメリと引きめくると、その

下に隠れていたまだ新しい木地の上に、ありありと現われたのはなるほど、机竜之助相馬なにがしの文字であります。

十二

その前後のことでありました、碓氷峠の横川の関所から始まって、同心や捕手が四方へ飛びましたのは。

聞いてみると、それはこんなわけです。昨夜、加州家の宰領の附いた荷駄が二頭、峠を越えて坂本の本陣まで着いたことはわかつているが、それから以後の行動が明らかでないということです。馬だけは確かにつなぎ捨てられてあるが、馬の背にのせた若干の荷物と、それに附添った侍と馬方との行方が、わからないとのことです。

取調べてみると、たしかに加州家の荷物で、北国筋からかなり長い旅路を送られて来たことも確かです。ただ問題になるのは、そののせられて来た荷物です。或いは金箱をかなり多く、何万というほどの額を積んで来たものだろうという説もあります。また、それは金子ではなく、火薬の類だろうという説もありました。ここには例の加州家の鉄砲倉もあることだから、或いはそれに要する火薬の類を運送して来たのではなからうかという説によって、鉄砲倉や、煙硝蔵を調べて見たけれども、そこにはなんらの異状もありません。

その評定半ばのところへ、上方から飛脚が飛んで来て、はじめてこの事件の性質がわかりました。それは火薬で

はなく金。その金額は二万両。それはこういうわけです。

これより先、水戸の家老、武田耕雲齋が大將となつて、正党の士千三百人を率いて京都に馳せ上り、一橋慶喜に就いて意見を述べようとして、奥州路から上京の途につきました。その途中を支える諸大名の兵と戦いつつ、ついに加賀藩まで行つたけれど、そこで力が尽きて降参し、耕雲齋をはじめ、重なる者はことごとく加州領内で殺されることになり、藤田小四郎もその時に斬られた一人であります。ともかくもこれらの志士を、北国の雪の中に見殺しの悲惨な運命に逢わせたその責めは、誰に帰すべきものであるか知れないが……その時に行方不明になつた若干の軍用金が、この問題になる金なのであります。その以前、筑波騒動の時、武田伊賀守（耕雲齋）が幕府へ向けて、騒動を鎮めるための軍用金として借受けた三万両の金がありました。その借用証は伊賀守一人の印で受取つて、三万両のうちの一万両は小石川の水戸家の蔵へ納めました。けれども、あと二万両の金の行方が誰にもわからないのであります。或る者はすでに筑波騒動以来の軍用に費つてしまつたとも言ひ、或る者は北国まで上る長の路用に尽きてしまつたとも言ひ、或る者は、まだ他日に備えるために耕雲齋や藤田の手許に最後まで残してあつたのを、いよいよ殺されるときまつた前に、不意にその金を受渡してどこへか運んで行つたものがある、今となつて見ると、その二万両が、たしかにあの二頭の馬の背に積まれて、五人の人に護られて、碓氷峠を越えたのだということが、有力な観察でありました。

さて、この二万両の金と、ほかに重要な荷物の多少が、ここからどこへ運ばれて何に使用されるのか……問題はそれで、同心や捕方が四方に飛んだのもその探索のためであります。

その晩、夜通しで、信濃と上野の境なる余地峠の難所を、松明を振り照らして登つて行く二人の旅人がありました。

前なるは七兵衛で、後の山崎譲であります。棒を取つては腕に覚えの山崎譲も、足においてはとうてい七兵衛の敵ではありません。一夜に五十里の山路を、平地のように飛ぶ七兵衛が先に立つての案内ぶりは、子供のあんなよを氣遣つているようなものです。峠の上で、

「七兵衛、一休みやらんことには、もう歩けぬわい」

山崎が弱い音を吹くと、

「もう少しお降りなさいまし、いいところを見つけて焚火を致しましょう」

山間へ来て、枯木を集め、松明の火をうつして焚火をはじめ、

「先生、まだ私にはよくわかりませんがなあ、その五人の強力というのはいつたい何者なんでしょう、それほど大事なものを持つて、わざわざこんな道を潜り抜けて甲府へ到着かうというのには、何かよくよくの謀叛でもあるんでございませうな、ひとつその辺のところをお聞かせなすつておくんないまし」

七兵衛からこう言つて尋ねかけられた時に、山崎は頷いて、

「うむ、もっともな不審だ、お前から尋ねられなくても話そうと思つていたところだ。その五人の強力というのは、素性はまだよくわからないのだが、それはたしかに中国から九州辺の浪人だ、なかには容易ならん大望を持った奴がある。容易ならん大望というのは、隙を見て、甲府城を乗取つてしまおうという計画なのだ。甲府の城は名だたる要害の城で、徳川家でも怖れて大名に与えずに天領としておくところだ、それを乗取れば関東の咽喉首を抑えたということになるのだ。その五人の強力に化けた奴は、たしかにその一味の者共だ。そうしてあいつらが、坂本の宿へ馬を置きつ放しにして姿を晦ましたのは、言わずと知れた妙義の裏山から信州へ出て、山通しを甲府へ乗り込む手順に違いない。それからお前の兄弟分だとかお弟子だとかいう、そのがんだりきとやらが甲州者で道案内だと聞いて、いよいよそれを確めてしまったのだ。あいつらの携えている荷物というのは、水戸の武田耕雲齋が幕府から借りた三万両のうち、二万両がそっくりあるはずだ、それがあいつらの事を挙げる軍用金になるのは知れたことだ。ことによると、山通しをいよいよ甲府へ出るまでには、仲間の奴等がどこから出て来るか知れたものじゃない。まあしかし、落着くところは甲府ときまつているんだから、追蒐けるにも、そう急ぐことはないや、あいつらに気取られるとかえつてことが面倒になるから、気をつけて案内してくれよ」

それを聞いて七兵衛が、しきりに感心して、
「なるほど、そりゃちつと、こちとらのやる仕事より大

きいや、甲府の城を乗取つて、お膝元を横目に見ながら、天下をひっくり返そうというんだから、出来ても出来なかつても、仕掛けが小さくはございません。よろしくございます、向うがその了見なら、こつちもそのつもりで、先生の御用をつとめてつとめて、ぶちこわし役に廻るのも面白うございますね、ずいぶんやりましょう」

十三

相生町の老女の家の一間で、行燈の下に、お松は兵馬の着物を畳んでおりました。

いつも元気で快活なお松が、このごろ、しおれているのが眼に立つほどで、今も着物を畳みながら、眼にいっぱい涙をたたえております。

今日も兵馬の留守中、用ありげに来た二人の客があります。その一人は、甲府からついて来たあのいやらしい金助という男で、あれがこの間、兵馬をはじめて吉原へ連れて行った男であります。あの男が来るたびに兵馬さんは落着かなくなつて、その都度、お金の心配をなさるような御様子がありありとわかるのである。夜更けになつてお帰りなさることもあるし、また、どうかすると一晩泊つてお帰りになることもあるが、そのお帰りになつた後のお面の色は、打沈んで、太息をついておいでなさるのが、今までの兵馬さんとはまるつきり違う。

もう一人の来客は、たしか刀屋であると言つていたが、もしや兵馬さんが御所持の腰の物を、あの刀屋にお払い

下げになるつもりではあるまいか……：そんならばほんとうに一大事。

それを思うと、覚えぬ涙が眼の中にいっぱいになって、幾度も着物を畳み直しているうちに、ふとその袂の中たもとから、読み捨てた一封の手紙が、何か物を言うように綻ほころび出しました。

お松は、はっとして、その手紙を手に取り上げて見ると女文字です。ひろげて見ると、嫉ねたましいほどに手ぎわよく書いてあって、文言もんごんは読まない先に、その水茎みずぐきのあの艶なまめかしさと、ときめく香が、お松の眼をさえくらくらとさせるようでありました。お松は、一種の口惜くやくしさがこみ上げて、手紙を取る手がワナワナとふるえました。

その時に、廊下で人の足音がします。

「お帰りなさいませ」

そこへ帰って来たのは兵馬であります。お松は慌あわてて、あの艶なまめかしい手紙を自分の懐ろへ押入れて、兵馬の前へ丁寧にお辞儀をしながら、そっと涙を隠しました。

「そうしておいて下さい」

「あの、兵馬様、今日はお留守中に、お客様が二人おいでになりました」

「来客が二人、そうしてそれは誰と誰？」

「一人は、いつもの金助さんでございませうが、もう一人は、久松町辺の刀屋だとか申しております」

「ははあ、刀屋が来ましたか。それから、金助は何と言いました」

「あの方は何とも申しません、ただ、わたしに向って、このごろはさだめてお淋しうございませうと、笑いながら言いましただけでございませう」

こう言ってお松は、伏目になりました。

「ははあ……何を言うのかあいつの言うことは、取留まったものではない」

兵馬はやはり、淋しき笑いに紛まぎらわそうとするらしいが、

「兵馬様」

そのときお松は、屹まごと心を取り直したように面かおを上げて、兵馬の名を呼びました。

「何でござる」

「あなた様は、このごろ、どちらの方へ多くお出かけになりまする」

「何を改まって、そのようなことをおたずねなさる」

「いいえ、わたくしは、それをお伺い致さねばならないほど、このごろは、ほんとに気が弱くなつてしましました」

「そなたの言うことが、わたしにはよくわかりませぬ。拙わづ者のこのごろの出先と云って、その目的は、そなた存知の通りなれど、出先はやはり今日は東、明日は西、どここときまったことなく江戸の天地を、四角八面に潜くぐり歩いているようなものじゃわい」

「それならよろしうござんすけれど、わたくしのこのごろお見受け申すあなた様は、前のあなた様とは別のお方のようでございます、それが悲しうございませう」

「ナニ、拙者が以前とは別な人のようになった……ははあ、そなたの眼に左様に見えますか」

「ええ、ええ、失礼ながら、これまでのあなた様は、どんな艱難にお逢いになっても、お心の底には強いところが確乎としておいでになりましたけれど、このごろは、それがゆらゆらと動いておいであそばすようにばかり、わたくしの眼には見えてなりませんのでございます、お出ましになる時も、帰っておいでになる時も、あなた様のお面にも、お心持にも、おやつれが見えるばかりで、昔のような落着きというものが、一日一日になくなっておいでなさるように見えますのが、わたくしには悲しくてなりません」
と言ってお松は、涙をこぼしました。

その晩はお松は、こし方や行く末のことを考えて、いまさら、人の心の頼みないことを、しみじみと思いわびて眠れませんでした。

懐ろへ入れて来たあの女文字の手紙を取り出して読み返してみると、舌たるいような言葉で、ぜひぜひ今宵のおいでをお待ち申し上げますというような文言であります。女の名は東雲とあって、宛名は片柳様となっております。片柳の名は、兵馬が好んで用うる変名であり、東雲というのは、吉原のなにがし楼かにいる遊女の源氏名に違いない。お松はそれが悲しくもなり、腹立たしくもなって、その手紙を引裂いてやろうかと思いました。

その遊女も憎らしいけれど、兵馬さんほどの人が、ど

うしてまたそんな狐のような女に、脆くも溺れるようになったのか、あの人の心に天魔が魅入ったと思うよりほかはなく、それが口惜しくて口惜しくてなりません。と
いって、よく考えてみれば、こうして自分というものがお傍におりながら、そんな仇し女に兵馬さんの心が移るようにしたのは、やはり自分が足りないからだと思うと、どうも残念でたまりません。どうかして、再び兵馬さんの心を、その女から取り戻さなければならぬが、あちらは人を誑すことを商売にしている人。その腕にかけては、とても太刀打ちのできないわたしであるかと思うと、お松は曾て知らなかった嫉まじさに、身悶えをさえるのでありました。寝られないから、お君の病気の容態を見舞に行つて気を紛らそうと廊下へ出ると、兵馬の部屋の中で、

「へえ、それはもうお買戻しになります節は、手前共にございます間は、いつでも仰せに従います、また他の品とお取替えになります場合にも、せいぜい勉強致しますして、お使いを下さいますれば、早速お伺い申し上げます」

と言っているのは、刀屋の番頭らしくあります。

それを耳にした時も、お松は胸を打たれました。それでは、大切のお腰の物をお放しなさる気になったのか、それほどお入用の金ならばわたしの手で……と思ひましたけれども、実は、このごろの自分は、もう貯えのお金とても無いし、自分が持つていないのみならず、お君さんにも、また御老女様にも借金までしてある、その借金

はみんな、よそながら、あの人の困る様子を見るに見兼ねて融通して上げたお金であるが、今のところ、返さなくてはいらないというほどの義理があるのではないけれど、なるべく早く、なんとかして返して上げたいものだと思つてゐるくらいだから、この上、あの人たちに無心ができるものではない。

といつて、あの人が、みすみす武士の魂という腰の物までも手放そうとなさる今の場合、そのお力にもなれない自分の身の意気地のないことが思われてなりません。お松はそこで、もうお君を見舞に行くほどの勇氣もなくなつて、さあ、なんとかして、たつた今あの刀屋を帰さないようにして上げる手段はないものかと、また自分の部屋へ取つて返したけれども、もう所持品にしても、さして金目のあるものはなく、ただ蔵しまつてあるのは着物だけであるけれど、それとても、今宵の間に合うのではなし、ああ、こんな時にあの七兵衛のおじさんが来てくれたならと、あてのない人を空頼そらだのみにして、とうとう夜を明かしてしまいました。

翌朝になつてみるとお松は、また兵馬に対して、どうやら濟まない心持になりました。

それで、廊下を通りがけに兵馬の部屋を訪れてみると、もうその時に兵馬はそこにおりませんでした。お松は、せっかく、しおらしい心に返つたのが、またむらむらと抑えきれない不快の心に襲われて、足早にそこを立去ろうとするところへ、なにげない面かおをしてやつて来る一人

の男に、ハタと行当りました。

「お早うございます」

「おや、お前は金助さんではないか」

「はい、その金助でございます」

お松も、小面こづらの憎いイヤな奴と思ひながらも、何か尋ねてみたい氣になつて、

「金助さん、宇津木さんはおりませんよ、何か御用なら、わたしが承つておきましょう」

「左様でございますね、別に御用つてほどのこともねえでございますがね、それではこれでお暇いとまを致しましうか知ら」

「あの、金助さん、お前さんに御用がなければ、わたくしの方にお聞き申したいことがあるのですけれど、ちょっとあちらまで来て下さいませんか」

「へえ、お松様、あなた様から何か私に御用があるとおっしゃるんですか、よろしうございます、そうおっしゃられるといやと申し上げるわけにも参りませんな、お邪魔を致しましう」

金助は恩にきせるような言い方をして、お松のあとに従つて、長い廊下の奥へ行く途中で、

「なるほど、結構なお邸でございますな、ははあ、こちらの障子が霞でございますな、欄間らんまの蜀江しよつこうす崩しがまた恐れ入つたものでげす、お床の間は鳥居棚、こちらはまた織部おりべの正面、間毎間毎の結構、眼を驚かすばかりでございます、控燈籠ひかえどうろうの棗形なつめがたの手水鉢ちゆうずばち、あの物さびたところが何とも言われませんが、建前たてまえにこうして洩いところを

見せ、間取りには贅を凝らしておいて、茶室や袖垣のあんばいに、物のさびびというところをたっぷりとあしらったところなどは実際憎うございますよ。おやおや、大した石燈籠、こりや本格ですよ、橘寺形の石燈籠、これをそのまま据えたところなんぞは、飛ぶ鳥も落すようなものでげす、十萬石以上のお大名でもなけりや出来ません。全く驚きました、表からお見かけ申したんじゃ、これほどのお住居と気のつくものはございません」

金助は相変らず齒の浮くような追従を並べて、四辺をキョロキョロ見廻しながら、お松に導かれて廊下を歩いて行きます。

十四

その時分、お君はムク犬を連れて、奥庭を歩いておりました。

いっぞやのように打掛こそ着ていないけれども、寝衣姿のまま、手には妻紫の扇子を携えて、それで拍子を取って何か小音に口ずさんで歩いて行くと、それでも例によってムクは神妙にあとをついて、築山の前の芝生まで来ました。

「ムクや、お前とここで投扇興をして遊びましょう、わたしが投げるから、お前、取っておいで」

こう言ってお君は、手にしていた扇子を颯と開いて投げました。扇子は流星のように飛んで彼方の芝生の上に着ると、ムクはユラリと身を躍らして一飛びに飛んで

行き、要のあたりを啣えて、開いたなりの扇子を、再びお君の手に渡します。

「おお、よく持って来てくれました、お前はほんとい犬だ、わたしのムク犬や、もう一度、投げるから取っておいで、いいかい、今度は、下へ落ちないうちに受けるのですよ」

開いてあったその扇子を、ピタリと締めて、お君はそれを空中高く投げ上げました。

「さあ、下へ落ちないうちに」

中空高く上った扇子が、トンボのように舞って落ちて来ると、それは早くもムクの大きな口の中に啣えられました。

「上手上手、まだお前、いろいろの芸当が出来るんだね、間の山にいた時から、わたしが仕込んだ上に、両国へ来てから、みんなに仕込まれたのだから、ずいぶんお前は芸の数を知ってるでしょう、忘れないでおいで。一旦覚えたものを忘れるようなお前じゃないけれど、それでも、お濠いをしないと、人間だって忘れることが多いんだから無理もないわ」

お君はムク犬の口から、扇子を外して頭を撫でてやりましたが、

「忘れるといえ、わたし、三味線の手を忘れてしまやしないか知ら。間の山節は、わたしよりほかに歌える人はいないんだから、あれをわたしが忘れてしまうと、あとを継ぐ人がない、それではお母さんに済まない」

お君はこう言っつてその扇子を取り直すと、撥のつもり

に取りなして、左の手で三味線を抱えるこなしをして、口三味線であたいはじめ、

「大丈夫、わたしは決して忘れやしない」

淋しく笑って、池のほとりへ出ました。

「ムクや」

左へ廻って附いているムク犬を、あわたた慌しく右の方から

尋ねて、

「お前、わきみ他見をしちゃいけません、可愛い可愛いわたしのムク犬や、お前、何でもわたしの言うことを聞いてくれますね、お前は一旦覚えた芸は決して忘れやしませんね、だから、一旦お世話になった人も決して忘れやしませんいでしよう……ほんとに忘れないならば、お前、殿様をお探し申して来ておくれ、わたしを、あの殿様のいらっしやるどころへ、お前、後生だから連れて行っておくれ」

お君に、こう言って歎願されても、こればかりはムク犬も返答に困るらしくありました。

「いけないかい、こればかりはお前にもできないだろうね、そうでしょう、殿様はこの国にいらっしやらないのだからね、海を越えて西洋というところへおいでになつてしまったのだから、いくらお前が賢い犬でも、トテモ西洋までに行けやしないからね、これは、頼んだわたしの方が悪いのさ、わたしの方に無理があるんだから仕方がない」

お君は、こんなことを言いながら、池のまわりを歩いて行きました、

「けれどもね、無理のない言いつけなら、お前きいてく

れるでしょう、わたしの頼みが間違っていないければ、お前は頼んだ通りによくしてくれるでしょう。そんならお前、友さんの居所いどころを教えて頂戴、米友さんはどこにいるか、そこへわたしを連れて行って頂戴、ね、そうでなければあの人を、ここへ呼んで来ておくれ。いいえ、あの人はずっとこの近所にいるのよ、近所にいるけれども、わたしをにくがっているから、それで来てくれないんだね。けれども、わたし決して友さんにくがられるような悪いことをした覚えはないのよ、あの方は気が短いから、一人で勝手に怒っているんだけれど、よく話をすれば、わたしのことだもの、そんなにわからない米友さんじゃないわ、わたし、もう一ぺん、よく話をしてみたいと思うの、あの人を怒らしておいちゃ悪いわ、ほんとにあの人はいい人なんだから、怒らしておいちゃ悪いわ。けれども、どうしてあの方はあんなに気が短いんだろう、甲州で別れる時にも、わたしばかりじゃない、あの殿様を大変に悪く思って別れたんだから……殿様を敵かたきのようにならぬように、よく知っています、それがわたしにはどうしてもわからないの。殿様は悪いお方じゃありません、米友さんもちっとも悪い人じゃありません、それなのに、どうして仇のように思うんでしょう。殿様は、あんなえらいお方でいらっしやるし、友さんは、わたしと同じことに、とても身分は比べものにはなりやしないけれども、それでもわたし、米友さんに憎まれるのはいや。いったいわたしや、殿様と米友さんとどっちが

いいんだらう、どっちがほんとうに好きなんでしょう、わからなくなりました」

ムク犬は、もとよりこの疑問に答うべくもありません。

今まで忠実に主人を見守っていたムク犬が今度は、それと違って垣根の彼方を見つめています。前後の模様を見ると、垣根のかけから庭のうちをうかがっていたものがあるらしい。お君は全くそれに気がつかないが、ムク犬は早くもそれと感づいたらしいのです。

お君はその時に身のうちに寒気を感じて、いつのまにか、恥かしい寝衣姿で、奥庭の池のほとりに立っている自分を見出しました。

「ああ、悪かった、わたしは、また気がゆるんでしまいました。誰も見ていなかったかしら。ムクや、お前こっちへおいで、わたしは内へ入りますから」

正気に返ったお君は、匆惶として縁へ上って、障子の中へ身を隠してしまいました。

十五

それから暫らくたって、両国橋を啣え楊枝で、折詰をブラさげながら歩いて行くのは例の金助です。

「占めしめ、万事こう来なくっちゃならねえ、駒止橋の獣肉茶屋で一杯飲んで、帰りがけにももんじいやへ寄って、狐を一舟括らせて、これから巢鴨の化物屋敷へ乗り込むなんぞは、我ながら凄いなんだ」

何か嬉しくてたまらないことがあるらしく、しきりに

独言を言い言い歩きます。

「ところで、今様の鈴木主水を一組こしらえ上げてしまったなんぞは、刷毛ついでとは言いながら、ちっと罪のようだ」

こう言ってニタリと笑いました。この先生こそは、相生町の老女の家の兵馬を訪ねて来て、兵馬が出たあとをお松に見つかって呼び込まれて、何か兵馬の近頃の身上について、お松に喋ってしまったことがあるらしい男です。

しかし、この先生のことだから、甲に向って喋ること、乙に向って喋ることの間に、味をつけないで喋る気遣いはありません。そうしてその間に何かうまい汁がありとすれば、その余瀝を啜って、皿まで嚙ろうという先生だから、お松に尋ねられたことも、素直には言ってしまわないことはわかっています。おべんちやらと、お為ごかしを混合にして、けだもの茶屋の飲代ぐらいは、たしかにお松からせしめていることは疑うべくもありません。

ただ、そのくらいならばいいけれども、今様の鈴木主水を一組こしらえたというような言葉は、どうも聞捨てがならない。兵馬と東雲との間が、果してどんなわけになっっているのか知れないが、それをお松に向って輪をかけて吹聴し、お松を嚇しかけるようなことにしては、これはたしかに罪です。お松はうっかりそれに乗せられるほどの女ではないけれど、こんな男の細工と口前が、つついっい大事を惹き起さないと限らないから、実際は、

お松も兵馬も、悪い奴に見込まれたと思わねばなりませんまい。

それよりもなお危険なのは、この男がこれから、染井の化物屋敷へ行くと言ったことでもあります。染井の化物屋敷とは、つまり神尾主膳らの隠れ家をいうものです。神尾の許へ行くからには、どうせ碌なことでないのはわかっています。そうしてこの男が老女の家を辞して帰る時に、垣根の蔭から何か、そっと隙見をしてその途端に、「占めた」

と言って嬉しがりはじめたのは、やっぱりその辺に何か売り込むことが出来て、それを土産に神尾へ乗り込もうという気になったのは、前後の挙動で明らかにわかります。

そうであるとするれば、その隙見は何を見たのだ。刻限から言っても、ムク犬が奥庭で、急にお君の傍を離れたことから言っても、我に返ったお君が、あわてて家の中へ隠れたのから見ても、この男は、はからずあの際、お君の姿を認めたものに違いない。そんならば確かに一大事です。甲府にいる時に、お君はたしかに神尾が一旦は思いをかけた女である、それをこの男が神尾へ売り込むとすれば、今でも神尾の好奇心を噓るに充分であることはわかっているであります。

それを知っているから金助は、また儲けの種にありついたように、前祝いかたがた獣肉茶屋で一杯飲んで、上機嫌で両国の河風に吹かれながら橋を渡って行くものと見える。

こうして有頂天になって橋の半ばまで来た金助が、急に何かにおどかされたように、よろよろとよろけると、踏み留まることができず、脆くもバツタリ前に倒れて、暫し起き上がることができません。

「御免よ、御免よ」

金助が、ばったりと倒れて、暫く起き上がれないでいる時、それを左に避けてしきりにお詫びをしている者があります。それは竹の笠を被った小柄な男でありましたが、首つ玉へ風呂敷包を結び、素足に草鞋をはいて、手に杖を持っておりました。

「この野郎、御免で済むと思うか」

ようやく起き上った金助は、目を怒らして小男を睨みつけて、言葉を荒っぽくして叱りつけました。

「御免、おいらは草鞋の紐を結んでいたところなんだ、そこへお前が来て、よろよろとよろけたから、危ねえ！と思つて左へよけたんだ、左へよけた途端にお前が前へのめつたんだから、おいらに罪はねえようなものなんだが、それでも時と場合だから、おいらの方からあやまってやらあ」

こう言つて竹の笠を傾げて、金助の面をジロリと見上げたのは、珍らしや宇治山田の米友でありました。しかしながら、金助は酔っていたせいかどうか、米友たることを知りません。だからその返答がグツと癢にさわったものと見え、

「おやおや、時と場合だから、貴様の方からあやまってやるんだって？ ばかにするな、このちんちくりん」

金助は打ってかかろうとして拳を固めると、宇治山田の米友は一足後へさがって、そのまるい眼をクルクルとさせ、

「時と場合だろうじゃねえか、おいらはこうして俯向いで、草鞋の紐を結んで、笠をこうやって前に被っているから、向うは見えねえんだ、お前の方は、笠もなにも被らねえで、前からやって来るんだから、本当なら、おいらが突き倒されてしまふところなんだ、それを、危ねえ！
と思つたから左へよけて、おいらの身体は無事だったが、お前は、そのハズミを食つて、おいらの代りに前へ倒れたんだ、まあ怪我をしなかつたのが合せだあな、勘弁しろ、勘弁しろ」

こう言つて感心にも宇治山田の米友は、相手にしないで行き過ぎようとしませす。これは米友としては出来過ぎですけれども、金助は血迷つていて、この米友の出来栄えを買つてやる余裕がありません。

「おいおい、待て待てこの野郎、背はちんちくりんだが、どこまで人を食つた野郎だか知れねえ、いよいよ癪にさわる言ひ草だ、待て」

金助は米友の筒袖を引張つて、引留めました。

「そんなに引張らなくつてもいいや、逃げも隠れもしやしねえよ、何か言ひ草があるなら、うんとこさと言ひねえな」

かかる場合に、決してわるびれる米友ではありません。

「言わなくつてどうする、今の言ひ草をもう一ぺん言つてみる、本来なら貴様が突き倒されてしまふところを、

危ねえ！
と思つたから左へよけて、貴様の身体は無事だったが、こつちがそのハズミを食つて身代りに倒れたとは何の言ひ草だ、左へよけて身体の無事であつた方は無事でよかろうけれど、身代りに倒された方こそいい面の皮だ、この面の皮をいったいどうしてくれるんだ」
金助はこう言ひながら、グイグイと米友の着物を引張りました。

「おい、あんまり引張るなよ、質の値がさがらあな、着物を引張らなくつても文句は言えそうなもんだ」

米友は仕方がなしに引き寄せられていると金助は、いよいよ怒り出して、

「この野郎、いやに落着いていやがら。いったい、人を転がしといて、身代りに倒れたで済むか、この野郎」

「だつて仕方がねえじゃねえか、おいらが倒れなけりやあお前が倒れるんだ、お前が倒れたからおいらは倒れないで済んだんだ、幾度いっただつて同じ理窟じゃねえか、いいかげんにしといた方がお前の為めになるよ」

この時に金助は、火のようになつて、
「この野郎、もう承知がでかねえ」

拳を上げてポカリと食わせようとしたが、相手が宇治山田の米友であります。

「おやおや、お前、おいらを打つ氣かい」

金助の打ち下ろした拳を、米友はしっかりと受け止めました。

「こんな獣物は痛え思いをさせなくつちやわからねえ、物の道理を言つて聞かせてもわからねえ野郎だ」

拳を取られながら金助は、齒嚙みをしていきり立っています。

「ジョ、ジョーダンを言っちゃいけねえ、理窟はおいらの方にあるんだ」

米友は金助の拳を、なおしつかりと握って、口の利き方が少し吃ります。

「放せ、野郎、放せというに」

金助はしきりにもがくけれども、米友に掴まれた手を、自分の力でははなすことができません。

「放さねえ」

米友も漸く、虫のいどころが悪くなってきたようです。

「放さなけりや、こうしてくれるぞ」

金助は左の手に持ち替えていた折を、自暴に振り上げて米友の面へ叩きつけようとしたのを、素早く面をそむけた米友が、

「野郎！」

額の皺が緊張し、面の色が赤くなって、口から泡を吹きはじめました。しかしながら、ここまで込み上げたのをグツと唳えて、ただ金助の面を睨めただけで、その握った拳を、突き放しもしなければ打ち返しもしない。じつと泡を吹いたなりに我慢しているところは、さすがに米友も、いくらか修行を積んだものと見なければなりません。

それを、どう見て取ったのか、いい気になった金助はかさにかかって、

「何だい、貴様の面はそりや。両国の見世物にだって、

近ごろ貴様のような面は流行らねえや。ちよつと見れば餓鬼のようで、よく見れば親爺のようで、鼻から上は、まるきり猿で、鼻から下だけが、どうやら人間になつてらあ、西遊記の悟空を、三日も行燈部屋へ漬けておくとそんな面になるだろう。よくまあ、昼日中、その面をさげて大江戸の真中が歩けたもんだ、口惜しいと思つたら、親許へ持ち込むんだね、親許へ持ち込んで、雑作をし直してもらつて出直すんだ」

この時分、あたりへようやく人だかりがしました。人だかりがしたから、金助は、いよいよ得意げに毒舌を弄して、米友をはずかしめようとするらしい。

「野郎！」

米友は齒をギリギリと噛み鳴らしました。けれども、まだ、自分からは打つてかからない米友は、何か思う仔細があるのか、ただしは誰人かに新しく堪忍の徳を教えられてそれを思い出したから、ここが我慢のしどころと観念しているのかも知れません。それをそれと知らずして、かさにかかっている金助は、噴火口上に舞踏していると言おうか、剃刀の刃を渡っていると云おうか、危険極まる仕事であります。

「何とか言えよ、このちんちくりん」

右の利腕を取られている金助は、この時ガーツと咽喉を鳴らして、米友の面上めがけて吐きかけようとしたから、

「野郎！」

ここに至つて米友の堪忍袋の緒はプツリと切れまし

た。片手に携えていた杖を橋の上にさしおくと、のしかかって来た金助を頭の上にひっかぶりました。米友の頭の上で泳ぐ金助を、意地も我慢も一時に破裂した米友は、そのまま橋の欄干近くへ持つて行くと見るまに、眼よりも高く差し上げて、ドボンと大川の真中へ抛り込んでしまいました。

金助を川へ抛り込んだ米友は、物凄い面をして橋の上に置いた杖を拾い取ると、あっと驚く見物を見向きもせず、跛足の足を、飛ぶが如くに向う両国を指して走せ行つてしまいました。

十六

神尾主膳の隠れている例の染井の化物屋敷は、依然として化物屋敷であります。

真中の母屋には神尾主膳が住み、そこへ出入りするのには、旗本のくずれであったり、御家人のやくざ者であったり、どうかすると、角力や芸人上りのようなものであったりするけれども、ここではあまり騒ぐことはなく、三日に一度ぐらい、主膳はその家を忍び出でて、夜更けて帰ることが多い。

それから離れの方には、例のお絹が別に一廓を構えて、若い女中を一人使つて、ほとんど母屋とは往来をしないで立籠っているかと思えば、土蔵の中にはお銀様が、怨むが如く、泣くが如く、憤るが如く、ほとんど日の目を見ることなしに籠っているのです。お銀様と神

尾の台所の世話をしているのは、練馬あたりから雇入れた女中ではあるが、この女中は少しく痴呆性の女で、それに聾ときているから、化物屋敷にいて、化物の物凄いいことを感得することができません。

今日は神尾主膳が、朝から酒につかりながら、座敷の壁へ大きな一枚板を立てかけて、酔眼を開いてそれを見据えていると、傍に、よく肥った奴風の若いのが、片肌ぬぎでしきりに墨を摺っています。

「殿様、うまくひとつ書いてやっておくんさいませよ、鼻負分にね」

「ふーん」

神尾は鼻であしらいなながら、筆立の中から木軸の大筆を取つて、ズブリと大硯の海の中へ打ち込みました。

「無駄を言うな」

「だって、後見がうまくなけりゃ太夫が引立たねえや。さあさあ、殿様の曲芸、米芾様の筆を以て、勘亭流の看板をお書きになろうとする小手先の鮮かなところに、お目をとめられてごろうじろ」

「馬鹿」

神尾は大奴の無駄を軽く叱つて、板の面を目分量して字配りを計りながら、硯の海で筆をなやしておりましたが、やがて板へぶっつけに、「江」という字を一息に書いてしまいました。

「うまい！」

大奴が半畳を入れると、神尾は苦笑いして、「気が散るからだまってろ」

と言って、今度は息を抜かずに筆をふるって、縦横に書き上げたたて看板の文字は、「江戸の花 女軽業」の七文字であります。

「太夫、御苦勞」

大奴は硯すずりの下にあつた団扇うちわを取って、神尾を煽あおぎ立てました。

書いてしまった七文字を神尾は、また右見左見とみこうみしてながめていきます。文字は決して悪い出来ではありません。文字の示す通り、女軽業の看板としては勿体もったいない書風であります。神尾とても看板書きになつたわけではなく、頼まれたればこそ、こうして筆を揮ふるうのでありましょう。そこへ廊下を歩いて来る人の音、

「殿様、殿様、ドチラにいらっしやるんでございます」

それは聞いたことのある女の声。

「おや、福兄ふくにいさんもおいでなんですか」

入って来たのは、女軽業の親方のお角でありました。

「いよう、これはこれは両国橋の太夫さん」

福兄と言われた大奴は、細い目をしてお角を迎えました。

「殿様、御機嫌よろしう」

お角は神尾の前へ手を突いて、頭を下げました。

「頼まれ物が出来上つたぞ」

神尾も御機嫌がよく、お角の面かおと、いま書き上げた看板とを見比べていますと、

「まあ、お書き下さいましたか、これはこれは、なんと
いうお見事なお筆でございましたよう、生きていますようで

ございますね」

お角も看板の文字を見て、心から嬉しそうです。生きていますとも」

神尾もまた自分ながら、書き上げた看板の文字に得意
でいます。

「太夫元、奢ちとらなくちゃあいけやせんぜ」

福兄ふくにいはこう言つて、お角を嗾けしかけました。

「奢りますとも、何なりとお望みに任せて」

「よろしい、所望がある」

福兄が改まってむきになると、

「福、貴様がでしゃばるところじゃないぞ、貴様は墨の
すり賃に、二百も貰つて引込めばいいんだ」

神尾が福兄をたしなめると、福兄は納まらず、

「いけやせん」

胡坐あぐらを組み直して強面こわもてにかかろうとするのを、お角は
笑いながら、

「福兄さんには殿様に内密で、わたしが、たくさんお礼
を致しますから、もう少し待って下さいね、今が大事の
時なんですから。その代り今度のが当りさえすれば、ほ
んとくに福兄さんを福々にして上げますからね」

「うまく言つてやがらあ。けれども、そう話がわかりや
それでもいいんだ」

福兄はそれで、どうやら納まりかけた時に、神尾主膳
が、

「お角、今に始まつたことではないが、お前の腕の凄
いには恐れ入つた」

改まったような言いがかりだから、お角も用心して、
「殿様、改まって何をおっしゃるのでございます」

「しらを切っちゃいかん、お前が今度の房州行きなんぞは運もよかったが、腕の凄さは、いよいよ格別なものだ」
「神尾の殿様、そんな気味の悪いことをおっしゃっておどかしちゃいけません、こう見えても気が小さいんですからね」

「あんまり気が小さいから、少しはオドかして、大きくしてやらぬことにはしまつがつかん」

「何をおっしゃるんですか、わたしには一向わかりません」

「お前にはわかるまいが、こつちには、すっかり種が上っているんだ、房州へ行って命拾いをして来た上に、金箱を背負い込んで来て、それでなにくわん面をして口を拭っているところなんぞは不埒千万だ、なあ、福」

主膳が福兄を顧みると、福兄は一も二もなく頷いて、
「そうですとも、そうですとも、ありや實際、不埒千万ですよ、あれはただじゃ置けませんよ」

「福兄さんまでが殿様に御加勢なんですか、金箱とおっしゃったって、まだ分らないじゃありませんか、まだ乗るか反るか、打ってみなけりやわからないじゃありませんか」

お角は外らしてしまおうとすると、神尾はそれを取って抑えて、

「その手は食わん、金箱というのは、茂太とやら茂太とやらいう小倅のことではない、そのほかに確かに見届け

たものがあるのじゃ。若い綺麗な、金のたくさんある男と、お前が仲睦まじく飲んでいたとやら、それをちやあーんと見届けた者が我々の仲間にある。お角、あんまり凄腕を振り過ぎると、祟りが怖かろうぜ、がんりきの百とやらもだまっちゃいなかろうぜ」

「エ！」

神尾からこう言われて、さすがのお角もギョツとしたようです。

「それは違います、それは違います」

お角は、あわててそれを打消すと、神尾が意地悪く、
「福、お角は違うと言ってるが、お前はと思う」

「違いますな」

福兄は得たりと引取って、空嘯く。

「では、福兄さん、お前さん、何をござらんすつたの」
「さあ、拙者が、じかに見たというわけじゃねえのだが、
両国の、とある船宿の二階で、さしむかいの影法師を、
ちらりと睨んだ者が、ちと等の仲間にあつたのだ、そうしてその一人が、両国橋の女軽業の太夫元のお角さんとやらに似ていたとか、いなかつたとか、岡焼めらが騒いでいるんだから始末におえねえ」

「え、そりやお安くありませんね、両国橋の女軽業の何とやらのお角さんといえは、多分この辺にいるお婆さんのことでしょうけれど、今時こんなお婆さんを相手にする茶人があるというのは、頼もしいことですね」

「実際、頼もしいんだから驚きまさあね。しかし、お婆さんはかわいそうですよ、年増盛りのハチ切れそうなの

を捉まえて、お婆さんはかわいそうだね」

「まあ、ようござんす、どのみち浮名うきなを立てられるうちが、人間の花ですからね」

「そりゃ花ですともさ。ですけれども、花もあんまり、こつてりと咲かれると、よその花ながら嫉ねたましくなるよ、ねえ大將」

「うむ」

「殿様も福兄さんも、なんだか奥歯にはさまるような言い方をなさるから、わたしや、どうも痛くない腹を探らているようで小焦こじれったくつてたまりません、わたしの身に後ろ暗いことがあるようでしたら、ハッキリとおっしゃって下さいな」

「ところが、どうもハッキリとは言えねえんだ、ともかく、船から上ると飛びつくように嬉しがって、お手を取って御案内申し上げ、それから後が、船宿のさしむかいという御寸法になったまでは篤とくと見届けたんだが、それから先が、惜しいことに雲隠れで……」

「人違いもその辺になると御愛嬌ですよ、その色男の面かおが見てやりたいものでしたね」

「それぞれ、それがわかれば動きは取らせねえのだが、夕方のことではあったし、嚴重に覆面はしていたし、さっぱり当りがつかなかったというのが、こっちの弱味だ。それでも、年の頃は三十前後の品格のある武士で、微行ではあるが旗本とすれば身分の重い方、ことによつたら大名の若殿でもありやしねえかと、こう睨んで来た奴がある」

「おやおや、それは大変なことになりましたね、そうしてその御身分のあるお方のお相手というのが、やっぱり両国の女軽業の古狸こねこなんですか」

「大地を打つ槌つちは外はずれるとも、そればかりは疑いなし」「ほんとうに有難い仕合せですね。そうしてなんですか神尾の殿様、あなた様は、いったいその身分のあるお武家様がどなたでいらっしゃるか、見当をつけておいであそばすでございましょうね」

と言ってお角は、そつと神尾主膳おもての面おもてをうかがいました。

「そりゃ拙者にもわからん、その若いのを生捕いけとって、旗揚げの軍費を調達させた当人に聞いてみるよりほかはなからうよ」

「では全く、殿様は御存じないんでございますね」

「知っていけば、ただは置かんよ」

「御存じないのが、あたりまえですよ、そんなことがあろうはずがございせんもの。もしありましたら、大びらに御披露して、ずいぶん皆様を羨ましがらせて上げるんですけれども」

お角はこう言って笑いましたけれども、なお神尾の腹の底を読もうとするらしい。しかし、神尾はそれ以上は何も知っておらぬようです。その時にまた廊下あわたたで慌あわしい人の声、

「殿様、殿様、神尾の殿様、金助でございます」

金助というのは多分、両国橋の上で、宇治山田の米友のために大川の真中へ抛なり込まれたその人に相違ありま

すまい。でも、無事に這い上って、この屋敷へたどり着いたものと思われませう。

お角は金助と入違いにこの部屋を外して、土産物らしい風呂敷包を抱えて、廊下を歩いて縁側から庭下駄を穿いてカラカラと庭を廻って、井戸側から土蔵の方へと行きます。

「御免下さいまし」

と小声に言つて、土蔵の戸前に手をかけました。重い扉をズズシと押し開いて、薄暗い土蔵の中へ足を踏み入れ、

「いらつしやいますか」

これも小声でおとのうてみましたけれど返事がありません。気味悪そうにお角は、蔵の中へ二足三足と足を入れて、二階へのぼる梯子段の下まで来て、

「お銀様」

はじめて人の名を呼んで、二階を見上げました。けれどもやはり返事はありません。

「御免下さいまし」

再び案内の言葉述べて、その梯子段を徐かに上って行きました。梯子段を上りつめると、頭の上に開き戸があるのを、下からガラガラと押し開いて、

「いらつしやいますか」

はじめて二階の間を覗いて見ました。それは暗澹たる一室であるけれども、南の方に向いて鉄の格子に金網を張った窓があげていましたから、下のように暗くはありません。で、畳もしっかりと敷きつめてあって、四隅

には古箆笥や、長持や、葛籠や、明荷の類が墨のように積まれてあるけれども、それとても室を狭くするといふほどではありません。

六枚折りの古色を帯びた金屏風が立てめぐらされたその外れから、夜具の裾が見えるところは、多分、尋ねる人はそこに眠っているのだろうと思われるのであります。

そこで、お角はまた遠慮をしいしい、畳を踏んで六枚折りの中を覗きました。なるほど、そこに夜具蒲団は敷かれてあり、枕もちゃんと置いてありましたけれど、主は藻脱けのからであります。

「おや、どこへお出かけになつたのでしょうか」

お角はいぶかしそうに四辺を見廻しました。それは朝起きたままで、床を敷きっぱなしにしておいたのではなく、どこかへ出かけて、帰りが遅くなる見込みから、こうして用心して出たものと思われませう。

お銀様はいつたい、どこへ出て行つたのだろう、それがお角には疑問でした。この人は決して外へは出ない人であつた。自分が知れる限りにおいては、この土蔵の中を天地として、あの盲いたる不思議な剣術の先生に待たずいて、一步もこの土蔵から出ることを好まない人であつた。それがこのごろは、こうして夜へかけてまで外出して帰るといふのは、いつたい何の目的があつて、どこへ行くのだろうと、以前を知るお角はそれが不思議でなりません。

それで、四辺を見廻していると、少し離れたところの

机の上にも、その左右にも、おびただ夥しい書物が散乱しているのであります。この土蔵に蔵しまわれた本箱の中から、ありたけの本を取り出して、お銀様が、それを片っぱしから読んでいるものとか思われません。さすがに大家に育った人、お角なんぞから見ると、たった一人で牢屋住居のような中におりながら、別の天地があつて、どくしょさんまい読書三昧に耽ひけつていられることが羨ましいように思われます。

お角は、机の傍へ寄つて見ましたけれど、ドチラを見ても、四角な文字や、優しい文字、とてもお角の眼にも歯にも合わないものばかりです。氣象の勝ったお角は、なんだか自分が当てつけられるように感じて、書物を二三冊、あちらこちらにひっくり返すと、ふと、思いがけない絵の本が一つ現われました。

それは極彩色の絵の本で、さまざまの男や女が遊び戯れている、いまよう今様源氏の絵巻のようなものでありました。

お角はそれを見ると莞爾にっこと笑つて、

「それごらん、お銀様だつて、ただの女じゃありませんか」

しのたまわ子曰くや、こそ侍はべれのうちに、こんな浮世絵草紙を見出したことがお角には、かえつて味方を得たように頼もしがられて、皮肉な笑いを浮べながら、窓の光に近いところへ持ち出して、その絵巻を繰りひろげて見ると、

「おや？」

と言つて、さすがのお角がゾツとするほど驚かされました。

それは、絵巻のうちの美しい奥方の一人の面かおが、蜂の巣のように、針はりか錐きりかのようなもので突き破られていたからです。悪戯いたづらにしてもあまりに無惨な悪戯でありましたから、お角は身ぶるいしました。急いでその次を展ひらげて見ると、それは花のような姫君の面おもてが、やはり無惨にも同じように針で無数の穴が明けられていました。

「おお怖い」

その次を展ひらげると、水々しい町家の女房ぶりした女の面が、今度は細い筆の先で、無数の点を打ちつけて、盆の中に黒豆を蒔まいたようになっていきます。

あまりのことに呆あきれ果ててお角は、それからそれと見てゆくうちに、一卷の絵本のうち、女という女の面かおは、どれもこれも、突かれたり汚されたり、完膚かんぷのあるのは一つもないという有様でした。

「あんまり、これでは悪戯いたづらが強過ぎる、なんぼなんでも僻ひがみが強過ぎる」

お角は、この悪戯がお銀様の仕業しわざであることは、よくわかつています。そうして、この絵本のうち、美しい男も、好い男も、強そうな男も、いくらも男の数はあるけれども、それには一指も加えないで、女だけをこんなに傷つけ散らし、汚し散らして、ひとり心を慰めようとするお銀様の心持も大概はわかっているが、それにしてもあんまり僻ひがみが強過ぎて、空怖ろしいと思わずにはおられなくなりしました。

いったい、お角はかなり人を食った女で、男も女も、あんまり眼中には置いていない方だが、どうもお銀様と

いう人にばかりは、一目も二目も置かなければ近寄れないような心持で、これまでいるのが不思議でした。

あの呪われた、お銀様の顔が怖ろしいというわけではなく、どうもお銀様の傍へ寄ると、お角は何かに圧えつけられるようで、ほかの男や女のように、容易くこなすことができません。何を言うにも大家の娘で、持って生れた品格というものが、お角と段違いなせいであるならば、お角は駒井能登守にも、神尾主膳にも、あんなに心安立てにはできないはずだが、お銀様にジロリとあの眼で睨められると、口から出ようとした言葉さえ、咽喉へ押詰ってしまうのが、自分ながら腑甲斐のないことに思われて、あとで焦ったがるが、その前へ出ると、どうしても段違いで相撲にならないことが自分でわかるだけに、口惜しくてならないのです。

お銀様の応対は、いつも懷中に匕首を蓄えていて、いざと言えば、自分の咽喉元へブツツリとそれが飛んで来るようで、危なくてたまらない。お銀様は、たしかに武術の心得もあって、何者でも身近く寄せつけないだけの用意は、いつでもしている。神尾主膳ほどの乱暴者でも、うっかり傍へ近寄れないのはそのせいでもあるが、お角の近寄れないのはそれだけではない。どこがどう強くって、どんなに怖いのだかわからないなりに、お角にとってはお銀様が苦手です。

お角はその絵本を見ると、お銀様の生霊がいちいちそれに乗りうつって、この薄暗い土蔵の二階の一間には、すべて陰深たる何かの呪いの気が立てこめているよう

で、怖ろしくてたまらないから、急いで絵の本を伏せて、梯子段の降り口にかかりました。

離れにいるお絹は、このごろでは、ずっと以前のよう
に切髪に被布の姿で、行い澄ましておりました。母屋の方へは滅多に出入りしないけれども、どうしたものか、お角が来た時だけは、お絹の神経が過敏になります。今日もお角が訪ねて来たことを知って、

「また、あの女が来たようだから、お前、御苦労だが様子を見て来ておくれ」

と召使の女中に言いつけて出してやりました。そのあとへ、

「御新造、おいでか」

庭先から入り込んで来たのは、前に福兄と言った大奴でありませう。いつのまにか着物を着替えて若党の姿になり、脇差を差して刀を提げ、心安立てに縁から上って来ました。

「おや、福村さん」

と言って、お絹は愛想よく迎えました。お角に言わせればこの人は福兄で、ここへ来ては福村さんになる。前の時は奴風で、ここではもう若党に早変わりしているのが、化物屋敷の化物屋敷たる所以でありましょう。

若党の福村は座敷へ入って、しきりにお絹と話をしていたが、暫くして、

「これから大将のお伴と化けて、番町まで出向かにならん、今日はこれで失礼」

と言って、慌しく辞して行きました。

お絹は、それを見送っていました。やがてハタと障子を締めきって、

「面白くもない」

つんと机に向き直って、頬杖をつき、すこぶる不機嫌の体であります。それは実際、お絹にとっては面白くないことでしょう。今の福村の話というのは要するに、お角を賞めに来たようなものなのです。お角が房州まで出かけて行って、あやうく命拾いをして帰った上に、掘出し物を買って込んで来るし、それに大名だか旗本だか知らないが、ともかくも身分あるらしい立派な金主をつかまえて、近日花々しく両国橋で、二度の旗揚げをしようという運びになっていることを福村が、お絹の前で話して、相変らずあの女の腕の凄いことを吹聴して行きました。

お絹の前で、お角の腕の凄いことを吹聴するのは、つまりお絹の腕のないことをあてこすりに来たといひがまれでも仕方がない。イキとハリとになっているのを、福兄が知らないはずはなからうと思われまします。女軽業にしろ、見世物にしろ、女の腕一つで、一旗揚げようというのとはかくエライことでないことはない。そうして切つて廻して屋敷へまで吹聴に来られるのを、指を啣えて見せつけられるのは、お絹として納まらないことであるのは申すまでもないことです。

「忘れた、忘れた、印伝の煙草入を忘れてしまった」

一旦出て行った福村が後戻りして来たから、何かと思つて煙草入を忘れていたのです。なるほど、火鉢の下に転がっているのは、ほんものか擬いか知らないが、とに

かく印伝革の煙草入であります。

福村は無精に、縁側から手を突き出して、「済みませんが突き出しておくんない、でもその印伝はほんものだから安くねえんだ、ほんものだということが両国橋の太夫元が、おれにくれたんだ、だから、おいらにとってお安くねえ代物だ」

「持っておいで」

お絹はゲジゲジでも摘むように、その印伝の煙草入を取り上げると、ポンと縁側へ抛り出しました。

「おや御新造、いやに荒っぽいんですね」

福村は抛り出された煙草入を、わざと丁寧に拾い上げておしいただく真似をして腰へさし、トットと行ってしまいました。

十七

その晩のことでありました、吉原の大門を出た宇津木兵馬は、すれ違いに妙な人と行逢つて、それを見過ごすことができなかったのは、それは羽織袴に大小を帯びた立派な武家の姿をしていたが、供人は一人もつれず、一面は嚴重に覆面で包んでいます。

兵馬はこの廓へ出入りするごとに、往来の人の姿に注意を払っていないことはない。ことに覆面した武家姿のものに向つては、尾行までしてみることが一度や二度ではなかったが、この時すれ違った覆面の人もまた、その例に洩れることができませんでした。

兵馬はワザとやり過ごして様子をうかがうと、この覆面の武家の後ろ姿に合点のゆかぬ節々が幾つも現われてきます。第一、この武家の歩きぶりがつとめて勢いよく闊歩しているようなものだが、どこやらに無理がありません。第二には、差している大小が釣合わないということはないが、なんとなく重そうに見えて、差し方がこなれていないことです。この二つを以て見ると、さるべき者が、わざと武士の姿をして来たものか、そうでなければ、病気上りの人ででもありそうです。

兵馬は、あまり不思議だから、非常中の非常手段ではあったが、ワザと近寄ってその武家に力チツと、自分から鞆当てを試みました。

武士として鞆当てを受けたのは、果し状をつけられたようなものであるにかかわらず、その武家は知らぬ顔に、人混みに紛れて逃げ去ろうとするのは歯痒い。

到底このままには見過ごし難いから、あとをつけると、件の覆面は人混みに紛れて、見返り柳をくぐり土手へ出て、暫く行くと辻駕籠を呼びました。

それを見ると兵馬も、同じように駕籠を傭おうと思っただけれど生憎それはなし、刀と脇差を揺り上げて、いずこまでもこの駕籠と競争する気になりました。

この駕籠は、竜泉寺方面から下谷を経て、本郷台へ上ります。

本郷も江戸のうちと言われた、かねやすの店どころではなく、加州家も、追分も、駒込も、いっこう頓着なしに進んで行くこの駕籠は、果してどこまで行ってどこへ

留まるのだから、ほとほと兵馬にも見当がつかなくなりました。

しかしながら、駕籠は、なおずんずんと進んで行くうちに、左右は物淋しい田舎の畑道のようなところになっているようです。おおよその方向と、歩いて来た道程で察すれば、駒込の外れか、伝中あたりか、或いは巢鴨まで足を踏み入れているかも知れないと思われまします。

とあるお寺の門の前へ来て、はじめて駕籠がハタと留まりました。兵馬も足をとどめて物蔭から遠見にしていると、駕籠賃も酒料も無事に交渉が済んで駕籠屋は引返す。駕籠を出た覆面は、お寺の門の中へは入らずに、垣に沿うて横路へ廻る。左がなにがし大名の下屋敷とも思われる大きな堀、右は松並木で、その間に、まばらに見える茅葺の家が、もう一軒も起きているのはありません。茶畑があつて、右へ切れる畑道の辻に庚申塚があります。そのとき兵馬は、もうよかろうと思つて、後ろから、

「お待ち下さい」

「エ！」

兵馬に呼びかけられて、覆面の武家は悸として立ちどまりました。追いついた兵馬は、

「お待ち下さい」

と言つてわざと、覆面の刀の鐙を取りました。

「どなたでございませぬ」

覆面の武家は、非常なるきょうふに打たれたようだけれども、その言葉は丁寧で、そうして物優しくありましたから、兵馬はかえって自分の挙動の、あまりになめ

「ああ、左様でござるか」

兵馬はそれで、いちおう納得しました。

「して、お屋敷は？」

と次に念を押しした時に女は、

「それは……」

と言つて口籠りました。

「強いてお尋ねは致さぬが、夜更けのこと故、そこらあたりまでお送り申しませう」

「御親切に有難うございますが、屋敷には、ちと憚ることがござりまする故、どうぞ、このままでお見逃し下さいませ」

その時に、向うの屋敷道に小さく提灯の火影が現われ、話をしながら二三の人が、こちらへ向いて歩いて来るようです。その提灯を見ると、男装した女があわてて、「御免下さいませ、あの提灯は、あれは」

と言つて、四辺を見廻したが、背後にあったのがちょうど、庚申塚です。兵馬に気兼ねをしながら女は庚申塚の後ろへ身を隠しました。兵馬もそこにじっとしてはいられない気になって、男装した女の武家と同じように、その庚申塚の背後へ身を隠しました。

そうしているうちに提灯が、庚申塚の前へ通りかかります。

お供が提灯を持って先に立ち、真中に立派な羽織袴の武士、それにつづいて若党と見ゆる大兵な男の三人づれが、この庚申塚の前を通りかかつて、

「あ、悪いな、提灯が消えちまった」

ちようど、時も時、その庚申塚の前まで来た時に提灯が消えてしまいました。これは別段に風があつたというわけでもなく、また物につまづいたというわけでもなく、長い時間とぼされていた蠟燭の命数がここへ来て、自然に尽きてしまったのだから是非ありません。

「立つは蠟燭、立たぬは年期、同じ流れの身だけれど……かね」

「もう、提灯は要らんよ」

それは主人の声であるらしい。

「それでも、無提灯で帰るのは景気が悪いですからね、景気をつけて参りませうよ」

提灯持ちは、火打道具をさぐっているものらしい。

「よせよせ、提灯で足許を見られるような、兄さんとは兄さんが違うんだぞ」

りきみかえっているのは、若党の肥った男であるらしい。

それをやり過ぎした兵馬と男装の女とは、庚申塚の陰から出て来ました。

「どうも不思議だ、今のあの武家は、たしかにあれは神尾主膳に違いない」

兵馬はこう言つて、闇に消えて行く三人の後ろ影を見つめて追いかけてました。

十八

それからいくらか経たない後、両国の見世物小屋の屋

根から高く釣り下げられた大幟おほのぼりに、赤地に白く抜いて、とあります。

「山神奇童 清澄の茂太郎」

その見世物小屋というのは、過ぐる時代に、珍らしい印度人の槍芸やりげいのかかった女軽業おんなかるわぎの小屋で、その後一時は振わなかったのを今度、再びこの山神奇童が評判になって、みるみる人気を回復しました。

「安房の国、清澄の茂太郎は、幼い時に父母に別れ、土地の庄屋に引取られ、いろいろと憂き艱難、朝あしたは山、夕べは磯、木を運んだり汐しおを汲んだり、まめまめしく働くうちに、庄屋のお嬢さんに可愛がられ、お嬢さんの頼みで、鋸山は保田山日本寺の、千二百羅漢様の、御首を盗んだばっかりで、お嬢さんと引分けられ、清澄山へと預けられ、そこで修行をするうちに、空を飛ぶ鳥や地に這はう虫、山に棲すむ獣と仲良しになり、茂太郎が西といえば西、東といえば東、前へといえば前、後ろへといえば後ろ、泣けといえば泣きもする、笑えといえば笑いもする、芳浜の小島に、生えている美竹めたけを、笛にこしらえ吹き鳴らす、その笛の音を聞く時は、往ゆく鳥は翼を納め、鳴く虫は音をしのび、荒い獣も首こうべを低たれて、茂太郎の傍へと慕い寄る……真紅島田しんくしまだの十八娘、茂太郎のために願かけて、可愛の可愛のこの美竹」

誰いうとなく、こんな文句が流行はり出したのは、それから暫くの後でありました。

看板に山神奇童とあるから、それは山男の出来損ない

のようなものであろうと、誰も最初はそう思っておりましたが、見に来たものは、まず誰でもその意外なものに驚かされないわけにはゆきません。清澄の茂太郎なるものは、まことに珠たまのような美少年でありました。天成の美少年である上に、その芸をかえる度毎に、装よそおいをかえました。或る時は薄化粧して鉄漿かねつけた公達きんたろの姿となり、或る時は野性そのままの牧童の姿して舞台の上に立つけれども、その天成の美少年であることは、芸をかえることによっても、装よそおいを変えることによっても変ることはありません。

「まあ、綺麗きれいな子、可愛いのね」

まずこの美少年の美を愛するものは、婦人の客でありました。

「物は磨いてみなけりやわかりません、あの子が、あんなに綺麗になろうとは、わたしも思っではいなかった」

お角もこう言っつて、茂太郎の美しくなったことに眼を見開きました。だから、仲間の女芸人たちが、茂太郎を可愛がることは尋常ではありません。美少年の茂太郎は、楽屋でも可愛がられるが、婦人のお客からも可愛がられます。物好きな婦人客は、わざわざこの美少年を、近所の茶屋に招いて親しく面かおを見ようとする者がありました。その時はお角が、ちゃんと、おばさん気取りで附ついて行くものだから、お客はうっかり手出しもできないで、うっとりで見惚みとれて、

「まあ、綺麗な子、可愛いのね」

そうして、盃と御祝儀を与えて帰されることも度々あ

りました。茂太郎は、こんな意味において、日に日に婦人の鼻負客をひきつけていました。ある種類の婦人客のうちには、何かの好奇から、茂太郎を競争する者さえ現われようという有様です。お角も、その人気を得意には思いつながら、また心配にもなってきました。

両国附近のある酒問屋の後家さんが、ことに茂太郎を執心で、お角もそれがためには思案に乱れているとのことでしたが、本人の茂太郎は、いっこう平気で、自分の周囲に群がる肉の香の高い女たちには眼もくれず、清澄の山奥から連れて来たという、唯一の友達と仲睦まじく遊んでいました。

茂太郎が唯一の友というのは、長さ一丈五尺ばかりある一頭の蛇です。

順番になると茂太郎は、この蛇を連れて舞台へ現われて、芳浜の小島の美竹で作ったという笛を吹いて蛇を踊らせます。舞台から帰ると自分の楽屋に蛇を連れ込んで、食物を与えたり、芸を仕込んだりしています。夜になると枕許の箱へ入れて、藁をかぶせてやり、「お休みなさい」

蛇の持ち上げた鎌首を撫でると、蛇は咽喉を鳴らして眠りに就くという有様であります。

茂太郎はありきたりの蛇使いではありません。この子は、子供の時分から蛇に好かれる子でありました。人のいやがる蛇を集めて大切に育てておりました。

ある日のこと、表通りは押返されないので賑やかだが、人通りもない湿っぽい路次のところから、この軽業小屋

の楽屋へ首を出した一人の盲法師がありました。

「こんにちは」

舞台では盛んに三味線、太鼓の音や、お客の拍手がパチパチと聞えているのに、ここでは案内を頼んでも、出て来る人がありません。

「こんにちは」

二度目に言ってもまだ返事がないから、盲法師は気兼ねをしながら中へ入って来ました。薄汚ない法衣を着て、背には袋へ入れた琵琶を頭高に背負っているから琵琶法師でありましょう。菴張りの中へ杖を突き入ると、「おいおい、ここへ入って来ちゃいけねえ、按摩さん、勘違いしちゃいけねえよ」

通りかかった楽屋番が注意を与えると、盲法師は、「はいはい、あの、こちら様に、清澄の茂太郎がおりますんでございましょうか。おりますんならば、逢いたくってやって参ったものでございますから、お会わせなすって下さるわけには参りませうまいか」

「何ですって、茂太郎さんに会いたいんだって？ お前さん、何の御用でおいでなすったんだい」

「へえ、別に用というわけでもございませませんが、人さんのおっしゃるには、両国のこれこれのところ、清澄の茂太郎が今、大変な評判になっていてということでございますから、こうやって会いに参りました」

盲法師は、竹の杖に両手を置いてこういふと、楽屋番は不機嫌な面をして、

「そりや、茂太郎さんはこちらにいるにはいるんですが、

忙がしいから、そうお目にかかれずまいよ」

「そうでございますか、そんなに忙がしいんでは無理にと申すわけには参りませんね。わたくしもね、こちらへ来ては、まだ一度も会わないものでござんすからね、評判を聞くと、どうも会ってみたくて堪らなくなりましたんで、それでこうやって尋ねて参りました、ちよつともよいから会って行きたいんですが、それも参りませんでしょうかね」

「せっかくだが、今日は駄目だよ、また出直しておいでなさいまし」

「それでは、また出直して来ることに致しましょう、茂ちゃんに、そうおっしゃって下さい、弁信が尋ねて来たとおっしゃって下されば直ぐわかります。私もね、あの子が山を逃げると間もなく、山を出てこうやってこの土地へ参りました、ただいまのところでは法恩寺の長屋に厄介になっておりますんですが、ことによると近いうち、しもうさ下総の小金ヶ原の一月寺いちげつじというのへ行くことになるかも知れません、それはまだきまつたわけじゃあございませんから、当分は法恩寺に御厄介になつてゐるつもりでございませぬ、またわたくしも訪ねて参りますが、茂ちゃんにも、どうか遊びに来るようにおっしゃって下さいまし。それでは今日はこれで失礼を致します」

背に負っている琵琶を重そうに、楽屋番の前に頭を下げたのは、例の清澄寺にいた盲法師の弁信でありました。

「ようござんす、そう言いましよ。おっと危ない危ない、突き当ると溝とどですぞ、板囲いについて真直ぐにおい

でなさいまし、広い通りへ出ますから」

楽屋番は出て行く弁信を、後ろから気をつけてやりましたけれど、そのあとで、

「いやに薄汚うすきたねえ坊主だ、どうしてこんなところへ入って来やがったろう、一人で入って来たにはあんまり勤が良過ぎらあ」

ぶつぶつ言つて、中へ引込んでしまったが、弁信から言ことづ伝てられたことは一切忘れてしまつて、その趣を茂太郎に取次とつぎごうともしない。弁信は湿ぬっぽい路次ろじを辿たどつて、広い通りの方へ歩いて行きました。

清澄の茂太郎が両国へ現われるのと前後して、盲法師の弁信も江戸へ現われました。

ところもあまり遠からぬ法恩寺の長屋に居い候こうをすることになつた弁信は、毎夜、琵琶を掻かき鳴らして江戸の市中をめぐります。清澄にゐる時分、上方から来た老僧から、弁信は平家琵琶を教へてもらいました。

「祇園ぎおん精舎しょうしゃの鐘かねの聲こゑ、諸行無常しよぎやうむじやうの響ひびあり、沙羅さら双樹じやうじゆの花の色いろ、盛者しょうじや必衰ひつすいの理ことわりをあらはす……」

もとよりそれは本格の平家でありましたけれど、門付かどつけをして歩いて、さのみ人の耳を喜ばすべき種類のものではありません。だからこの盲法師をつかまえて、錢かを与えようとする人は極めて乏しいものです。ただでも耳を傾けようとする人すら、極めて少ないものであります。

どうかすると、しかるべき身分の人が、「珍らしいな、いま平家を語るものは江戸に十人と有る

か無いのだが、その平家を語って、門付けをして歩くのは珍らしい」

と言つて珍らしがり、わざわざ自分の屋敷へまで招んでくれる人がありました。そんな人の与える祝儀が唯一の実入りで、市中で銭を与える人は、前に言う通り極めて少ないものでありましたけれども、弁信は怠らずに、それを語つて歩きます。

この頃、両国で茂太郎の評判が高いのを聞き、もしやと思つて今日は出がけに、この軽業小屋を訪ねてみましたけれど、楽屋番はすげなく断わつてしまいました。すげなく断わられても、大して惜げもせず路次を立ち出でました。

で、どこをどう歩いて来たか、その夜になつて、もう琵琶を袋へ納めて背中へ廻し、家路に帰ろうとする気配で通りかかったのは、例の柳原河岸です。

「もし、ちよいと」

河岸の柳の蔭から呼ぶものがありました。呼ばれる前に立つてしまつた弁信は、

「はい、どなたか私をお呼びになりましたか」

そう言つて例の法然頭を左右に振り立てました。

「ちよいと」

柳の蔭で、声ばかりが聞えます。その声は若い女の声であります。

「お呼びになつたのは私のことでございますか、何ぞ私に御用でございますか」

「そんなに四角張らなくつてもいいじゃありませんか、

遊んでいらつしやいな」

「エ、私に遊んで行けと言うんでございますか、あなた様のお宅はドチラでございますか」

「何を言つてるんです、こちらへいらつしやいよ」

「あの、琵琶を御所望でございますしやうな」

「琵琶？ そんなものは知りませんよ、そんなことはどうだつていいじゃありませんか」

「いいえ、よくはございません、わたくしは琵琶弾きなうでございますよ、眼が不自由なものでございますからね、それで、琵琶を弾いて、人様からお恵みを受けているような身の上でございます、琵琶も私のは平家でございますから、薩摩や荒神のように陽気には参りませんでございます、それに、私も未熟者でございます、あんまり上手とは申し上げられないのでございますから、芸人を呼ぶと思召さずに、哀れな盲を助けると思召してお聞き下さいまし、そうでないと、お腹も立ちましようと思ひます」

弁信はこう言つて、あらかじめ申しわけをすると、柳の蔭にいた女は笑いこけるように、

「滅多にこんな正直なお方にはぶつつからないのよ。お前さん、もうお帰りのようだが、ドチラへお帰りになるの」

「エエ、私でございますか、私はこれから本所へ帰るんでございますよ、本所の法恩寺の長屋に住んでいる、弁信というものでござんすからね」

「まあ、本所へ帰るの、それじゃ、わたしも少し早いけ

れど、一緒に帰りましょう」

ずっと前に、宇治山田の米友が、この通りで、同じような女の声で呼び留められたことを御存じの方もございましょう。

柳の蔭から出て来たのは、お蝶と言ったその時の女でございませう。

お蝶は、決して醜い女ではありません。もう二十二三になるでしょうか、背がスラリとして色も白く、面かほに愛嬌があります。こんなところには珍らしいくらいの女で、明るい世間へ出しても、十人並みで通る女でありました。手拭を頭から被かぶって出て来たお蝶は、弁信の傍へ寄って来て、

「わたしも、本所の鐘撞堂かねつきどうまで帰るんですから、送って上げましょうか」

「はい、有難うございます」

お蝶は弁信の案内者になりました。弁信は異議なくその好意を受けて、二人は打連れて淋しい河岸を歩いて行きます。

「弁信さん、あなたは法恩寺様の長屋に、ひとりでいらつしやるんですか」

「エエ、たった一人でおります、ひとりぼっちでございませう」

「御飯の世話なんぞは、誰がしてくれるんです」

「みんな自分でやるんでございます、これから帰ってお茶漬を食べて、それから床を展のべて、ゆつくりと足を踏伸のばすのが、私の一日中の楽しみなんです」

「眼が不自由で、よくそんなことができませうね」

「でも、近所の人様が可愛がって下さる上に、私は御方便かんに勤かがようございますから、世間並みの盲目めくらのように不自由な思いは致しません」

「それでも、病氣の時だとか、洗い洗濯だとかいうことはお困りでしょう、悪くなければ、わたしが時々行って、お世話をして上げるけれども」

「悪いどころじゃありません、どうかいつでもおいでなすって下さいまし、お正午ひる前のうちは家にいるんでございますから。法恩寺の長屋へおいでになって、琵琶の盲目とお聞きになれば直ぐにわかりますから」

「それでは明日の朝参りましょう」

「どうぞおいで下さいまし。失礼でございますが、あなたのお家は、本所のどちらでございましたかね」

「わたしのところは本所の鐘撞堂かねつきどう新道しんみちなのです、鐘撞堂新道の相模屋という家にいてお蝶というのが、わたしの名前ですからよく覚えていて下さい、そうして、わたしも昼間はたいいてい遊んでいますから、お暇の時は話しておいでなさいな」

「そうでしたか、鐘撞堂新道というのは、わたしのところからそんなに遠い所ではございませんね」

「エ、近いんですよ」

「わたしは、房州の者でございましてね、ほんのツイ近頃この江戸へ参ったものですから、よく案内がわかりませんでございませう、それに友達といつても一人も無いんでございますよ。でもね、人様が大へん私を親切にして

下さるものですから、そんなに淋しいとは思いませんよ。それに私は、どなたでも人様が好きなんです、何でもいから人様のためになるようなことばかりして、一生を送って行きたいと思ってるんですよ。そりゃ、出来やしませんよ、なにしろ人間がこの通りでございますし、その上に不具かたわときていましょう、人様のためになるどころじゃなく、人様の御厄介にならないのがめつけものです。でもね、こうして拙つたない琵琶を弾いて歩きますと、人様が御ごひい負まをして下さって、自分の暮らしには余るほどのお金が手に入るもんですから、それをみんな善いことに使ってしまいたいと、こう思っておりますんでございませ

「まあ、お前さんはなんとという感心な人でしょね、わたしなんぞも、早くそんな心がけになればいいんですけれど」

「世間のことは、なかなか思うようにはならないものでございますよ。そうして、あなたは鐘撞堂で、何を御商売になすっておいでなさいませぬ」

弁信はこう言って、お蝶にたずねました。

女は、その返答には困りました。

「そんなことは何だっさいいいじゃありませんか。それでもね、わたしはお前さんのような人は大好きなのよ」

ともかくも、ちょっと道ばたで行逢った人にしては、あまりになれなれしい物の言い方でありました。しかし、弁信は少しもその相手方を疑うようなことはありません。

「あ、鐘が鳴りましたね、あれは上野の鐘ですね」

弁信がたちどまって、鐘の音に耳を傾けるようでしたが、お蝶にはそれが聞えませんが、

「あなた、何を言ってるんです、鐘も何も聞えやしないうじゃありませんか、上野の鐘がここまで聞えるものですか」

「いいえ、あれは上野の鐘です、ほかの鐘とは音の色が違います」

弁信は取合わないで、鐘の音を数えていたが、

「ああ、九ツです、もう九ツになりましたね」

「そうでしょう、もうかれこれ、そんな時分でしょうよ」

それで二人はまた歩き出しました。左は土手、右はもみくら粉倉の淋しいところを通って行くと、和泉橋いずみばしの土手には一個所の辻番があります。

「どうも御苦労さまでございます、私は本所の法恩寺前の長屋に住んでおりまして、弁信と申します琵琶弾きでございます、おそくなりましてまことに相済みませんでございます」

こう言って、先方から何も言われぬ先に弁信は丁寧めくらに名乗って、お辞儀をしてその前を通り過ぎました。お蝶はその馬鹿丁寧をおかしいと思いつつも、盲目めくらだといふのに、どうしてここに辻番のあることだの、辻番に人がいるかいないかだの、それがわかるのだらうかと不思議に思います。そのみならず、さきに鐘の音に耳を傾けた時も、自分にはどこで、どんな鐘が鳴ったのだから、さっぱりわからないうちに、この琵琶弾きはそれを聞き

取った上に、確かにこれは上野の鐘だと極めをつけてしまったのも不思議です。盲は目が見えない代りに、勘がよいものだというのが、それにしてもこの琵琶弾きは、あんまりに勘が好過ぎると思いましたが、

「弁信さん、お前さんは、なんだってあんな馬鹿丁寧な辻番へ挨拶をするんです、第一、番人がいやしないじゃありませんか」

わざとこう言ってみると、

「いいえ、そんなことはございません、二人おいでになりましたよ、一人の方は番所の中に、一人の方は、たしか棒を持って、私たちを咎めようとして、こっちへおいでなさるようだから、私は、その前にあいつで、ちゃんと申しわけを致してしまいました」

弁信に凶星を指されて、

「まあ、なんてお前さんは勘がいいんでしょう」

お蝶は舌を巻いて、暗いところから弁信の面を見直しました。それは、もしか、この按摩が偽盲で、そつと目をあいているからではないかと思ったからです。しかし、盲目であることに正銘偽りのないのは、その面つきでも、足どりでも、また杖のつきぶりでも、十分に信用ができるのであります。

こうして二人は、郡代屋敷のところまで来てしまいました。その時に、盲法師の弁信が、凝然として郡代屋敷の扉際に突立ってしまいました。

「あ、あ、あ、あぶない」

杖を以て、前へ出ようとするお蝶を、弁信はあわてて

支えました。

「どうしたの」

「いけません、いけません」

弁信は必死に杖を以てお蝶を支えて、一步も進ませないようにしながら、己れは身を戦かしたつ立っていたのであります。

「どうしたんですよ」

「誰かいます、行っってはいけません、行くと殺されます」

「エ！」

お蝶は弁信の傍へ、固くなって立ちすくみました。

土手の蔭に、蛇がからみ合っているように、二つの人影が一つになって、よれつ、もつれているのを弁信はむろん見ることができません。お蝶もそれを知るには、まだあまりに遠い距離でありました。

しかしながら、土手の蔭の二つの人影は、からみ合つて、そうして、おのおの炎のような息を吐いていることはたしかです。

「お前の歳は幾つだ」

炎のような息を吐きながら、一つの影が上から押しつぶせるように言いました。

「どうぞ御免下さい」

抱きすくめられているのは、やっぱり女の声でありました。

「うむ、歳は幾つだ、それを言え」

大蛇が羊を抱き締めたように、ぐるぐると巻いた、そ

の炎の舌のあるじは、まさに男です。

「十九でございます」

女は息も絶々たえだえになつてゐる。

「十九……名は何というのだ」

「藤と申します」

「なんで、この夜更けに独り歩きをする」

「御信心に参りました」

「どこへ行った」

「杉の森の稲荷様へ願がけに参りました」

「何の願がけに」

「それは、兄が病気でございますから」

「その兄は幾つになる」

「あの……二十歳はたちでございます」

「この夜更けに、丑うしの刻としま参りをするほど、その兄が恋しいのか」

「エ……」

「このごろのような物騒な夜道に、しかもこの淋しい柳原の土手を若い女、たった一人で出かけたのを、お前の親たちは承知か」

「いいえ、誰にも内密ないしよでございます」

「そうして、お前は死ぬほどにその男が恋しいのか」

「何をおっしゃるんでございます、どうぞ、お助け下さいまし、ここをお放し下さいまし」

「本当のことを言え」

「それが本当でございます、決して嘘を申し上げるような者ではございませぬ」

「嘘だ、お前は淫奔いたずら者だ」

「いいえ、左様なものではございませぬ」

「淫奔者に違いない」

「あ、何をなさるんでございます、あなたはほんとうに、わたしを殺して——」

女は身悶みもだえして、からみついている蛇の口から逃れようとするが、いよいよそれは、しっかりと巻き締めて、骨身ほねみに食い入るようです。

「苦しいか」

「く、苦しいでございます」

「さあ、もっと苦しむがれ」

「死にます、あ、あ、息が絶えてしまいます、死んでしまします」

「締め殺してくれようか」

「あ、苦しい、苦しい」

「その苦しみを、お前の心中立てする男に、見せてやりたいわい」

「もう、お助け下さい、もうお手向いしませんから、どうぞ命をお助け下さい、この上、あなたは、ほんとうに、わたくしを殺しておしまいなさるんですか、あ、刀を、刀をお抜きになつて、それでわたしを殺しておしまいなさるのですか、ああ、いけません、わたくしは、まだほんとうに、殺されたくはございませぬ、生きて、生きていたいののでございませぬ、生きて一目あの人に……生きていなければならぬのでございませぬ、もうお手向い致しませんから、その代り、わたくしの命だけはお助け下さいまし」

いまし、どうなってもようございますから、命だけはお助け下さいまし、あ、あ、あれ——人殺し……」
女はついに悲鳴をあげました。その悲鳴は忽ち弱り果てて、あ、あ、あ、と引く息が波のように、闇の中のたうち廻っているのが、まざまざと眼に見えるようです。

石のように立ち尽していた弁信が、その恐怖から醒めたのは、それから暫く後でありました。

「弁信さん」

お蝶もこの時に、ようやく口を利けるようになって、
「弁信さん、お前、何を見ていたの」

「わたしや、何も見えやしません、ただ、だまって聞いていました」

「何を聞いていました」

「あすこで人が殺されたのを聞いておりました、女の人
がなぶり殺しに殺されるのを、だまって聞いておりました」

「何ですって、女の人を殺された？」
「冗談じゃありません」

「嚇しじゃありません、かわいそうに、ぐっと抱き締め

られて、その上に刀で幾度も抉られました」

「ほんとに、そんな気味の悪いことを言うのはよして下さい、
さうでなくってさえ、わたしはお前さんに留められてから、
何だか凄くなつて、怖くなつて堪らないのですもの」

「どうしてまた、私は、あの人を助けて上げられなかったのでしょう」

「あの人だなんて、誰のことなんですよ、誰もいやしいじゃありませんか」

「あ、そうでしたか、お蝶さん、お前さんにはあの方が聞えませんでしたね」

「わたしにや、なんにも聞えやしませんよ」

「なぜ、私はあの時に、大きな声をして呼んで上げなかつたんだらう、あの人、あんなに虐まれて殺されている間、それをここにじつと立って、だまって聞いていた私の心持が、自分でわかりません」

「ほんとに何を言ってるんでしょうね、弁信さん、お前さんの言うことが、まだわたしにはサツパリわからない」
「私も私で、いよいよ自分の心持がわからなくなつてしまいました、ただ、ああして虐まれて若い女の人になぶり殺しに遭っているのを、遠くに離れて聞きながら、私はそれを助けて上げようとしないで、何かの力ですくめられて、その音を聞いている間、私もかえっていい心持のようになつて、しまいまでだまってそれを聞いていた自分の心持が、自分でわかりません」

「なんだか、私はぞくぞくと凄くなつてきましたよ、弁信さん、お前さんのその面が凄くなつてきました、どうしたらいいでしょうね」

「ああ、わたしもどうしていいか、わからない、今までわたしは、こんな心持になつたことはありませんから」
「早く帰りましょうよ、早く本所へ帰ってしまひましょ」

うよ」

この時に行手の方で、騒々しい人の足音と、声とが起りました。

「今、人殺しと言ったなあ、たしかにここいらだぜ、おいらの僻耳じゃねえんだ」

こう言つて駈けて来る人は一人だが、その後ろに附添つて、真黒い大きな犬が一頭。

「ムク、ここいらだぜ」

その声こそは紛うべくもなき、宇治山田の米友の声であります。

「人殺しと言ったのは、ここいらなんだ、だからおかしいと思つたんだ」

彼は今、どこにいるのか知らん。先日も両国橋の上へ姿を現わしたところを以て見れば、やはりあの界限にいるものと見なければなりません。弥勒寺橋の長屋にいるものとすれば、まだ机竜之助の世話をしているのでしょう。竜之助の世話をしているといえ、あの男の挙動が、ことにあの身体で夜な夜なの出歩きが、米友の単純な頭を以てどうしても理解ができないで、眼を睜っていることも、米友としては無理のないことです。

「ああ、いた、いた」

米友は闇の中に躍り上つて、地団駄を踏み立てているものらしい。ほどなく二人の辻番と、宇治山田の米友と、盲法師の弁信と、お蝶との五人が、路上に横たわつた一つの屍骸を取巻いて、弁信を除いての四人の眼は、いずれも火のようになって、提灯をその屍骸につきつけてい

るのであります。

「女だ！」

米友が叫びました。

「若い女だ、あだっぽい女だ」

提灯を突きつけている辻番が驚く。

「まあ、かわいそうに」

お蝶は、さすがに眼をそむけてしまいます。

「斬疵ではない、突いて抉つたものじゃ、みずおちあたり

りにただ一箇所」

「左様、ほかには疵らしいものはないようだ、確かに突

いて抉つたものだが、刃物は槍か、刀か」

「無論、槍傷ではない刀傷だ、してみると試し斬りでは

なく、遺恨だろう」

「左様、恋の恨みでこうなつたものらしい」

「して、女の素性はいったい何者だ」

「左様、しかるべき町家の娘だな。おい姉さん、お前さ

ん、ちよつとこの着物を見てくれないか」

辻番は提灯を振向けて、眼をそむけて戦っているお

蝶を呼びました。

「ちよつと見てくれ、着物の縞柄を、ちよつと見てもら

いたいのものだ」

「どうしたらいいでしょう、わたしは怖くって……」

お蝶は慄えながら、それでも再び屍骸の傍へ寄つて来

て、

「京お召でございます、藍に茶の大名の袷、更紗染に縮緬の下着と二枚重ね……」

お蝶はようやく着物の縞目だけを見て、こう言いました。
「なるほど」

辻番の一人は、矢立と紙を出して、お蝶の口書を取ろうとするものらしい。

「帯は茶の献上博多でございましょうね」

「それから？」

「羽織は黒羽二重の加賀絞り……」

「なるほど、そうして髪は島田、鬘甲の中差、まあ詳しいことは御検視が来てからのことだ。ところでお前方」

二人の辻番は、改めて米友、弁信、お蝶三人の者を篤と見廻し、

「三人のなかで、誰がいちばん先にこの死骸を見つけなすった。いやまあ、後先はドチラでもよいが、拘り合いだから三人とも、御検視の来るまで控えていてもらいたい、御迷惑だろうがどうも已むを得ん」

そこへ、また一人の辻番が、菰をかかえてやって来て、「エライことが出来たなあ」

菰を女の屍骸へうちかけて、

「好い女だなあ、恋の恨みだろうか。いったい、ここでやつつけたのか、殺してここへ持って来たのか」

菰をかぶせてしまうのを惜しそうに、その屍骸を見比べていると、

「エエ、それは殺してここへ運んで参ったのではありません、あの土手の上で、なぶり殺しにして置いて逃げました、殺した人は男には違いありませんけれども、決

して恋の恨みではございません、殺したくって、殺したくって、堪らない人なのでございます、よほど腕の利いた人で、無暗に人が殺したいのです、手にかけておいて、矢の倉の方へ逃げました」

突然にこう言い出したのは、人数の後ろに超然として、見えない眼をみはっていた弁信であります。

「エ、お前はそれを見ていたのかい」

辻番もその他の者も驚きました。弁信の言い分があまりに突然であったから、辻番らは呆気に取られているところへ検視の役人が来しました。それで型の如く、年頃、恰好、着類、所持の品、手疵の様子を調べた上に、改めて宇治山田の米友に向いました。

「其方のところと、姓名は」

「鐘撞堂新道、相模屋方、友造」

米友はこう言って名乗りました。

「お前はこの夜更けに何用があつて、こんなところへ通りかかった」

「エエ、それは、人を迎えに来て……」

米友が少々口籠るのを見て、お蝶が横合いから口を出しました。

「わたしの帰りが遅いから、それでこの人が迎えに来てくれたのでございます」

そこで検視の役人は、お蝶と弁信をしりめにかけて、

「お前たちはまた何しに、こんな夜更けにここへ通りかかったのだ」

「エエ、それは……」

お蝶も、その返事に少し口籠ったが、そこは米友よりも上手に、

「この人のお帰りを送って参りましたが、この人をお送り、この人は眼が不自由なものでございますから」

「お前はどこのものだ」

検視の役人は改めて、盲法師の弁信に問いかけます。

弁信は例の通り泣きそうな面をして、

「私は本所の法恩寺の長屋におります弁信と申して、こうして毎夜毎夜琵琶を弾いて市中を歩いている者でございます、琵琶は平家の真似事を致すでございます、生れは房州の者でございます、ついこのごろ、江戸へ出て参ったんでございますから、地理も不案内でございますまして……」

「よろしい」
なお弁信が何事か言おうとするのを、役人は打切って、米友の方に問い、

「友造とやら、もう一度、お前がこの死人を見つけ出した顛末を述べてくれ」

「それは、前に申し上げた通りなんだ、人殺し——という声が聞えたから、それで飛んで来て見ると、この通りなんだ、そのほかには何もいっこう知らねえ」

「それで、その人殺しという声のした時に、怪しい者の逃げて行く影をみとめたということもないのか」

「真闇で、人の影なんぞはちつとも見えなかった」

米友が頭を左右に振って、肯せぬ形をした時に、ま

たしても盲法師の弁信が後ろから、抜からぬ面で口を出しました。

「その人は、確かに向うへ逃げました、この人をなぶり殺しにしておいて、そつと忍び足で両国の方へ——矢の倉というんでございますね、あちらの方へ逃げてしまいました」

「ナニ、矢の倉の方へ逃げた？ それをお前は見たのか、お前は盲人ではないか」

検視の役人は、容易ならぬ眼つきで弁信をながめました。附添いの者は、やはり険しい面で、提灯を弁信に突きつけたが、弁信は一向それを怖れずに、

「はい、ごらんの通り盲人でございますから、勘がよろしうございますから、それがわかりましたのでございませう。こうして抱き締めて、苦しがついているところを刀を抜いて、一突きに突いて、なぶり殺しにしていたところが、私には、はっきりとわかりました」

「ナニ、お前は、いよいよ不思議なことを言う盲人だ」

検視の役人は米友の訊問を打捨てて、弁信の糺問にとりかかろうとします。お蝶は傍でハラハラするけれども、盲目の悲しさに、弁信は一向、役人の権幕を見て取ることができずに、

「私にも、あの時の心持が自分ながら不思議でなりませぬ、ナゼ、それと知ってあの時に、大きな声をして、あの人を驚かしてやらなかったのか、その心持がどうしてわかりませんのでございます」

「いよいよ以て、お前は不思議なことをいう盲人だ、お

前のその勘で見たことを、逐一言ってみるがよい」

「へエ、申し上げましょう、お笑いになってはいけません、私の勘のいいことは、初めての人様はみんな本当になさらないことが多いんですから、どうぞ笑わないでお聞き下さいまし。それはこんなわけでございます、殺されたその女の方は、この近処の稲荷様へ願がけに参ったものらしいでございますね、その帰りをあの悪者が待ち受けていたものでございます、そうして通りかかったところを柳の蔭から出て、ぐっとこうして羽搔締めにしてしまったから、女の方は何も言うことができなかつたんだらうと思われ、それとも、あんまり怖いから、ついで口が利けなくなつてしまつたのかも知れませんが、それから暫くして、お前は幾つだ、と悪者が聞きました時に、女の人が十九だと申しました。それからのは申し上げられませんが、私がぼんやりしてしまつたのでございませ、何が何だかエレキにかけられたように私は、それを聞きながら、咽喉がつかまつて一言も出ないで、立ち竦んでしまつたんでございます。ところが、わからない上に、もわからないことは、その悪者が病人なんでございますよ、それが全く不思議でございます、歩くにさえやつと息を切つて歩く病人でございます、その病人が、あなた、やつぱり、ああして辻斬に出て歩きたがるんですから、ずいぶん腕は利いているんでございましょう。それにあなた、あれは、ただ人を斬つてみたいという辻斬とは全く違います、ただ斬つただけでは足りないんでございませ、ああして、ただ斬り殺しにしなければ納まらないのでござ

います、苦しませて殺さなければ、虫が納まらないというものでございましょう、全く怖ろしいものです。それを私が、こちらに立つて、ちゃあんと手に取るように聞き込みながら、それで一言半句も物が言えなかつたのは、いま考えると私が怖かつたからでございます、もしあの時に、私が何か言おうものならば、きっと私が殺されてしまいます、私が殺されなければ、このお蝶さんが殺されてしまいます、ずいぶん離れてはいましたけれど、トテモ逃げる隙なんぞはありやしません、それで私はスクンでしまいました、動けなくなつたのは、自分の身が危ないからでございますね、お蝶さんがかわいそうだからでございますね。そのうちあの女の人が、なぶり殺しに逢つてしまつて、悪者は右手の方へと逃げて行きました、まもなくとんとんと人の足音でございました、それが、友造さんとおっしゃるそのお方で、その時になつて初めて、私の身体からエレキが取れて自由になりました。悪者をお探しになるならば、それは病人のお武家で——ああ、もう一つ肝腎なことを申し忘れました、その病人の悪者は、私と同様の盲目でございませよ、病人で盲目で、そうして辻斬をして歩きたがるのですから、全く、今まで私共は聞いたことも、むろん見たこともない悪者なんでございます」

弁信が順を逐うてスラスラと述べ立てるのを、役人も、辻番も、お蝶も、酔わされたように聞いていたが、なかに米友が、

「あつ、ムクがいねえ、ムクがどこかへ行つてしまつ

た」

いまさらに気がついて、再び地団駄を踏みました。

十九

その翌朝になって、弁信、お蝶、米友の三人ともに、役所から許されて帰ることになりました。

一旦、鐘撞堂新道のお蝶の主人の家へ引取った米友は、それから出直して、どこへ行くともなしに歩きながら、「どうも、わからねえ」

その面おもてに一抹の暗雲がかかって、しきりに首を傾けながら歩くのです。ついには棒を小脇こわきにかかえたまま、両腕を組んで、

「わからねえ、わからねえ」

やがて辿たどりついたのは、例の弥勒寺の門前でありす。

門へ入ろうとする途端に、

「やあ、ムク、ここにいたのか」

出会頭であいがしらにバツタリと逢ったのは、昨夜柳原の土手で別れたムク犬であります。

「ムク、昨夜、手前てめいなんだっておいらを置いてけぼりにして、どこかへ行っちゃまったんだ、先廻りをしてこんなところへ来ているとは人が悪いな、人じゃなかった、犬が悪いんだ——だが、お前は良い犬だ」

米友はムク犬の頭を撫でてやりました。ムク犬は米友に従って薬師堂の裏手へ廻ると、そこで米友がピタリと足を留め、

「なるほど、この百日紅さるすべりの木がいい足場になるんだ、この枝を伝わってああ行くと、塀せきを躍り越すなんぞは盲目めくらにもできらあな。よし、今日はひとつ、あの枝をぶち落としといてやれ、どうなるか」

板塀の上から枝を出した百日紅の樹を、しきりに睨にらんでいました。

「だが、やっぱり、わからねえことは、わからねえ」

米友は、百日紅の枝を仰ぎながら、ここまで来ても、やっぱり思案に暮れて、いよいよその面おもてを曇らしていきます。

実際、このごろ中は、米友の頭では解釈しきれないことが起っているに相違ないのです。それで米友はこのごろ中、毎晩のように、夜中になると匆はね起きて、例の手槍を肩にして外へ飛び出します。飛び出す時の米友の面おもては、

「ちえッ、また出し抜かれたな」

という表情で、或る時は町家の軒下をくぐり、或る時は屋根の上を躍り越えたりして、深夜の市中を走ります。たしかに、何者かを追おっか蒐かけて出たのだが、その帰り来た時には、いつも呆然ぼうぜん自失じしつです。何物をも認めることなくして出かけ、何物をも得るところなくして帰るのです。帰り来ると、がっかりして、囲炉裏いろりの傍に座を構えながら、枕屏風まくらびょうぶを横目に睨にらんで、

「ちえッ」

舌を鳴らして額の皺しわを深くしながら、火を焚きつけることが例になっているのであります。

昨夜——むしろ今暁のことは例外でありました。今まで、そうして深夜に物を追蒐けて出ても、その当の目的とするものを何もつかまえては帰らなかつたように、自分も、夜番にも、辻番にも、尻尾を押えられるようなこととはなしにここまで来たが、昨夜はついに、辻番と検視の役人の前に立たねばならなくなりました。

しかし、それは、鐘撞堂新道の相模屋の雇人であるということ、お蝶の巧妙な証明も役に立って無事に釈放されて、今になって帰っては来たものの、昨夜、家を飛び出した時の要領は、依然としてその要領を得ないで帰っては、空しく百日紅の枝に向つて、その余憤を漏らすというようなわけでありました。

その時に、板塀の中で釣瓶の音がします。誰か水を汲んでいるに違いない。そこで米友は、板塀の節穴から中を覗きます。

長屋の裏庭の井戸ばたで、水を汲んで面を洗っているのは、机竜之助でありました。

「ふーん」

それを節穴から覗いた米友は、やっぱり呆れ返った面をして、嘲笑をさえ浮べました。

手拭で面を拭いてしまった竜之助は、その手拭を腰にはさんで、盥の水を流しへザブリとこぼし、それからまた手探りで釣瓶を探つて、重そうに水を釣り上げると、それを盥にあけておいて、縁側の方へ歩いて行く。

「ふーん、ばかにしてやがる」

米友がその後ろ姿に冷笑を浴びせている間に、竜之助

は縁側まで行くと、そこへ絡げて置いた両刀を携えて、井戸端へ帰つて来るのであります。そうして、刀の柄だけをザブリと盥の中へ入れて、それをしきりに洗っているものようです。柄だけを洗っているのか、或いは中身の血のりでも落しているのか、そこは井戸側の蔭になつて、よく見ることができませんけれども、やがて、すつくと立ち上つて、両刀を小腋にして、憂鬱極まる面をうなだれて、悄悄と縁側の方に歩いて行く姿を見ると、押せば倒れそうで、いかにも痛み上りのような痛々しさで、さすがの米友が見てさえ、哀れを催すような姿なのであります。

「あいつは幽霊じゃねえのか知ら、どうもわからねえ」

そんな、やつやつしい姿で縁側のところまで辿りついた竜之助は、そこへ両刀をそつとさしおいて、日当りのよいところの縁側へ腰をかけました。だから、ちょうど、米友の覗いている節穴からは正面にその姿を見ることができません。その蒼白い面を、うつむきかげんに、見えないう目で大地のどこやらを注視しながら、ホツと吐息をついている。その呼吸までが見るに堪えないほどの哀れさであるけれども、日の光は、うららかなといつていいくらいのかやいた色で、この人のすべてを照らしておりました。

「おや？」

この時に、また米友を驚かせたものがあります。それは、今まで自分の身の辺にいたムク犬が、いつのまにどこをくぐつてか、もう庭の中へ入り込んでいて、しか

も、極めて物慕わしげに、竜之助の傍へ寄って行くことでありませぬ。

ムクが近寄ると、竜之助がその手を伸べて頭のあたりを探って撫でてやると、ムクは、ちゃんと両足を揃えて、竜之助の傍へ跪きました。

竜之助は何か言って犬の頭へ手を置いて、犬と一緒に仲よく日向ぼっこをしている体です。

これは米友にとつては、非常なる驚異でありました。ムクは、そうやすやすと一面識の人に懐くような犬ではない。彼は善人を敵視しない代りに、悪意を持った者に対しては、ほとんど神秘的の直覚力を持った犬であります。まあ、伊勢から始まって、この江戸へ来ての今日、ムクがほんとうに懐いている人は、お君と、おいらと、それからお松さん——その三人ぐらいのものだと思つている。しかるに、いま自分の傍を離れて、かえつて、見も知りもせぬ、あの奇怪極まる盲者の傍へ神妙に侍つているムクの心が知れない。

米友は何か知らん、胸騒ぎがしました。じつとしていられないほどに惑わしくなりました。声を立ててムクを呼び立ててみようとして、身を屈めて、手頃の小石を拾い取るや、右の手をブン廻すと、小石は風を切って庭の中に飛んで行きました。

「誰だ、いたずらをするのは」

「おいらだ、おいらだ」

米友は百日紅の枝を伝つて、塀を乗り越してやって来ました。米友の投げた小石をそらした竜之助は、刀を抱

えて、障子をあけて、家の中へ入ってしまいました。

「ムク」

そのあとで、徒らに眼をパチパチさせた米友は、持っていた杖の先でムクの首のあたりを突いて、

「お前は家へ帰れ」

そう言つてから、いま竜之助があけて入った障子を細目にあけて、

「おい先生、どうしてるんだ、寝てしまったのかい」

それでも返事がないからズカズカと上つて行きました。それで枕屏風の上から中を覗き込んで、

「おい先生、お前、昨夜はどこへ行った」

その言葉は、米友としても突慳貪であります。

「どこへも行かない」

「冗談いっちゃいけない、今度という今度こそは、すっかり手証を見たんだ。お前は、昨夜辻斬をしたな」

「そんなことがあるものか」

「ねえとは言わせねえ。驚いちゃったよ、その身体でお前が毎晩、辻斬に出るといふんだから。初めは、どうも本気になれなかつたんだが、昨夜という昨夜は驚かされちまつた」

「誰がそんなことを言った」

「誰が——呆れ返っちゃうよ、現在、おいらが実地を見届けてるんだ、お前はいったいどういう了見で、あんなことをやったんだ、さあ、返事を聞かせてくれ、返答によっちゃあ、こっちにも了見があるぜ」

「友造、お前の了見というのは、そりやどういう了見なのだ」

「どういう了見だってお前、無暗に人殺しをする奴は、そのままには置けねえじゃねえか」

「そのままに置けなければどうするのだ」

「ちえッ」

米友は舌打ちをして、足を二つ三つ踏み鳴らしてから、
「俺らも槍が出来るんだぜ、槍が」

この時も、その持っていた手槍で、焦れ^じったそうに畳を突き立てました。

「友造、友造どん」

「何だ」

「お前は先年、甲府にいたことがあるだろうな」

「何を言ってるんだ、甲州へ行っていたことはあるよ」

「その時な」

「うん」

「ある晩のことだ」

「なるほど」

「正月のことだったろうな、寒い晩だ、それに怖ろしく霧の深かった晩なのだ、その晩に甲府の城下に、破牢のあったのを知ってるだろうな、牢破りの」

「知ってる、知ってる、それがどうしたんだ」

「その晩に、お前は甲府の町を、その手槍を担いで一字に飛び歩いていたらう」

「それに違えねえ」

「その時だ——その時に、お前は命拾いをしているのを

忘れやすまいな」

「命拾い？ 命拾い？」

米友は、そう言われて仔細らしく小首を傾けたが、ハタと自分の頬^ほぺたを打って、

「うむ、あれか」

「友造どん、あの時から、わしはお前を知っている」

こう言われた時に、米友が再び躍り上って、

「この野郎！」

と一喝^{いっかつ}しました。ここでこの野郎と言った意味はなんだかよくわかりませんが、今まで気のつかなかった疑問が、一時に解け出したような狼狽^{ろうたい}の仕方、米友が、
「やい、起きてくれ、起きてくれ、ももんじい^{もんじい}を煮て酒を飲ませるから、起きてくれ」

机竜之助は蒲団^{ふとん}をかぶって、あちらを向いて寝ました。ももんじいと酒とで、米友が誘惑を試みようとしても、起きる気色^{けしき}はありません。

「友造どん、甲府でやった辻斬も、このごろ出歩いてやる辻斬も、みんな拙者^{しわざ}の仕業だ、あのとき以来、斬ろうとして斬り損ねたのは、お前ぐらいのものだ、このごろもどうかすると、お前を斬ってみたいとも思うが、お前がいけないと世話をしてくれるものがないからな」

「冗談じゃない」

米友は眼を円くして、
「恩に被せ^きなくってもいいやな、斬れるものなら、斬ってもらおうじゃねえか」

と言いながら、米友は枕屏風の上から、そろそろと竜之

助の枕許へ這い寄って来ました。

「おっと、危ない」

竜之助は寝ていながら、その片手を伸べて、枕許の刀を押えました。

「おい、先生」

「何だ」

「起きてくれ」

米友は蒲団の上から、寝ている竜之助をゆすぶりました。

「聞きてえことがあるんだから起きてくれ、野暮を言うところじゃねえ、お前ほどの腕の者が、人を斬ったからって、それを今ここでかれこれ言うような俺らじゃねえんだ。斬っていい奴もあるし、斬られちゃ悪い奴もあるんだ、斬られて浮べねえ奴もあるし、斬られて冥加になる奴もあるんだ、はばかりながら宇治山田の米友も、槍にかけては腕に覚えがあるんだぜ、覚えがあるから、こう言っちゃ悪かろうわけはねえんだ。筋が立つところなら、百人でも千人でも斬りねえな、米友も斬りたくなったらずいぶん斬られて上げましょうさ。もし、筋が立たなけりゃ、おいらは、もうお前と一緒にいるのは御免だ、ことによったら、おいらがお前の命を取るぜ、あつたらお前を、一人で、こんなところへ抛りっぱなしにして置いて、のたれ死をさせるのも業腹だからなあ」

米友はこう言って、竜之助の枕許で腕組みをしました。「済まない、友造どん、お前にはなんとも済まないことだが、筋が立つの立たぬのというたちの仕事ではないの

で、拙者というものは、もう疾うの昔に死んでいるのだ、今、こうやっている拙者は、ぬけ殻だ、幽霊だ、影法師だ。幽霊の食物は、世間並みのものではないけない、人間の生命を食わなけりゃあ生きてゆけないのだ、だから、無暗に人が斬ってみたい、人を殺してみたいのだ、そうして、人の魂が苦しがつて脱け出すのを見るとそれで、ホツと生き返った心持になる。まあ、筋を言えば、そんなようなものだが、このごろはそれさえ、根っから面白くなくなつたわい、人を斬るのも、壁を斬るのと同じようにあつけないものじゃ。辻斬が嫌になったら、その時こそ、この幽霊も消えてなくなるだろう、まあ、それまでは辛棒していてくれ」

竜之助は寝返りも打たないで、洒然としてこう言つてのけました。

「うーむ」

枕許に腕を組んでいた宇治山田の米友が、それを聞いて深い息をして唸り出したが、頓着せず、

「友造どん、お前の槍の手筋はどこで習つたか知らないが、まるで格外れで、それで、ちゃんと格に合っているところが妙だわい。拙者の如きは、これでも幼少より正式に剣を学んだのじゃ、先祖以来の剣道の家に生れて、父と言ひ、師と言ひ、由緒の正しいものだ。拙者だけは破格だ、師に就いたけれども師がない、型を出でたけれども型が無い、一生を剣に呪われたものかも知れぬ、生涯、真の極意というものを知らずに死ぬのだ、もし、神妙というところがあるなら、それを知って死にたいもの

だ
が
な」

竜之助は平然として、こんなことを言い出したが、今日はその述懐に、多少の感慨があるようです。